

あさおん☆魔術決闘へ
ニスフェンシング

大根ハツカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

射精魔術、それは世界最先端の魔術。

即効性のある性魔術と数億単位の生贄を組み合わせた効率的かつ最強の術式。

これは、『射精魔術』を絶滅させるため、女性になってしまった少年科学者と性魔術を忌み嫌う魔女が奮闘するお話。

カクヨムにも掲載。

目次

| | | |
|----------|----------------|-----|
| 1 / 1 2 | チンコ☆なくなった | 1 |
| 2 / 1 2 | ヘイ・デイルド・デイルド | |
| 19 | | |
| 3 / 1 2 | ヤリサー襲来!!? | 50 |
| 4 / 1 2 | ルールの穴をズツコンバツコ | |
| ン | | 73 |
| 5 / 1 2 | 金玉十二宮 | 97 |
| 6 / 1 2 | My Son 我がムスコ | |
| よ | | 126 |
| 7 / 1 2 | 宗聖司 ■■■ 仮説 | 150 |
| 8 / 1 2 | バキューム・フェラチオンヌ | |
| という怪物 | | 176 |
| 9 / 1 2 | 賢者タイム突入 | 207 |
| 10 / 1 2 | WHITE ONAHO | |
| LE | | 233 |
| 11 / 1 2 | 鋼鉄の処女 | 261 |
| 12 / 1 2 | ちんぽ☆デカいのね | |
| 302 | | |
| 13 / 1 2 | あさだち?? 神格新造ネオ | |
| アームストロング | | 361 |

1 / 12 チンコ☆なくなつた

ある朝、目が覚めるとオレは女になっていた。

「……………は？」

いやいやいやいや待て待て待て。

気が動転している。正気を保て。

動揺を抑え、一から朝の状況を思い返す。

と言つても、大した事はない。

目が覚めたら胸が圧迫されたかのように苦しく、よく見ると胸おっぱいがまるで風船のように膨らんでいたのだ。

「落ち着け……まだおっぱいがあるだけだ（？）。女になつたつて決まったわけじゃない。腫れてるだけって可能性もある……!!？」

自分の声が思ったよりも高くて驚いた。

でも、まだ分からない。もしかしたら風邪かもしれない。そう現実逃避する。

ひとまず、胸を締め付けるパジャマを脱ぎ捨てた。

上の服と共に、徐々にズボンもずらし始める。

恐る恐る、男の象徴がまだ付いているかを確認する。

「……………デカいな」

オレの男の象徴が、ではない。

デカいのは膨らんだ胸のおっぱいのことである。白く肌色のマシユマロに阻まれるせいで、見下ろすだけじゃ股が確認できない。

そおーつと、股に手を伸ばす。

ゆつくりと下された指先はやがて溪谷の底に辿り着き、そして――

――虚空を掴んだ。

何となく気付いてはいた。

だって、朝なのに勃っていない。

ズボンを突き抜く感触がない。

のろろとベッドから起き上がり、洗面台に向かう。

途中、床に放置されていた学生証を拾い、宗聖司そうせいじと書かれた名前の横に貼つてある冴えない男子大学生の姿を網膜に刻み込む。

洗面台に着くと、まず顔を洗つた、

目が曇っているのなら洗い流す。まだ寝ぼけているのなら目を覚ます。ただ夢であれと一心に願いながら、顔を水に浸した。

そして、顔を上げた。

目の前の鏡に映っていたのは美少女だった。

ボサボサだが艶やかな黒髪、シミひとつ存在しない白い肌、デカイとしか言いようがない胸おっぱい。

学生証にいた半目の男の面影はある。元々オレは女顔だったし。だけど、オレの顔はこんなに小さくなかったし、オレの腕はこんなに細くなかったし、オレはこんなに可愛くなかった。

とうとうオレは現実を認め、観念するように呟いた。

「これがニュースで言つてたTS病か……」

Tips

◆TS病とは、男性のホルモンバランスが崩れ、朝に目が覚めたら女性に変わってしまっている病気のこと。

◆正式名称は突発性性転換症候群。英語圏ではSudden Sex Reversal Syndromeと呼ばれている。

◆原因は未だ解明されていないが、有力な説としてウイルス感染説があり、感染経路は粘膜からの接触感染が濃厚だと考えられている。今の科学技術では治療できない。

ぼーっと歩きながら、視界の端で動画サイトを見る。

まるで空中に映像が浮かんでいるように見えるが、実際にそう見えるだけである。空中に映像を浮かべる方法は幾つかあるが、そんなものを作るよりも視覚だけを誤認させた方が簡単で安上がりなのだ。

つまり、コンタクトレンズ型のAR携帯電話である。この島——AIランドだと、一

セットで5ドルくらいの廉価品だ。

視線で画面を操作するのが少し難しく、あまり人気ではないのだがオレは気に入っている。

動画をぱつと見た感じだと、TS病は今や男性の0.05%が罹患している感染症らしい。

0.05%と聞くと少なく思えるが、今の世界総人口が100億人で、男性がその半分の50億人いると考えれば、世界中に250万人は患者がいることになる。自己申告していない人も含めればもっとだ。

そして、男性がそれだけ女性に変わったという事は、結婚率やひいては出生率にもそれだけの影響が出ていると考えられる。死ぬ事はないらしいが、将来的な人口には大ダメージを与えているだろう。

そんな風に説明している動画を、現実感なく見ていた。

慌てて家を飛び出してしまったが、病院に行くわけにはいかなかった。動画によると、TS病だと診断された患者は特定の地域へ隔離されるらしい。まあ、感染症なので当然なのだが。

だが、オレはある事情があつて隔離される訳にはいかない。少なくとも、来週の日曜日を迎えるまでは。

かといって、このまま大学に向かう訳にもいかない。声は風邪だと言って、顔はマスクを付けて誤魔化せるかもしれないが、このデカイ胸おっぱいだけはどうにもならない。

「なんかもう嫌になつてきた……。おっぱいが揺れるせいでめちやくちや視線を感じるし、しかもおっぱいの付け根は痛いし……」

男物のパジャマでうろついてるつても理由なんだろうけど。でも、視線を感じるのは男性の割合が高いので胸おっぱいを見られてるのは間違いないだろう。

ブラジャーを買いに行こうか迷う。

ネットで注文してもいいのだが、それだと男性で登録してあるオレのアカウントがブラジャーの購入履歴によつて変態へと変貌してしまう。

誰に見せるわけでもないのだろうが、それはちよつと避けたい。

というか、そもそもお金は払えるのだろうか。

今時、現金を持ち歩いている人なんかいない。ほとんどは生体認証による電子決済が基本だ。だが、今のオレの肉体は遺伝子レベルで変わっているんじゃないのか……？

「まさか無一文じゃないだろうな……」

つーか、生体認証が弾かれたら家の鍵も開けられないんだがどうしようか。野宿しかないのか。いつまでもパジャマのままだと補導もされかねないし、服とかもどうしよう。

これならいつそのこと病院に行った方がマシなんじゃないか？ と、不安に襲われて空を見上げる。

空には三月なのに夏のように照りつける太陽と、天まで手を伸ばす一本の巨大な塔が聳え立っていた。

それこそは、この学術都市A I ランドでも類を見ない程の科学技術が結集された超巨大建造物。宇宙と地球を結ぶ宇宙エレベータ。オレが病院に行けない理由。

「安心してくれよ。テメエのお披露目までは、オレも粘ってみるからさ」

まずはブラジャーだ。

当たって碎けろ、と。デパートへと足を踏み出す。

T i p s

◆A I ランドとは、太平洋赤道域に浮かぶ常夏の巨大人口浮島。国際条約によって、どの国にも属していない。

◆正式名称は Assembled Intelligence Island。21世紀後半半に作られた、地球温暖化を食い止める為の近未来環境モデル都市が始まり。

◆今では自然科学に留まらず、あらゆる分野の科学者を呼び寄せ、世界中の研究機関を集積させた学術都市になっている。

無理でした。

海岸沿いで黄昏^{たそがれ}る。太陽は水平線に沈みかけていた。

案の定と言っていいのか、生体認証はどうやら今のオレでは反応しないようだった。つまり、オレの所持金はゼロだった。

機転を効かし、身につけていた幾つかの電子端末を質屋に入れたことで少々のお金を手に入れた方がいいが、それも服を一式買うので使い切った。

そして、買った服も問題だった。

デパートで見たブラジャーは余りにも高かった。ブラジャーを買えば他の服を買えなくなるぐらい。

だからこそ、オレはブラジャーを諦めて近くで売っていた水着を購入した。それだけ

で彷徨くのも恥ずかしいので、一応羽織る用のパーカーも買った。

つまり、オレの今の装備はコンタクトレンズ型AR携帯電話、学生証、パーカー、水着、サンダルである。

痴女っぽいがまあ大丈夫だろう。常夏の島あるあるで水着の女性なんてそこら中にいるし。

「さあてつと、こつからどうすつかな……」

補導というひとまずの危機を脱したオレは、次の行動を考える。

衣食住の衣は手に入れた。次に必要なのはご飯と寝床。お金がないオレにはどうしようもない二つだ。

寝床は最悪の場合は道で寝るとして、一番ヤバイのはご飯だ。クリーンな街を目指しているアイランドには雑草一つ生えておらず、産業スパイによる密入国を厳しく取り締まっているため海の幸も狙えない。

……友達の家には押しかけるしかない、か。

でも、オレが女になった宗聖司であると信じてくれるだろうか。

「くそつ、どつかにチンコ落ちてねえかなあ……」

「あるぜえ〜」

「うえっ!?」

独り言に背後から答えがあり、驚いて飛び上がる。

そこにいたのはサングラスを掛けた茶髪の女。日に焼けた小麦色の肌に、それを水着と言えるのかってぐらいに小さい水着、腰には香水のようなものをぶら下げている。オレが言うのも何だか痴女っぽかった。

「キミも女になったクチっしょ?」

「……………っ!?? なんで分かった!??」

「立ち振る舞いが男丸出しだったからなあ。チンコ探してんだよなあ? 同業者のよしみで、そんぐらい貸してアゲルぜ」

そう言つて、女(?)は路地裏へと進んでいく。

追いかけるか、逃げるか。だが、相手の話ぶりだと彼女(彼?)もTS病患者なのだろう。情報はあるに越した事はない。

加えて、話が本当なら男に戻る方法を掴めるかもしれない。

「おい、アンタの名前は?」

「…………アドウルテル。そう名乗ってる」

それ以降、アドウルテルは喋ることなく黙って暗い路地を進む。

オレもその後も着いていく。

数分経つただろうか、アドウルテルはある廃ビルの中にズカズカと踏み込み、天井からぶら下げられたそれらから一つもぎ取り、オレに手渡した。

「じゃーん、キミが欲しかったのはこれっしょ？」

確かに、それはチンコだった。

どっからどう見てもチンコだった。

だけど――

「――いや、ディルドじゃねえかつ!!?!?!?!?!」

Tips

◆ディルドとは、勃起した男性器を模した性具。張形、またはコケシとも呼ばれる。

◆主に、女性の自慰の道具として用いられる。性機能の衰えた男性が、自身の陰茎の

代用として用いることも。

◆地域によつては、子供から大人になる性的通過儀礼の道具としての意味合いも持つ。

「うん？ チンコが欲しいって言つてたつしよ？」

「いやそれは、男に戻りたいって意味であつて欲求不満的な意味じゃねえよ！」

オレからすればごく当然のことを言つた。

しかし、アドウルテルは首を傾げ、何かに気がついたみたいに目を見開いた。

「……どういうことだ？」

代替魔杖テイトルドを求めていない？ いや、そもそも意味が伝わって

いないのかあ？」

「何言つてんだアンタ？」

「まさかつ、一般人か……？！？ そういや、TS病つてというのが流行つてたなあ……！！

？」

「は？」

「悪い事をしたぜえ。ごめんなあ。でも、魔術を知つてしまった自分を恨めよお？」

「何を言つて——」

ズドンツツツ!!?!!?!!? と。

オレの顔面スレスレが爆発した。

拳銃のような軽い音ではなく、落雷と言つても差し支えない轟音だった。

「あつ、……………あ?」

「……………やっぱり精度は落ちてんなあ。女になつてんだから仕方ねえけど」

思わず、尻餅をつく。

腰が抜けた。立ち上がることもできない。

魔術なんてオカルトは信じられない。今のだつて、何らかの科学技術による現象なの

だと信じている。

でも、だけど。

もしかしたらという疑念と、単純な死の恐怖によつて、体が縛り付けられている。

「うん……………? そうせいじ……………キミが宗聖司か?」

尻餅をついた際にポケットから落ちたのだろう。

オレの学生証を見て、アドウルテルは笑った。

「なあんだ、謝る必要なんてなかったぜ。元からキミがターゲットだったんだからなあ」
「……なにを、言ってる……?」

「キミがああ宇宙エレベータを設計したんだろう、宗聖司くうん?」

……その通りだ。

オレは宇宙エレベータへネオアームストロングの設計を担当した。そして、宇宙エレベータはほとんど完成しており、お披露目自体もあと少しでだった。なのに。

(こんな、こんな所でオレは死ぬのか。デイルドに囲まれて……)

情けない死に方だ。

チンコを失って、偽物のチンコに囲まれて。

こんな場所で死にたくなんかない。

だけど、運命は人間を待たない。

アドウルテルはオレの眼前にデイルドを突き付けて言った。

「安心してくれていいぜ。女になったとはいえ、『射精魔術』は痛みもなくキミを殺せる」

直後。

白濁色の光がデイルドに灯り——

ドゴアツツ!!?!!?!!? と。

廃ビルの壁が横殴りに破壊された。

予想外の誰かによる介入だった。

土煙舞う瓦礫の上に、その少女は立っていた。

銀と言うには鈍く、灰と言うには艶やかな髪、鋼色の髪を腰まで垂らす魔女。

肌の露出は少ないにも関わらず、ボディラインの出る黒衣に身を包むことで、背徳的な色気を醸し出す傾国の女。^{エロス}
^{ファム・ファタール}

身に付ける装飾品は、右手の人差し指に嵌められた無骨な鉄の指輪だけ。華美な装飾なぞ一切ない。それはそうだ。本人の圧倒的な美があれば、それ以外の飾りなどは蛇足に過ぎないのだから。

その美しさに、オレは見惚れた。

オレは声すら出せなかった。

だから、初めに反応したのはアドウルテルだった。

「^{アン・メイデン}鋼鉄の処女……!!? もう嗅ぎつけたのかあツ!!?」

「あら、その呼び名は聞き飽きましたわ。^{わたくしなまえ}私の魔法名はヴィルゴです」

コツコツ、と。

足音を鳴らせて少女は歩く。

少女の視線は鉄よりも冷たく、ギロチンのようにアドウルテルの心を切り刻む。それは十三階段を登る心境にも似ていた。

「噂には聞いていましたが、本当に女性になつていらっしゃるようですわね。決闘に負けたのでしょう？ 貴方程度の実力ならば当然でしょうが」

「ぬかせえ!!? 『射精魔術』を扱えない時代に置いてかれた魔女如きがあ……!!?」

アドウルテルが手に持つデイルドに白濁色の光が灯り、それが弾丸の形になつて放たれた。

しかし、ヴィルゴはそれを躲すまでもなく、視線だけで弾丸を焼き払つた。

「本当に雌墮おちぶれちしましたわね、フラター・アドウルテル……いえ、ソロール・アドウルテルとお呼びした方がよろしくつて？」

「……………殺すツ!!?」

激昂したアドウルテルは腰に携えていた瓶を床に叩きつける。

パリンツッ！ とピンク色の液体が床にぶち撒けられた。同時に、変な匂いが廃ビル内に広がる。

「げほつげほつ、何だこれ……なんか甘い?」

「吸つてはいけませんわ。わたくし私ならともかく、魔術師でもない貴方には毒でしょう」

ヴィルゴはオレを庇うように立った。

状況は何も分らない。ただ一つ分かるのは、ヴィルゴという少女は恐らくオレの味方だろうということだけ。

アドウルテルはデイルドを構え、呪文を告げた。

「聞け、我が目を受けし汝、魔法名ヴィルゴなる者よ。我魔法名アドウルテルは汝に決闘を挑む。神よ、師よ。ここに我、汝に対し我が魔術を以て性豪の証を立つる者なり」

ピイン、と。

場の空気が張り詰める。

まるで霊的な場所のようだと本能的に感じた。

「ここから先は私にも余裕がありません。出来る限り守りはいたしますが、自分の身は自分で守ることを心掛けてくださいまし」

「あつ、え？ 何が、始まるんだ……？」

「魔術師同士の決闘となれば、やる事はただ一つですわ」

魔女は真剣な顔でこう言った。

「始まりますわよ、〈魔術決闘〉が……!!?」

T i p s

ベニスフエンシング

◆ 魔術決闘、それは魔術師達の命よりも大事なモノを賭けた戦い。

◆ これは性魔術を忌み嫌う魔女が、『射精魔術』なんて巫山戯たモノを絶滅させる物語である。

2 / 12 ハイ・デイルド・デイルド

「始まりますわよ、ベニスフェンシング〈魔術決闘〉が……!!?」

「……………ぺにす、ふえんしんぐ……???'」

なつ、なんだそのトンチキな名前は……!!??

一旦、客観的にこの場を見てみよう。

床や天井に広がる魔法陣、廃ビルに充満するピンク色の煙。

中にいるのは三人の女、全員が薄着。

水着にパーカーを羽織っただけの女（オレ）。

超々ミニの水着を着てデイルドを握りしめる女（アドウルテル）。

ボデイライン丸わकारいの黒衣を纏った女（ヴィルゴ）↑New!!??

痴女の集会か……??

そんな風に頭を悩ませている間にも、アドウルテルがぶち撒けたピンク色の液体は煙

となつて薄く広がっていく。

「なんだコレ？ 体温が上がって、心臓がバクバクしてる。多分、血流も速くなつてんな。興奮作用のある薬物か……？」

「これは〈媚薬香水〉。今となつては〈魔術決闘〉に必須の香煙魔術ですが、源流は魔法のハーブにありますわ。効果としては使用者の性的絶頂を促し、魔術師をトランス状態にまで持つていく………と言っても伝わらないでしょうね」

「……名前自体は下ネタみたいなのに、理由はちゃんとしてることが分かった」

ヴィルゴが説明してくれるが、あまり頭に入らない。

どういうテンションで聞けばいいんだろうか。

美少女が真面目な顔で下ネタ言つてるのつて逆に反応に困るな。照れていたらまだ興奮できたのだが、真顔すぎて医者の診察と同じ気分だ。

それは兎も角、魔術とかいうオカルトの真偽はひとまず置いておいて、魔術を使いやすくする為の補助器具みたいなものか。運動で言う所のドーピングが近いだろう。

「それだけじゃねえぜ。〈魔術決闘〉の規則の一、決闘空間は魔術師の宣誓おまじないと〈媚薬香水〉によつて展開される。展開されたからにはキミたちはルールに従わざるを得ず、敗北時にはペナルティも負うぜえ!!？」

「オレもかつ!!？」

「いいえ。〈魔術決闘〉^{ベニスフエンシング}の規則の二、対戦相手は挑戦者が宣誓時に視認した者となる。彼が見たのは私^{わたくし}でした。決闘空間内にいる以上ルール自体は適用されるでしょうが、敗北時のペナルティはありませんわよ」

アドウルテルの言葉に焦るが、ヴィルゴに落ち着かされる。

……そのヴィルゴが余計な一言を付け加えるまでは。

「ただし、敗北時のペナルティが適用されることになったとしても大して変わりませんわ。どうせ私が勝つのですし」

ピキツ、と。

アドウルテルのこめかみに青筋が浮かぶ。

その一言は、魔術師^{ブライド}の誇りを大きく傷つけた。

「……………それは、〈魔術決闘〉^{ベニスフエンシング}は挑戦者の勝率が高いことを分かった上で言っただなあ？」

「ええ。挑戦者と被挑戦者、戦闘専門の魔術師と調薬専門の魔女、最先端の『射精魔術』と時代遅れの魔女術^{ウイッチクラフト}。その程度のハンデで私達の実力差が埋まるとでも思っただ？」

「……………ツ!!？」

直後。

ボボボボツツツ!!??!!??!!? と。

ディルドから架空の熱量が出力される。

それも一撃ではない。機関銃マシンガンのように、魔術で構築された数多の魔弾ひのやが降り注ぐ。杖じゆうは天井からぶら下げられた無数のディルド。

威力は一撃ごとが雷にも匹敵する。宇宙エレベータを設計する上で気象学にも精通する必要があったオレでさえ、そう思ってしまうほどの轟音と爆風であった。

だけど。

オレがそう思えるだけの余裕はあった。

ヴイルゴが行ったのは簡単なことだった。

まるで傘を作るように、人差し指で空中に逆三角形を描いた。ただ、それだけで、魔弾の方が逆三角形を避けるように逸れた。

「なあッ……!?」

「火の矢の雨……ソドムとゴモラを滅ぼした硫黄の火ですわね？」

「なぜっ、……なぜだあ!?」

「ですが、硫黄の火を落としたのは大天使ガブリエル。かの者は水属性が当てられていますわ。対して、貴方の張型デイルドは杖としての機能を与えているため、属性は火に当てはまる。四属性の調和ならともかく、二属性のズレは魔力の無駄と効果の低下に繋がりますわよ」

「アブラカタブラだとツ!?? そんな初歩中の初歩でどうして天使の力を防げた……!?」

「天使というネームバリューを過信しましたわね? 貴方の魔術は天使オリジナルには遠く及ばない。私わたくしの魔除け程度で十分ということですよ」

一瞬の攻防。

しかし、それだけで両者の優劣が明らかになった。

アドウルテルはギリギリと歯を食い縛り、ヴィルゴはそんな彼女の様子を嘲笑う。

「そんなツ、そんなはずはない!!? ボクはかつてハーレム50にも達した男だぞお!!? もう一度だツ、今度こそスキミの魔除けガラクダは破れるツ!!?」

「ええ、よろしくつてよ。納得するまで試しなさい。貴方が絶望するまで待つてあげますわ」

再び、同じ光景が繰り返される。

アドウルテルはデイルドを振るい、ヴィルゴは逆三角形を描く。

「だ、けど、オレは嫌な予感に襲われた。」

「アドウルテルの口元がほんの少し歪んでいた。」

「宇宙エレベータの利権をめぐるって、経済界の怪物共と交渉の場で鎬を削ってきたオレには分かる。あれは、何か秘策がある者のする顔だ。」

「オレには魔術なんてものは分からない。」

「今の一瞬だけを見れば、ヴィルゴの方が魔術の腕は上なのかもしれない。」

「だけど、彼女は言っていた。自分は戦闘の専門家ではない、と。だとすれば、マズイ。たとえボクシング界のチャンピオンであろうとも、殺し合いの場ではあっさり殺されることだってあるのだから。」

「だから、二人の魔術が発動する寸前にオレは動いた。」

「あつ……、……え？」

「パリイン、と。」

「ヴィルゴの魔術が碎け散る。」

「逆三角形の傘まくを破って、火の矢の雨が降り注ぐ。」

「弾け飛ぶ魔術マジックの赤い破片は、散らされた破瓜はじめての血のようでもあった。」

の怪我を癒すことはできない!!？」

声が遠くなる。

視界が暗くなる。

意識が薄くなっていく。

だけど、最後まで胸に感じる誰かの体温だけは消えなかった。

Tips

ベニスフェンシング

◆魔術決闘とは、魔術師同士が決闘する際に用いられる術式。『射精魔術』の隆興に伴って生まれた。

◆名前の由来は、ヒラムシの性行為。決闘の敗者は勝者の雌奴隷となり、女体化することから名付けられた。

◆勝者は敗者から生命力を搾り取り、簡単に強くなることができるとため、現代の魔術師は魔術の研鑽よりも決闘に時間をかける。

「……………あ、……………?」

意識が、浮上する。

だけど、頭が回らない。

オレはうつ伏せで地べたに転がっていた。

腕に力を込めて上半身を起き上がらせ、周囲を見渡そうとし――

「……………ツツツツ?」

「ちよつ!?? まだ動いてはいけませんわよ!??」

――背中を灼く痛みに襲われる。

しかし、痛みが気付け薬の代わりに意識をはつきりとさせた。

オレが失神する前までの記憶を思い出す。

うつ伏せのまま、疑問に思ったことを尋ねる。

「……………アドウルテルはどうした?」

「天井に設置してあったディルドを一つずつ外していますわ。恐らく、次からは浮遊して自律稼働するでしょうね」

今までは攻撃の方向は一定だったが、次からはそれすらも立体的にぐちゃぐちゃになるのか……。厄介だな。

「そんなことよりも貴方、背中は大丈夫なんですか？ 私わたくしの作った膏藥を塗りましたが、痛み止めや回復を早める効果はあっても、その場で治すものではないですわよ」

「あー、痛いけど問題ねえよ。今、ARコンタクトレンズ携帯電話を弄イジって視界を点滅させてる。電気信号を狂わせてるから、もうそろそろ痛みも感じなくなる頃だよ」

「……………現代の『科学』はそんな事もできますの？」

「これぐらい大した事ねえよ。脳科学が専門じゃないオレでも出来るんだ、この島じゃそう珍しいことじゃねえ」

特に、ウチの大学じゃ疲労を感じさせず研究に没頭できる点滅のさせ方が電子ツールになって配布されていた。……一部のバカはそれを更イジに弄イジって中ラ毒リつてたりもしたのだが。

「よく分かりませんが、痛く無いのなら良しとしますわ。私わたくしは再び戦たたかつてきますのでこちらでお待ちください」

ウイルゴは儂い笑顔でそう言った。

ダメだ、そう思った。

内から溢れる衝動に任せ、頭よりも先に体が動いた。

「待てよ」

痛む身体を無視して。

震える膝を誤魔化して。

オレは無理矢理に立ち上がった。

「あつ、貴方!!? 起き上がっては……!!?」

「テメエじゃ勝てねえんだろ?」

「……………、なんのことですか?」

「惚けてんじゃねえぞ。理由は分からねえが、テメエの魔術オカルトはディルド野郎には効かなかった。他になんか手はあるのか? 無いからここでオレを見守ってたんだろ? 勝ち目がねえのに立ち向かってどうすんだ」

「……………いえ、勝ち目ならありますわ。〈魔術決闘ベニスフエンシング〉の規則の四、決闘には制限時

間があり、それを過ぎれば挑戦者側の敗北となる。それまで逃げ切れれば私の勝ちになり

ますわ……!!?」

「そんなルールがあるなら相手も警戒してるに決まってる。その上でゆっくりしてるって言うなら、制限時間まではまだまだなんじゃねえの?」

凶星を突かれたのか、ヴィルゴはたじろぐ。

「何を焦ってる？ 勝ち目がないのに戦いに挑むとか負けるつもりなのかよ……………」
「いや、待てよ？」

「……………勘がいいですわね」

〈ペニスフェンシング魔術決闘〉とかいうオカルトはまだ理解できていない。だけど、今までの話を聞いていて分かることもある。

決闘空間からは決闘が終わるまで出られない。

決闘に敗北してもオレはペナルティを受けない。

だとすれば……………

「わざと負けてオレを外へ逃す気か!?!?」

ヴィルゴは何も答えない。

その代わり、笑顔でこう言った。

「背中に空を飛ぶ膏薬を塗っておきましたわ。ピンク色の煙が晴れたら、空を飛んでお逃げなさい。痛みが引いたのなら逃げられるでしょう？」

それは、少女の健気な献身で。

それは、魔女のせめてもの償いで。

彼女は自らの身を犠牲にしてもオレを助けようとしてくれた。だって、それ以外に助かる方法なんてないのだから。

「だからッ、待てつつつてんだろうがッ!!?」

そ·ん·な·常·識·な·ん·ぞ·知·る·か·!!?

天·才·の·オ·レ·が·つ·ま·ら·ね·え·ル·ル·に·縛·ら·れ·る·理·由·な·ん·て·ね·え·!!?

オ·レ·は·ヴ·イ·ル·ゴ·の·手·を·掴·ん·で·止·め·た·。

「なっ、なんで……?」

「何が?」

「貴方はただ巻き込まれただけですわよ……!!? この真つ暗な業界とは何も関係ないですわ!!?」

なのに、どうして……!!?」

「ああ!!?」

なんかイラつとした。

オレは逆ギレのように怒鳴り返す。

「どうしても何もねえよ! オレのために女の子が一人死ぬんだぞ!!? そんなもの許

◆規則の三。決闘空間内では、決闘する両者は対戦相手以外からの外的要因での干渉を無効化する。

◆規則の四。制限時間は使用した媚薬チャームフェロモン香水の量で決定され、制限時間内に勝負が決まらなかった場合は挑戦者の敗北となる。

◆規則の五。戦闘区域は地形によって決定され、制限時間終了か勝敗が決まるまで出ることはできない。

◆規則の六。魔杖ベニスの破壊が敗北の証となり、元から魔杖ベニスを持っていない場合は代替魔杖ディルドやそれに類する物が魔杖扱いとなり、それも無ければ自動で敗北する。

◆規則の七。敗者は約一日間魔力テクノブレイク枯渇に陥ると共に、雌奴隷に変えられ、勝者に命を委ねる。

「それで？ 何か策はありますか？」

「ないね。そもそもルールさえ良く分かってねえのに思い付く訳ねえだろ」

オレの発言を予想していたのか、ヴィルゴは期待外れのような顔をすることなく、何やら考え込んでいる。

現在、オレ達は作戦会議を行っていた。

アドウルテルがこの階に乗り込んで来るまでの短い間、ヤツを打倒するための方法を探っている。

そこでふと、疑問に思ったことをヴィルゴに尋ねる。

「……そもそも、アンタは何ができるんだ？ デイルド野郎アドウルテルは爆発みたいな派手な現象を引き起こしてたけど、アンタも同じことができるのか？」

「わたくし私には無理ですわよ。魔術とは、『類感』と『感染』の原理によって成立する遠回りな方法なのですわ。わたくし私の魔除けだって、本当に魔除けの効果で攻撃を防げたのか、それとも偶然当たらなかつただけなのか、判別がつかないほど曖昧なもの。例外はそれこそ、『射精魔術』くらいのものですわよ」

「『類感』と『感染』……？」

「ええーと………めんどくさいですわね。それは後から説明しますわ。兎に角、わたくし私はあくまで調薬専門の魔女。使える魔術も、虫除けやら暗示やらの初歩的な魔術ばかりで、派手なものと言ったら空飛ぶ膏薬くらいのものですわね」

オレからすればそれも凄いものに思えるが、なぜかこちらの魔術が無効化される状況じゃ大した意味がない。

困ったものだと頭を悩ませる。

「……そういう貴方は何ができますの?」

「見ての通り何も出来ねえよ。このAR携帯電話コンタクトレンズに入ってる機能を幾つか使えるぐらいか?」

「ふふん。あらあら、随分と役立たずですわね……………いえ、お待ちくださいまし」

ヴィルゴは、ハツとした顔でこちらを見つめる。

そして、今までで一番動揺した震える声で呟いた。

「貴方、どうして私の手を掴んでいるのですか…………?」

ヴィルゴが見つめる先は彼女の腕を掴む右手。

勝手に戦いに行こうとする彼女を止めるため、掴んだままになっていた手だった。

「は? 何を言ってるんだ?」

「ベニスフェンシング

〈魔術決闘〉の規則の三ツ、決闘空間内では対戦相手以外からの干渉を無効化する!

先程、私を庇ったこともそうです! 貴方が私やアドウルテルの行動を阻害できるのはルール上あり得ませんわ!!?」

そうか、彼女の手を掴むのも、アドウルテルの攻撃を防ぐのも、対戦相手以外からの

干渉に当たるとか。

考えてみれば、当たり前。だが、今更な疑問が浮かぶ。

オレが襲われた理由は宇宙エレベータへネオアームストロングだけだと思っていた。だけど、もしかしたら。

(……オレ自身に魔術に関係するナニカがあつた……?)

ヴィルゴの腕を離し、思わず自分の掌を眺めてしまう。

「……………儀式に介入できる特殊体質……? いえ、ですが^{ベニスフェンシング}は神判を代理す

る神聖な決闘ですわよ? 或いは……いえ、今重要なのはそこではありませんわね」

ヴィルゴもヴィルゴで、考えが纏まったようだ。

その目には、先ほどまでの敗北を覚悟した悲壮感はない。

瞳の奥に宿るのは、勝ちを確信した絶対的な自信だつた。

「貴方のその『横紙破り』^{ルルレイバー}とでも呼ぶことができる体質を活用すれば、勝ち目があるかもしれないせんわ。ただし、一つお願いがありますわ」

「いいよ、何でも言ってくれ」

ヴィルゴは「何でも」という言葉を聞いてほくそ笑んだ。

その顔は、まさしく魔女に相応しい悪辣さであつた。

「では、文字通り何でもやって貰いますわよ。セージ？」

T i p s

◆類感と感染とは、魔術を成立させる基礎となる二つの原理のこと。全ての魔術は大雑把に分類すると、この二つに分かれると言う。

◆類感とは、形の似たもの同士は相互に影響し合うという原理。身近な具体例で言うと、てるてる坊主を吊り下げるとは、太陽と似た形を作る事で晴れを呼ぶ儀式である。

◆感染とは、一度接触したものは、一つのものであったものは相互に影響し合うという原理。身近な具体例で言うと、卒業式に第二ボタンを渡すことは、心臓に近い胸と接触していたボタンを渡す事で繋がりを強固にする儀式である。

ペタンペタン、と。

アドウルテルは一步ずつ階段を上がる。

その周囲には、アドウルテルを守るように空中を浮遊して飛び回る代替魔杖デイルドの姿があった。その姿は、まるでロボットアニメの無線操作小型攻撃端末トのようでもあった。そして、階段を登った先には魔女が待ち構えていた。

「随分と遅かったですわね。遅漏は嫌われますわよ?」

「まだ男を経験しても無い未通女おほこがよく言うぜ!!?」

邂逅一番、悪態を交わす。

既に対戦相手と話すことはない。

そんな余地があるのなら決闘は始まっていない。

「宗聖司そうせいじはどうしたあ? 無様にも一般人に護られて、責任の重さに耐えきれなくなっ
て見捨てたのかなあ?」

「あらあら、自らの欲を満たすことしか能がない灰魔術師グレイウィザードがよくほぎきましたわね。それほど快楽に耽りたいならば、一人で自慰オナニーでもやってればよろしいのに」

「魔女がよく言うぜえ。オナニーを繰り返してんのはキミ達の方だろうがあ。処刑される魔女の特徴を忘れたとは言わせないぜえ?」

「それは魔女狩りの言いがかりだと知りませんでしたの?」 伝統のない新米魔術

師は随分と無知ですこと」

「減らず口を叩くなあ、魔杖ベニクスを持たない魔女おんなの分際でえ……!!?」

だからこそ、これも単なる挑発ではない。

魔術とは、魔術師の精神状態に大きく左右される術である。つまり、口撃も魔術戦において攻撃の一種なのだ。

「分かっているじゃありませんか。〈魔術決闘ベニクスエンシング〉の規則の六、魔杖ベニクスの破壊が敗北の証となる。魔杖ベニクスを持たない私わたくしの、何が魔杖ベニクス扱いされているか気づかねば勝ち目はないのではな
くって?」

「考えるまでもないぜ。当ててやる、悪魔ククリトリスの乳首リスだろお?」

「……………っ!?」

「いかにも古臭い魔女の末裔が考えそうなことだぜえ!!? 時代は既に移り変わって
るっていうのになあッ!!?」

言葉と同時。

見破られたヴィルゴが動揺する隙を突くように、一斉に全ての代替魔杖ディルドが起動する。

そして、息をつく暇もなく戦いの火蓋が切られた。

ポポポポツツツ!!?!!?!!? と。

機関銃ひののような魔弾あめが放たれる。

一発ごとに天使の力が込められた、ソドムとゴモラを滅ぼした硫黄の火。ヴィルゴの魔術を無効化する浄化の火。

対するヴィルゴは、人差し指から指輪を外す。

そして、彼女を襲う弾幕に指を差した。

直後のことだった。

恐るべき火の矢の雨は一瞬にして消滅した。

「……………は？」

「貴方の魔術無効化術式の要は張形かなめ、デイルドですわね？」

呆然とするアドウルテルを放って、ヴィルゴは当然のように相手の魔術を指摘した。

「一部の地域では、処女が性交の際に出す血を穢れと見做していましたわ。それを避けるため、通過儀礼として張形デイルドが用いられることがある。……つまり、張形には穢れを浄化する効果がありますわ。処女の魔女が使う魔術なんでものは幾らでも浄化できるのでしょうね。」

「それが分かったからと言って、キミには何もできない!!? そのはずだぜ!!?」

「魔女の人差し指は呪い指。私が指差したものは呪いがかけられますわ。そして、

私が込めた呪詛はごく簡単。『自分より劣位であれ』、ただそれだけ。他者を自己よりも下に蹴落とすだけのありふれた嫉妬のろいですわ」

「それに何の意味が——」

「分かりませんか？ 私わたくしより劣位ということは、私わたくしよりも穢れているということ。天使の力を扱うことで穢れという判定を誤魔化していたのでしようが、私わたくしに指差された魔術は穢れそのものとなりますわ。ならば、貴方の浄化は貴方自身の魔術を霧散させますわよね？」

「……………ツツツツ??？」

アドウルテルは悔しさを滲ませて拳を握る。

本来ならば、こうも上手くはいかない。

呪いとは穢れそのものだ。ディルドから放たれた魔術を呪った所で、呪いが無効化されて終わりだ。

だけど、例外はある。

ヴィルゴとアドウルテルでは魔術の腕が段違いだった。魔術の発動までの時間に大幅な差があった。それこそ、浄化する暇もなく呪いが発動するほどに。

「……………まだだぜツ!!？」 キミが呪えるのはディルドから放たれた魔術のみ！ ディルド自体を呪うことはできない！ 後は手数の問題だあ!!？ 指一本しかないキミと違っ

て、こつちには全部で100本の代替魔杖があるツツツ!!?」

100本の代替魔杖。

ただでさえ脅威であるその数の暴力は、〈魔術決闘〉においてはより恐ろしいものへと変貌する。

〈決闘規則〉、規則の六。

魔杖の破壊が敗北の証明となる。逆に言えば、四肢がもがれようが心臓が止まろうが魔杖が破壊されない限り敗北することはない。

そして、アドウルテルの代替魔杖は決闘において魔杖扱いされるアイテムである。100本の代替魔杖を全て破壊しなければ、アドウルテルに勝つことはできない。

「さあ、いつまで保つのか見物だぜえ!!?」

「させるとお思いで?」

ゴフツツツ!!? と。

足元から白い煙が広がる。

アドウルテルは反射的に口元を押さえた。

魔女の粉薬。力量差を見せつけられて揺らいだアドウルテルの魔術を前に、ヴィルゴが用意した秘密兵器。

(毒かあ!!? 心を整えろ!!? まだこちらが優勢ツ、浄化術式を絶やしさえしなければ

ば問題なく勝てる相手だぜえツ!!?)

展開していた代替魔杖を集める。

魔術を無効化する術式でその身を守る。

そして――

「――残念、はったりですわ」

直後。

天井から垂直に落ちて来たオレが、アドウルテルの背中をナイフで斬り付けた。

「……………ツツツツ!?!?!?」

虚空から突然に現れたように見えただろうが、実際はそう不思議なことじゃない。

手品の種は簡単。オレはヴィルゴから空飛ぶ膏藥を塗られていた。その力で、天井付

近で浮かんでいただけだ。

加えて、白い煙での目眩しはアドウルテルの視界を妨害するが、オレのコンタクトレンズはサーモグラフィのようにアドウルテルの体温を感知する。オレだ

けは煙の中でも自由に動ける。

そして、魔術マジックを無効化無効化する術式は、物理的な攻撃を無効化できない!!?

死角から来たる第三者。

背中を走る赤い傷いたみ。

あり得るはずのない『横紙破り』。

度重なる混乱に、アドウルテルは思考が止まる。

そんなアドウルテルにもう一撃加えようと、オレはナイフを振るい——

——ゴツ!!? と。

代替魔杖代替魔杖による自動防衛で吹き飛ばされる。

「ゴッがっ、げばあッ?」

「セージ!!?」

何度も見えた魔弾ひのやではない。

アドウルテルの思考が止まっていたからか、それとも別の要因のせいか、オレを襲ったのは飛行する代替魔杖代替魔杖による衝突だった。

しかし、それでも巨大な鉄の塊にぶつかつたと錯覚するような威力を感じた。まるで、前世紀に存在した交通事故のようだ。

「……………どういう反則トリックだあ？ 洗脳すること、対戦相手からの間接的な干渉だと誤認させた……………？ ……いや、今はどうでもいいぜ」

好機チャンスは過ぎ去る。

アドウルテルは戦闘専門の魔術師。細かい理屈を後回しにして、頭を切り替え混乱から回復することができている。

「自信満々だから何か策があるのかと警戒していたが、こんな物か……………もう終わらだぜ、〈鋼鉄アイアンメイデンの処女〉」

「ええ、終わりですわよ。……………貴方のね？」

「……………は？」

その瞬間、アドウルテルの瞳は不審な動きを捉えた。

それは、オレの手にあるもの。

すなわち、アドウルテルのディルドだった。

「……………おい、待て」

一番初め、この廃ビルに入った時。

オレはアドウルテルにディルドを渡された。

恐らく、ヤツはオレが同じ境遇の魔術師なんだと誤解したのだ。だからこそ、そんな風に親切を働いた。それが最悪の結果となって返る。

これこそが、ヴィルゴの考えた策。

オレが不意打ちの魔術でアドウルテルを倒すというもの。

魔術師として未経験者どのオレでも使えるように、使った魔術は非常に簡単なものだった。

術式として近いのは、丑の刻参りらしい。藁人形の中に対象の髪を入れ、それを釘で打つことで呪いをかける魔術。これは、藁人形と人間という『類感』の原理と、対象の髪という『感染』の原理を利用している。

今回の魔術は、丑の刻参りを同じ形のディルドという『類感』の原理と、術者の血という『感染』の原理で置き換えたただけだ。そして、魔女じゃないオレの魔術を、アドウルテルは無効化できない。

「はあはあ……ヤツたか？」

「ええ、ヤリましたわ。〈魔術決闘ベニスフエンシング〉の規則の七、敗者は約一日間魔力枯渇テクノブレイクに陥る。もう

魔術で抵抗することも、勝者の命令を拒むことも出来ませんわ」

ドサツ、と。

アドウルテルは地面を膝につき、涎を垂らして白目を剥いている。何処からどう見ても意思がない。

最後に、敗北したアドウルテルに向かって、ヴィルゴは吐き捨てるように言った。

「もう聞こえてないでしょうが、貴方の敗因は初歩を甘く見たこと……ただ、それだけですわ」

Tips

◆ルールレイバー横紙破りとは、ベニスフエンシング魔術決闘の規則の三を無視して、決闘中の魔術師に干渉できる

そうせいじ宗聖司の特殊体質（仮）のこと。

◆ベニスフエンシング魔術決闘において、外的要因からの干渉は神の力を借りた魔法円によって無効化されている。即ち、それを無視できることは、あらゆる神殿・聖域を破壊できる性質を持つことに他ならない。

◆ただし、本当にルールレイバー横紙破りという特殊体質が存在するかは定かではない。名前や性質は、あくまでヴィルゴの予想に過ぎない。

3 / 1 2 ヤリサー襲来!! ?

「……………30分遅刻、お寝坊さんですわね」

「テメエが用意した服が際どすぎんだよつ、馬鹿野郎！」

水着の代わりに外で歩きやすい服を用意してくれて言ったのに、なんで恥部チクビだけ紐で隠せるような服を用意してんだよ…………!! ?

超々ミニの水着を着てたアドウルテルといい、魔術師には露出狂しかいねえのか!! ? お陰で、着るかどうかで30分悩んだ。結局、昨日と同じで水着パーカー痴女スタイルに落ち着いたのだが。

「……………ま、服を買ってくれたこと自体は感謝しとく。あと、ホテル代と飯代も。金は絶対に返すから」

「気にしなくていいですわよ。巻き込んだのはこちら側ですし。それより、貴方の家まで帰せなくて悪かったですわね」

「そりゃ仕方ねえよ。オレの家は機密も多い関係上、セキュリティたけランクが高え。逆に

魔術オカルトで自由に不法侵入された時の方が恐ろしいよ」

現在、オレ達は空港付近のショッピングモールにいた。

空港付近は丸々一帯が観光特区となっており、このショッピングモールにも1000を超える免税店が軒を連ねている。そのため、この辺りはいつも大量の人で混雑している。

人が多いということは、人混みに紛れやすいということだ。オレ達は魔術師の追手から身を隠すためにここへ来ていた、のだが――

「――人がつ、多すぎますわっ!!?」

「来週の日曜から万博エキスポも始まるしな。特に今回の万博エキスポは、七大学術都市の一角たるA1ウッチランドが会場で注目度も高い。……知らねえでここに来ようって提案したのか?」

「知ってたらっ、こんな迷子になりそうな場所には来ませんでしたわよっ! だいたい貴方、TS病とやらに感染してるのでしょうか? こんな人混みにいて大丈夫ですの!!?」

「感染防止用の抗菌薬を飲んでるから唾液中のウイルスは死滅してるし、そもそもTS病の感染力は飛沫感染するほど強くねえよ」

「ううっ、人混みに流されますわああ!!?」

「テメエが尋ねたんだから聞けよ! ほら、手を取れ。ウイルスはケータイ持ってねえ

んだから、逸れたら一巻の終わりだぞ」

右手を差し出して言う。

ヴィルゴはオレの掌てのひらを見つめると、汗を擦るようにゴシゴシと自分の手を押し付ける。頬は少し赤く染まっている。

「なんだ照れてんのか？」

「違いますわよっ！ 魔女としてツ、魔術的に重要な意味を持つ手を預けていいのか迷っただけですわっ!!？」

「なら服の袖でも掴んどけ」

ヴィルゴは葛藤するように表情を変え、渋々とでも言いたげにちよこんと後ろからオレの裾を掴む。

じわり、とヴィルゴの指先から汗が裾に滲む。それを見て、ぼろつと本音が溢れる。

「……汗つかきなんだな」

「デリカシーがありませんわねこの男……!!？」

おっと、マズイ。怒らせたっぽい。

しかし、そうは言いながらヴィルゴは裾から手を離すことはないの、そこまでの怒

りではないのだろう。

「……貴方、私に手首を掴まれている状態でよく軽口を叩けますわね。接触は最も初歩的な魔術発動の条件ですわよ？」

「悪い、ちよつと魔女の生態に興味があつてな」

「しかも実験動物扱いですわ!!？」

こちとら未知の生物には目がない生粋の科学少年だ。

ツチノコとか河童とか、ワードだけでもう心惹かれる。魔女もまあそこら辺と大体一緒だろう。

それで? と、目で話の続きを促す。

「………私の一族……というか、魔女の葉は魔女の体液と混ぜて使いますわ。ですの
で、私は体液が多く分泌されるように調整されているのですわ。だから、私が魔女
の中でも特別に汗っかきな訳じゃありませんわよ!」

「へ〜」

「信じてなさそうな声ですわね!!? ほつ、ほんとですわよ!!? 現につ、私は汗だけ
じゃなく潮の量だつて……!!?」

「しおっ!」

「………、この話はやめにしましょう」

気まずい沈黙が支配する。

話を逸らすため、さつきから気になっていたことを尋ねる。

「本当に歩いてるだけでオレ達の痕跡を消せるのか?」

「いいえ、痕跡を完全に消すことは不可能ですわ。魔力の痕跡は、匂いのように残り続けますもの。『科学』でも、匂いを完全に取り除くのは不可能でしょう?」

「いや、最近の消臭剤ならできるけど」

「……………そもそも、占いなどは回避不可能ですものね」

誤魔化したな。

完全消臭を謳っている消臭剤なんて、今時珍しくもない。コンビニでいくらでも売ってるし、今では完全消臭は当たり前前の前提として、除菌などの付加価値を付けて売っている。

完全消臭するだけの液体なら、オレだってデパートにある材料だけで作れる。

「じゃあ、今は何をやってんだ?」

「この人混みにいる者全てを私だと誤認わたくしするように偽装し、魔術の効果が他所に流れるように仕向けていますわ。罪や穢れを形代かたしろに託す『大祓おほはらえ』に近いと言えば伝わりますかね?」

「伝わらねえな」

「……日本人がみな知っている行事ではないですね。ええと、身代わり人形みたいなものですね。『感染』の応用で同一人物判定をさせているだけですが、ばら撒けば多少の時間稼ぎにはなりますわ」

ネットセキュリティ会社を立ち上げたヤツに、似たような話を聞いたな。

インターネット上に公開されたデータは、完全に消すことはできない。故に、ネット上に流出した機密情報を本気で隠したいなら、大量のダミー情報をばら撒いた方が確実だと。

『科学』も『魔術』も、極めれば行き着く先は同じ場所になるのだろうか。

「随分と念入りなんだな」

「当然でしょう。セージ、昨晚アドウルテルから聞き出したことを忘れましたの？」

もちろん、忘れちゃいない。

だけど、忘れていたかったのは事実だ。

なんせ――

「貴方を狙うのは悪い魔術師だけじゃなくってよ？」

T i p s

◆ AIランド万博^{エキスポ}とは、2119年3月26日から同年9月25日までの184日間に渡って行われる国際博覧会。正式名称は、The International Exposition, Assembled Intelligence Island, 2119。

◆ 「宇宙と人間が共存する未来世界」が博覧会統一^{テーマ}主題。メイン会場とメイン展示物は、宇宙エレベータへネオアームストロング。

◆ 万博マスコットとして、コスモソーセイジくんが存在する。このキャラについて、モデルであろう天才少年科学者はノーコメントを貫いている。

話は昨晩まで遡る。

アドウルテルは『灰』の魔術師……お金で依頼を受ける傭兵みたいなヤツらしい。

ヴィルゴは魔力枯^{テカノブレイク}渇?に陥って命令を拒む精神力を失ったアドウルテルから依頼者を聞き出し、背後でどんなヤツが暗躍しているのかを探っていた。

「依頼者の名前、もしくは勢力は知りませんか？」

「……………負けた時のため……………、……………個人情報^{個人情報}は聞かないようにしてるぜ……………」

「用心深いですわね。では、依頼内容は？」

「……………依頼内容……………それは、『宗聖司』^{そうせいじ}の殺害……………」

「……………ツツツツツツ!!?!」

オレからすりや驚くまでもない当然の言葉。そんな事だろうと、状況から察することができる。

オレの命が狙われているという状況に疎むことはあれど、反応はそれ以下でもそれ以上でもない。

だが、ヴィルゴは大きく表情を変えて驚いた。

「何を驚いてんだ？ コイツは宇宙エレベーターが目当てで、設計者のオレを狙ってるんだ。それを防ぎにお前が来たんじゃないやねえのかよ」

「ええ、私は『黒』^{わたくし}から貴方を守る為に此処へ訪れましたわ。ですが狙っているというの^のは命を、ではありませんわよ？」

「……………は？ そもそも『黒』って何だ???!」

「魔術優生思想、魔術師^{自分達}が世界を支配すべきだと思ってる邪悪な魔術師の集まりみたいなもの^なのですわ。ヤツらの目的は宇宙エレベーター。破壊したいのか、それとも何らかの魔

術に利用したいのかまでは不明ですが……」

「……………待て、確かに不自然だ」

目的は宇宙エレベータの破壊か利用。

だとしたら、オレを殺す必要はない。いいや、むしろ死んでもらっては困るはずだ。

何故なら、『黒』とやらがオレを狙うのはオレが宇宙エレベータの設計者だからだ。

もつと言え、オレの頭の中にある設計図に宇宙エレベータの脆弱性が記してあるからだ。

破壊と利用のどちらが目的だとしても、達成には宇宙エレベータに侵入するのが最短ルート。しかし、『科学』に疎い魔術師は宇宙エレベータの最新セキュリティを突破できない。故に、オレの設計図があつて初めて侵入経路が考案される。

つまり、宇宙エレベータの設計図を必要とする『黒』がオレを殺そうとするはずがない。

「頭の中を読み取る魔術を使っていた……いえ、それは有り得ませんわね。アドウルテルはそこまでの力量を持った魔術師ではありませんわ。だとすると………これは、つまり、ピラミッドの設計者を王の副葬品として埋めるようなものですわね」

「どういう、ことだ？」

「ですから」

ヴィルゴは目を伏せて言った。

「貴方の持つ設計図を『黒』に渡さないために貴方を殺す。これは『白』の……私が所属する正義の味方側の犯行ですわ」

「……………あ？」

思考が、止まった。

犯罪者にも、正義の味方にも命を狙われる状況。

警察に見捨てられたと言えば、状況が最も近いのだろうか。

「私の所属している『白』も一枚岩ではありませんわ。私のような穏健派わたくしもいれば、周囲の被害も考えずに暴れる過激派わたくしもいますわ。……と言つても、ここまで濁くつていとは思いませんでした」

「おま、えも……『白』つてことは……………」

「……私わたくしも『白』の一員たる白魔女ホワイトウィザード。組織の方針自体には逆らえせんわ」

「……………っ!!？」

目の前の少女が敵に回る。

絶対的な味方だと言信しかけていた魔女を失う。

それが、何よりも恐ろしい。

「で・す・が」

「へ？」

「無辜の民を守るためとはいえ、何の罪もない貴方を殺すなんて気に食わないですわね。
私わたくしは暫し『白』にお暇いとまを頂き、あらゆる勢力を敵に回しても貴方の味方となりますわ」

「……………ツ!!？」

溢れそうになる涙を堪える。

魔女が女神のように見える。喜びたい。彼女に全てを預けて、眠ってしまいたい。

だけど、この小さな少女に縋ってはいけない。背中の火傷がジクジクとそう訴える。

たった一人の魔術師との戦闘だけで、彼女は負けかけた。これ以上の負担なんてかけさせられねえ。

「オレを見捨てろ、ヴィルゴ。オレのために人生を棒に振るなんて……………!!？」

「巫山戯ないで下さいませ。貴方の為に言っているのではありませんわ。私わたくしは魔女として恥じない生き方をしなければなりません。私の生き方です、貴方に指図される謂

れはありませんわよ」

「そんなのオレだつて知るかバーカ!!？ テメエの人生をめちゃくちゃにして生き残つても何も嬉しくねえつってんだよツ!!？」

「はあああああツツツツ!!? 私わたくしが助けてあげるって言ってますのよ!!? 貴方に選択肢なんてありませんわ!!?」

「なーにが助けてあげるだ! こつちは頼んでねえよ!!? テメエがそれでもオレを助けるってんならツ、テメエをブン殴ってオレはトンスラしてやらア!!?」

直後。

ジュワツ!!? と、閃光が瞬いた。

眩い閃光に目を灼かれ、周囲が見えなくなる。

最初、状況が何も分からなかった。気付いたらオレは尻餅を付いていて、燃える臭いが鼻につく。

つまり、それはヴィルゴの視線がオレの髪を焼いた音だった。

「なに、を」

「外送理論。端的に言えば、目から出た光——視線視線によつて周囲を視認しているという理論ですわ。ただ、それに魔力を乗せただけ。『射精魔術』の使い手なら歯牙にも掛けない攻撃ですわよ」

「……………」

「そ・れ・で、私わたくしをぶん殴ると仰おつしやいましたか? この程度も防げない貴方が? 大言壮

語も、ここまでくれば笑えてきますわね」

ヴィルゴは笑いを含ませた声で告げる。

怖い。勝ち目が見当たらない。膝が情けなく震える。

でも、それでも。

オレだってここは引けない一線だった。

「……………それでも、オレは……………!!?」

「そもそも、人生を台無しにというのは勘違いですわよ」

「あ?」

「『白』による貴方への刺客は一時的なもの。『黒』の主犯格が討伐されるまで時間稼ぎをすれば、貴方も私もわたくしも晴れて自由の身ですわ」

「……………なんだ、よかった」

安堵と共に体から力が抜ける。

地面にへばりつくように横たわる。

良かった。この少女がオレなんかの犠牲にならなくて良かった。

「ああ? てことは、オレたちは刺客とやらを撃退するだけでいいのか?」

「そうですね。恐らく、一週間もかかりませんわよ」

「そりゃ嬉しい。来週の日曜日までに終わってくれたら万々歳なんだけどな」

「だから安心してくださいませ」

ヴィルゴはオレの頭を撫でると、子供を寝かしつける母親のような優しい声でこう言った。

「『黒』だろうが『白』だろうが、全部私がぶつ飛ばしてやりますわ」

Tips

◆魔術師の勢力は、大まかに分けて白・黒・灰の三つに分類される。魔術業界の九割以上が、いずれかの勢力に属する。

◆『白』とは、魔術の悪用を罰する警察機構のこと。「世界の保守と魔術師の統一」を理念に掲げ、魔術業界の四割を占める勢力。

◆『黒』とは、666の魔術結社が集まった犯罪組織のこと。「世界の革新と魔術師の栄進」を理念に掲げ、魔術業界の三割を占める勢力。

◆『灰』とは、白にも黒にも属さず、報酬によって動く民間軍事会社の総称。理念はなく、魔術業界の二割を占めるが仲間意識は無い。

「忘れちゃいねえよ」

「それならば構いませんが」

話は戻って現在。

ヴィルゴの注意を突っぱねる。

でもまあ、気を抜いていたのは確かだ。

そんなオレに釘を刺すように、ヴィルゴが口を挟む。

「油断禁物ですわよ。次の刺客は既に来ていますわ」

「はあ!?? 言えよ!!!?」

いつの間に!??

反射的にキョロキョロと辺りを見回しそうになる頭をぐつと堪える。魔術で追跡を誤魔化したからと言って、普通に目立って良い理由にはならない。

代わりに、ヴィルゴを非難するように睨む。

対して、ヴィルゴは片手で右眼を抑え、虚空を見つめるように目を凝らす。眼を抑える手の指の間からは、青白い光がほのかに零れていた。

「目から光? それも外送理論とかいうヤツか?」

「正解ですわ。使い魔ファミリアとして発光する細菌を飼っておりまして、彼らの放つ光わたくしと私の視線を『類感』させることで、視界を共有させていますわ」

発光バクテリアみたいなのだろうか。

視線を別の生物の光で代用できるのならば、機械的に視線の光自体を再現できるかもしれない。

『白』からは去勢騎士スコフツイ・ルイツアリが50人、『灰』からは魔術師が3人、『黒』からは魔術結社ヤリリサーが一つですわね」

「何も分からねえわ」

「あー……、去勢騎士スコフツイ・ルイツアリは魔術を捨てて魔術無効の剣や鎧に身を包んだ者達ですわね。

アドウルテルが使った代替魔杖デイルドの上位互換と思ってもらって宜しいかと」

「……………マズインじゃねえのか？」

魔術無効……魔術師の天敵か。

これは天才科学者たるオレの出番かな？

「ですが、魔術が使えませんでこそでもA I ランドに不法入国できませんわよ。空港の検問で引つかかっているのが見えますわ」

「馬鹿なのか？」

オレの出番じゃなかった。

当たり前と言えば当たり前なのだが、魔術オカルト抜きなら学術都市の外にいる人間がA I I R N D の科学に敵うはずがない。

ましてや、剣や鎧を持った不審者が検問を通れるはずもなく。

「灰魔術師グレイウィザードの方は、逆にA I I R N D から逃げ出していますわね。恐らく『黒』に雇われた傭兵でしょうが、『白』の動きを察知して巻き込まれないようにしているのでしょうか」

「つてことは、残るは『黒』の………あ？ ヤリサーつつつてたか、お前??？」

「魔術結社〈The Golden Sphere〉の天球ですわね。こちらは——」

「待て待て待て待て、まだ飲み込めてねえぞオレは」

ヤリサー？ 何でヤリサー？

謎の魔術用語に紛れ込んでいて反応するのに遅れてしまった。だが、明らかに頭のおかしい下ネタがそこにはあった。

「現代の魔術とは即ち『射精魔術』なのですから、魔術結社がヤリサーになっても不思議ではないですわよね？」

「不思議だぞ!!？」 聞いてるだけで性病とか怖くなるわ!!？」

「細菌やウイルス由来の病気であれば、虫除けの術式で死滅させられますわ。魔術師は基本、病気に罹らないですわよ」

もういいですか？ と、迷惑そうに瞳が語る。

「良くはないのだが、これ以上聞いた所で理解できそうにないので諦めて領く。」

「The Golden Sphereの『黄金の天球』は『黒』の中でも五本指に入る規模の魔術結社ですわ」

「うん」

「リーダー首領の魔法名はテステイス。活動場所は主にアメリカ。AIランドに来ているのは首領も合わせて7人ですわ。ですが、7人の合計ハーレムは500を超えますわ」

「うん。……………うん??? やっぱ説明してくれ。ハーレムってなに?!!」

「ハーレムって、確かアドウルテルも言っていたような。」

「確か、アイツは自分を元ハーレム50の実力だと言っていた。文脈的に言えば、戦闘力みたいなものだろうか。」

「はあ……………面倒くさいですわね。ハーレムとは、保有する雌奴隷の頭数を表す指標ですわ。つまり、ベニスフェンシグ〈魔術決闘〉の勝利記録と言っても過言ではありませんわ」

「500人の魔術師を下したヤツらってことか……………?!!?」

「加えて、敗者たる雌奴隷はその魔力を勝者に供給しますわ。『射精魔術』使いは世界中に5万人程いると言われていますので、The Golden Sphereの『黄金の天球』は魔術世界1%の魔力を独占する敵ですわね」

「……………ツツツ!!?」

「強力な敵、加えて一対七。」

敵を倒す未来が見えない。

思わず、弱音が零れ落ちた。

「勝てる、のか……?」

「楽勝ですわよ」

あつさりと。

ヴィルゴはそう述べた。

「強いと言っても、それは〈魔術決闘〉での話。通常の魔術戦では私に分がありますわ。

〈媚薬香水〉使用時でも、実力はほぼ同格でしょうし」

「だっ、だけど一対七だぞ」

「決闘空間内では強制的に一対一ですわ。後は貴方の『横紙破り』があれば……ほら、二

対一ですわね?」

「……!!?」

そう、か。

そうだな、オレたちは一蓮托生。

ヴィルゴが勝てると言ったのなら信じる他あるまい。

「あつ、この位置でしたら……ここから見えますわよ。窓の外、ビルの屋上にいるのが
The Golden Sphere
〈黄金の天球〉の7人ですわ」

「確かに見え——オイ、ヴィルゴ」

「？」

ARコンタクトレンズ携帯電話の操作して、視界をズームして敵魔術師を視認する。そして、それ
が。つ。い。た。

「アイツら、全員顔同じなんだけど」

「——ええっ!!?」

ええっ!!? じゃねえよ。

既に想定外が起こってんじゃねえか!!?

「兄弟……? それにしちゃあ、全員似すぎてるな。クローンか?」

「なっ………なあッ!!? 同一人物判定を誤魔化していますわああああああ!!?」

!!?!!?」

「うるせえッ!!?」

あつ、ヤバ。目が合ったんだけど。

流石に騒ぎすぎたか。

「どどどどどどどどつ、どうしましょう!?」 『大祓』^{おほはらえ}の形代かたしろと同じですわっ!!? 魔術的

に見ると、あの7人は全員が同一人物ですわ!!?」

「オイオイ、その場合〈魔術決闘〉^{ベニスフェンシグ}のルールのどうなるんだ?」

「決闘に介入可能ですわ!!?」 作戦変更ツ、決闘空間を構築されたら二対七になって終わりですわよ!?」

「逃げるか? いや、既に見つかっている。ヴィルゴがやっていた小細工が、見つかったからも効くのかは分からない。」

それに、振り切つて追撃をビクビクと怖がるよりも、ここで叩いておいた方がいいか。「ディルド壊した時みたいに、一人撃破したら他のヤツも倒せないか?」

「そんなの相手も分かっていますわ!!?」 ですからツ、呪いやペナルティは波及しないように調整してあるに決まっていますわよ!!?」

考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ。

今ある手札。既に得た魔術の知識。オレが生涯をかけて学んだ『科学』を掻き集めろ。戦えねえ癖に頭さえ働かなかつたら、本当にオレは邪魔なだけのデクの棒だ。天才と呼ばれた頭脳を全力で回せ。

(魔術的な戦いはヴィルゴに任せるとして、オレの科学じゃヤツらに致命傷は与えられ

ねえ。だとしたら、狙うべきは……………決闘ルールを逆手に取る)

〈魔術決闘〉^{ベニスフエンシグ}のルールを鵜呑みにするな。

思い返せば、魔杖の量産や複数人による決闘など、アドウルテルも〈黄金の地球〉^{The Golden Sphere}も裏技を使っている。

オレたちだけが律儀にルールを守る必要はない。オレは『横紙破り』^{ルルレイバー}だ、ルールを悪用するんだ。

「なあ、ヴィルゴ。アイツらが来るまでの猶予は？」

「3分ほどなら誤魔化せますが……………は!?? 迎え撃つ気ですの!??」

3分……………ギリ間に合う、か?

いや、やるしかねえ。

「3分クツキングだ。デパートから材料を現地調達すりゃあ大丈夫だろ、多分」

ヴィルゴは不安な顔をする。

それはそうだ、魔術師の脅威を知らない素人の言うことなんてすぐには信じられない。だけど、今は作戦を説明している暇はない。

だから、オレは安心させる為に強気の台詞を吐いた。

「ルールの穴に手え突っ込んで奥歯ガタガタ言わしてやろうぜ!!?」

T i p s

◆魔術結社とは、魔術師達が集まって結成された組織のことである。ただし、射精魔術が主流の現代においては、そのほとんどが性行為目的の反社会的組織である。

◆規模は大小様々で、3人の所もあれば100人を超える所まである。表社会では会社として存在している結社も多く、拠点は世界各地を転々とするのがスタンダード。

◆基本的に魔術結社はその名前に色を含み、それぞれが混じり合い『黒』の勢力が生まれる。一番人気の色は黄金で、次に人気なのは銀色。

4 / 12 ルールの穴をズツコンバツコン

「次ハ何処デ曲ガル!?？」

「アツチダ!!?」

ドタドタドタドタ!!? と。

慌ただしい足音がデパートに響く。

二人の男が廊下を走っていた。

男の片方は股間部分だけがくり抜かれた奇妙なスーツにマントを羽織っており、もう片方の男は全裸だが男の象徴にだけ蝶ネクタイを結んだ格好をしていた。端的に言うて、両方とも露出狂の変態のようだった。

そんな彼らこそ、ヤリサ魔術結社へThe Golden Sphere金の天球の魔術師。
宗聖司そうせいしを狙う『黒』の刺客である。

男達の顔は双子のようにそっくりであったが、彼らに血縁関係も何もない。彼らは整形して首領リーダーと同じ顔を手に入れていた。

そして、それは『類感』によつて同一人物判定を誤魔化すためであった。この裏技による強制的な物量戦こそ、彼らが魔術世界の1%を占有するに至つた理由である。

「気合イガ入ッテルナ」

「他ノヤツラニ先ヲ越サレルワケニハイカナイ！」

AIこの島ランドに来た『黒』の刺客は全員で七人であるが、この場には二人しかいない。

首領リーダーを除く六人の魔術師は、三組に分かれて対象ターゲットを搜索しているからだ。

二人の男は首領リーダーに教えられた座標まで辿り着く。

そこは人のいない寂れたゲームセンターだった。埃こそ被つていないが、人がいないのにも納得できるほど薄暗くて寒い。

しかし、男達は怪訝な顔でそのゲームセンターを除く。ゲームセンターの中には、誰もいなかった。

「本当ニココナノカ？」

「……………ソノ筈ダ。首領ノ魔術ハオ前モ知ツテイルダロウ？」

〈The Golden Sphere 黄金の天球〉は、その名に相応しく星座を利用した魔術を得意とする魔術結社ヤリサイ

であった。

そんな〈The Golden Sphere 黄金の天球〉を治める首領リーダー、テストイスの得意技こそが人物探知術式。

探し人のいる位置から見える星座を投射し、そこから位置座標を逆算して割り出す魔術

である。

今回の襲撃にもその魔術は使用されており、一時的に妨害されるも、視認によるマーキングと合わせて成功したはずだった。

にも関わらず、その位置座標には誰もいない。

周囲を警戒しながら、男達は一歩ずつ歩みを進める。

一歩、一歩。ゆっくり、ゆっくり。

やがて、首領リーダーから送られてきた位置座標と男達の位置座標がもう少して重なる距離まで来た。

あと三步、二歩、一歩。

そして――

「マサカ天井ニツ――!?」

「――よお、待ちくたびれたぜ」

バツン!!? と。

男の足元で眩い雷光が瞬いた。

奇襲。

それも、こちらの魔術を完全に理解された上で、相手の戦術に取り込まれた。

いつの間にか、男の足は宗聖司そうせいしを踏み付けていた。

いいや、いつの間にかではない。宗聖司そうせいしはその場所にずっと存在した。ただ、プロジェクションマッピングのように彼の全身に異なる光景が投射されたことで、床に擬態して見えなくなっていただけだ。

雷光の正体は魔法マスタックのステッキ。

魔術師を包む強力な加護さえ貫く、法規制を完全に無視した致死性たつぷりの改造品である。

男達がその一撃で沈むことはなかったが、後一撃食らえば終わる。そう確信するほどの威力だった。

男達の思考は止まった。

もう少しでも距離があれば、また違ったのかもしれない。だが、対象ターゲットはすぐそこまで迫っている。

突然の危機的状况と考える時間の無さ、二つが合わさって男達から冷静さは奪われた。

片方の男——股間丸出しの方——は何もできずに硬直した。いわゆる擬死タネートゥーシス、死んだ

フリに近い。本能的な恐怖が肉体を停止させる。

もう片方の男——チンコ蝶ネクタイの方——は反射的にチャームフェロモン〈媚薬香水〉を床に落とす。本能的な戦意が体に染みついた決闘の記憶を呼び起こした。

チンコ蝶ネクタイ男の行動は、咄嗟の判断としては満点に近かった。

決闘空間を構築することで他者からの攻撃を無効化し、自身の魔術を底上げする。投げた瓶が即座に割れるように、最短距離の真下を狙って投げたことも、いつもならば最適だった。

ただし、一つだけ減点箇所があるとすれば。

その真下に宗聖司がいることを忘れていたことであつた。

「——ア？」

「まずは、一人」

そうせいじ宗聖司はチャームフェロモン〈媚薬香水〉を危なげなくキャッチすると、キュポンとその蓋を開ける。そして、一滴だけ床に垂らして瓶に封をした。

ルール参照

◆規則の四。制限時間は使用した媚薬香水の量で決定され、制限時間内に勝負が決まらなかつた場合は挑戦者の敗北となる。

瞬間。

蝶ネクタイが床に落ちた。

男は全身に気怠さを覚え、何故だろうと落ちた蝶ネクタイを目で追う。

しかし、床を見るまでもない。即座に視界に入った胸おっぱいがそれを雄弁に語っていた。

そして、彼は少し遅れて現実を理解した。

つまり、彼はチンコを失っていた。

もはや、彼をチンコ蝶ネクタイ男と呼ぶことはできない。その姿は何処からどう見ても全裸の女性だった。

即ち、魔力テクノプレイク枯渇。

男は雌奴隷へと女体化した。

「ナツツツ？！？？！？？！？？ 何ヲシタ……！！？？」

「たった一滴の〈媚薬香水〉チャームフェロモンじや、制限時間は一秒も保たないみてえだな」

「挑戦者ヲ押し付けケツ、時間切レテ敗北サセタノカツツツ？！？？！？？！？」

「カタコトで喋んな、聞き取りづれーよツ！！？」

そんな相方の醜態を見て、股間丸出し男は硬直から解放される。

同時、宗聖司そうせいじは床を蹴って肉薄する。

しかし、股間丸出し男の行動はそれよりも速かった。

目の前で起こった失態を反面教師にし、後方へ〈媚薬香水〉チャームフェロモンの瓶を投げて叩き割る。

「聞ケツ、我が目ヲ——、——ツツツ？！？」

「声が出ねえだろう？！」

ルール参照

◆規則の一。決闘空間は挑戦者の宣誓と、媚薬香水チャームフェロモンの充満によって展開される。

「ツ——、——ツツツツ!?」

「声つてのは声帯を震わせて出すモノだからよ。それを相殺するような逆位相の音波をぶつければ、テメエの宣誓は簡単に潰せんだよ」

地面に転がっている音楽プレイヤーと、それと有線で繋がった指向性スピーカー。

天井に設置されたプロジェクトやスタンガンと共に、宗聖司がデパートで買い漁った量産品を分解して自作した改造品である。

宣誓できなければ、決闘は始められない。

喉を潰された魔術師の末路など一つしかない。

「とつとと逝つちまえ」

「——ツ!!?」

宗聖司はスタンガンを振るう。

バチイツ!!? と電撃が弾ける。

………しかし。

「うえツ、視界をズームしたらカビが生えてねえかコイツ!!?」

「虫除けの術式の応用ですわ。腸内細菌や皮膚の常在細菌のような、人間にとって必要な微生物を死滅させる術式ですわよ」

(ソナナモノジャネエ!!?)

股間丸出し男は心の中でそう叫んだ。

必要な微生物が死滅したとしても、不随意魔術である虫除けの術式がカビを防ぐ。そもそも、こんな一瞬でカビが繁殖するわけがない。

つまり、この薬品は不随意魔術の働きを阻害した上で、人間に利益のある微生物を死滅させ、人間に害を与える微生物を繁殖させる魔術だ。

(コレガ^{アイアンメイデン}鋼鉄の処女)……!!? 『射精魔術』ヲ忌ミ嫌ウ、現代魔術ノ異端児カ……ツ!!?)

意識を失う最後まで、股間丸出し男はその目でヴィルゴを睨み付けていた。

そして、何処かである男がカビに埋もれゆく視界を盗み見ていた。

「アア、麗しき乙女ヨ。鋼鉄^{アイアンメイデン}の処女」ヴィルゴ……」

Tシャツにジーパンという魔術師とは思えないラフな格好でビルの屋上に佇む男は、

チンポジを微調整しながら呟いた。

「貴様こそ俺様の花嫁に相応しい」

Tips

◆媚薬香水とは、チャームフェロモン使用者の性的絶頂オーガズムを促し、魔術師をトランス状態にまで持っていく香煙魔術。インセンスマジック

◆源流は魔女のハーブにあるが、現代の形に整えたのは神働術師である『白の賢者』。材料は希少であり、精製法には手間がかかる。

◆完成の際に使用者の体液を混ぜる為、個々人によって成分が異なる。その為、ベニスフェンシング魔術決闘の挑戦者は誰が媚薬香水をぶちまけたかではなく、チャームフェロモン誰の媚薬香水をぶちまけたかで決まる。

「……二人撃破。素晴らしい手際ですわ」

「天才のオレにかかれれば、こんなもんチョクチョイのちよいだぜ」

まあ、それもこれもヴィルゴの協力があってこそなのだが。

ヴィルゴの功績は多岐に渡る。敵の魔術の解析、位置情報の把握、ハーブによる判断能力の鈍化。そして、何よりも……………。

「この魔法のステツキ凄えな」

「落としてはいけませんわよ。それが貴方の魔杖ですわ」

〈魔術決闘〉において、魔杖を失った方は敗北する。

つまり、初めから魔杖を持たず、加えて代替魔杖も持たないオレは決闘空間が構築されてしまうと、自動的に敗北してしまう。

その対策としてオレに与えられたのが、この魔法のステツキだ。

代替魔杖の条件とは。

一つ、魔術師の魔力が籠っていること。

二つ、棒状であること。

この二つだけらしい。

「むっ」

「どうした？」

右眼で周囲を警戒していたヴィルゴが何かに気づく。

それは、もちろん吉兆であるはずもなく。

「実働隊の二組……四人全員がこちらに集まってきていますわ」

「四人か……さっきの初見殺しが決まっても、まだ二人残るな」

「いえ、〈The Golden Sphere黄金の天球〉のメンバーが全員同一の顔をしているということは、『類感』

により視界や記憶も共有していると思っただ方がいいですわ」

「……………りよーかい」

（となると、プロジェクトと音楽プレイヤーはもう警戒されているか……。ならば他の

――

直後。

ゴツツツ!!??!!?? と。

天井をブチ破って一人の魔術師が落ちた。

「見ツケタゾ!!??」

「なツ!!?? 私の眼わたくしに映らなかつた!!?? 透明化ですわねツ!!??」

「クハハハハハハハハハハハハハハハ!!?? 我コソハ貴様ヲ殺ス死アル兆星ナリツ!!??」

その男は全裸にローブ一枚だけを身に纏っていた。

その服からは吐き気がするような甘ったるい匂いがした。

「デメエ!!?」 〈媚薬香水〉を被つてきやがったな!!?」

オレ達を見つけてから瓶を割るのではない。

オレ達と遭遇する直前に、その身と服に〈媚薬香水〉チャームフェロモンを染み込ませる。もしかしたら、

宣誓自体も既に終えているのかもしれない。

「コレナラバ貴様ナンゾニ手出シハデキマイ!!?」

「そんな——」

そんな、まさか。

「——まさか、本気でそう思ってたのか?」

「エ」

ルール参照

◆規則の四。制限時間は使用した媚薬香水チャームフェロモンの量で決定され、制限時間内に勝負が決まらなかつた場合は挑戦者の敗北となる。

持っているスプレーを全裸ローブ男にぶっつけた。

多分、これも一度使えば次からは警戒されるのだろう。ならば、ここで全てを使い切る。

「キツ、貴様ア!!? 何ヲ……!!?」

「完全消臭スプレー。既に〈媚薬香水〉チャームフェロモンを使われていようが、臭いを打ち消せば終わりだ

ろ?」

タイムオーバー
時間切れ、テクノブレイク
魔力枯渇。

ヴィルゴの眼を掻い潜った実力者が呆気なく倒れた。

転がる女体に脇目もふらず、オレはヴィルゴに呼びかけた。

「ヴィルゴ!!?」

「分かっていますわ!」

左右、そして穴の空いた天井。

残りの三人の魔術師が同時に現れる。

恐らく、全員が既に〈媚薬香水〉チャームフェロモンを使用している。

しかし、完全消臭スプレーを振りかけるには距離が遠く、一人なら打ち消せても三方向には対処できない。そして、口の動きから宣誓もすぐに終わることを観測する。

決闘空間の構築まであと1秒。

魔術師達の眼がオレに集まる。

だから、オレはフラッシュを瞬いた。

ルール参照

◆規則の二。対戦相手の指定は、挑戦者が決闘空間内にいる相手を宣誓時に視認することによって決定される。

オレの手にあるのは古いカメラ。

そのフラッシュの光量をちよつとだけ弄った改造品である。

決闘空間を構築されたとしても、相手を視認できなければ対戦相手と見做すことはで

きない。

故に、失明した彼らがオレと対戦することはできない。

そして、打ち合わせ通り、ヴィルゴは彼らに掃除機を投げつけた。オレが改造し、空中の臭いを密封することに特化した一品である。

ヴィルゴの魔術も手伝って、〈媚薬香水^{チャームアップロゼン}〉の匂いが掃除機の中へと収まっていく。

ルール参照

◆規則の五。戦闘区域は地形によって決定され、制限時間終了か勝敗が決まるまで出ることはできない。

ギユオンツ!!? と。

三人の魔術師が掃除機の中へ引き摺り込まれて行く。

戦闘区域は地形によって決まるとあるが、アドウルテルとの戦闘では室内全てが戦闘

区域となった。つまり、オレは戦闘区域とは匂いが充満した部分だと考えた。

ならば、後は単純。匂いさえ密封すれば、相手は自分から封印されてくれる。

そして、彼らは出ることができない。

容器を破壊することも出来るはずがない。

対戦相手が存在しない今、それは時間切れで敗北するまで永遠に続く牢獄だ。

「……………終わっ、た…………？」

「^{リーダー}首領が一人残っています、取り敢えずは六人撃破ですわね。大金星ですわ!!？」

魔術を使わない魔術戦。

決闘規則を悪用する決闘。

作戦には穴も^{アナ}多いが、アドリブで結構上手くいってるんじゃないか？

そう油断していた時、ヴィルゴがあることに気がついた。

「空が暗くありませんこと？」

空は既に太陽が沈み、暗い夜になりかけていた。

オレ達がデパートで散策していたのがだいたい正午ごろ。太陽も真上にあつた。そ

こからどれだけ多く見積もったとしても、三、四時間しか経過していない。

ここまで暗くなるはずがない、ヴィルゴはそう考えているのだろう。

「ヴィルゴ、お前もしかしてA Ireland標準時間を信じてんのか？」

「え？」

「この島はさ、島というよりは船に近い。太平洋赤道域に位置してはいるけど、そこから動くことは出来るんだ。そうでもなけりや、宇宙エレベータはスペースステブリを避けられなくなるからな」

「……………つまり、A Ireland標準時間にも振れ幅があるってことですか？」

「太平洋って言っても、最東端と最西端じゃ時差が10時間以上あるしな」

A R 携帯電話を操作して、A Irelandの位置情報から正確な標準時を計算する電子ツールを確認する。

「だから今は……………18時半くらいか？」

「……………マズイですわっ!!？」

ぶわっ、と。

ヴィルゴが鳥肌を立てて慌て出す。

その雰囲気の豹変について行けない。

「なっ、何が…………？」

「へ黄金の天球」は星座を利用した魔術を得意とする魔術結社ですわ!!？ ですか

らっ、夜からが敵の真骨頂ですわ!!？」

「でっ、でも！ 一対一ならお前が勝てるんだろ？」

「その前提は全員の顔が同一な時点で破綻していますわ!!？」

ヴィルゴは心の底から焦っていた。

本来は、あと数時間はこちらが有利な状況の予定だった。だからこそ、宗聖司そうせいじの作戦にも乗っていた。

だが、ボーナスタイムはここで終わり。

「つまりッ、七人の合計でハーレム500を超えているわけではありませんわ！ 他の六人はお零れに預かっただけの代替可能な部品!!？」
首領リイダーのテストイスだけでッ、魔術世界マジックワールドの1%に匹敵する——!!？」

——直後。

放物線を描いてチャームフェロモンの瓶びんが降ってきた。

今まで撃破した六人の魔術師が投げていた瓶と同じデザイン。まるでオレに引き寄せられたかのようなその軌道を見て、反射的にキャッチしようと手を広げて——

「ダメ……!!？」

——そして。

ドビユツ!!?!!? と。

〈媚薬香水〉の入っていない空っぽの瓶——その中に潜んでいたザクロの実は手榴弾のように爆発を引き起こした。

「……………は？」

煙のように舞う血飛沫。

弾け飛ぶ肉片、剥き出しの骨の断面。

吐き気を齎らす人体の生焼けの臭い。

あるはずの場所にあるはずのモノが無い違和感。

「なんで、なんでだよ」

だけど、オレは何の痛みを感じちやいなかった。

オレの目の前で起こった爆発は、オレを傷つけることはなかった。

だから。血も、肉も、骨も、オレから見える全ての惨劇は目の前いる誰かの状況だった。

そう、つまり。

「なんでオレを庇いやがったツ、ヴィルゴツツ!!?」

ヴィルゴの下半身が吹き飛んだ。

厳密に言えば、完全消滅したのは膝から先の両脚。

だけど、太腿ふとももは原型が分からないほどぐちゃぐちゃになり、傷跡は腰元まで刻まれている。

手遅れ、そんな言葉が頭に思い浮かんでしまう。

それを信じたくなって、オレは自分の頬を殴った。

「タイムオーバー時間切れ狙いなんて、ソナ使い古された手ニ俺様が対処法を考えないはずがナイだろウ?」

「……………ツ!!?」

そして、そいつは現れた。

Tシャツにジーパンという魔術師とは思えない格好を身に纏い、片手でずっとチンポジを調節している男。

髪も、目も、ゴツイアクセサリーも。様々なギラギラとした黄金に身を包み、何処か成金のような印象を受ける『黒』の刺客。

〈The Golden Sphere リーダー〉
 へ黄金の天球へ首領、テストイス。

「だが、解せないナ。『黒』の俺様が宗聖司そうせいじを殺さない……殺せないことは分かつてイタ
 だろウ？ 何故庇つタ？ 戦闘不能になつタのが貴様でなければ、まだチャンスがあつ
 タというのニ」

「……………借りをツ、……………返しただけツ……………、ですわ……………!!?」

「ふム、誇り高いナ。やはり貴様は美しい、俺様の花嫁に相応しい!!?」

「……………あ?」

今、なんつったコイツ?

「はな、よめ?」

「アア。俺様の正統なル後継者を産むたメの女メを探していてナ。顔も魂も美しく、何よ
 りモ処女。俺様ニ染め上げル価値がある」

「キシヨいんだよ、処女厨ユニコリンが……………!!?」

「足が吹き飛んデ気持ち悪イが仕方がない。顔と子宮ガ傷ついてないだけ良しとしよ
 ウ」

「……………ツツツ!!?!?!?!?!」

チンポジを弄りながらそう言った男に、オレの頭が沸騰した。

強さなんざ関係ない。コイツの事情なんてどうでもいい。

最速最短でコイツをブチ殺してやる!!?!

「ヴィルゴはテメエには勿体ねえよ、粗チン野郎!!?!」

「魔術も使えなイ不能むのうがほざくナア!!?!」

T i p s

◆ハーレムとは、保有する雌奴隷の頭数を表す指標。同時に、ベニスフエンシンク魔術決闘における勝利記録も示す。

◆ベニスフエンシンク魔術決闘で勝利すると、対戦相手のハーレムを全て寝取ることができる。敗北すれば、ハーレム0まで落ちる。

◆ベニスフエンシンク魔術決闘は神の力を奪う儀式であり、理論上ハーレム1000000に到達すれば神そのものと成れる。ただし、今までの最高記録はハーレム150000である。

5 / 12 金玉十二宮

敵をブン殴りたい気持ちを抑え、ヴィルゴを庇って立つ。

下半身の重傷具合からして、今すぐに病院に行かなければ間に合わない。だが、ここでステイスに背を向ければ、どうなるか分からない。

もどかしい膠着状態にらみあいが続く。

先にその沈黙を破ったのはステイスであった。

「愚かナ貴様に見せてやるウ、本当の〈魔術決闘ベニスフエンシツク〉というものヲ!!?」

プシユウツ!!?!!? と。

デパートの配管を辿って、ありとあらゆる場所からピンク色の煙が漏れ出る。

人々は煙の中に覆い隠され、地は淫蕩の香煙で満たされる。

「オイ、まさか……!!? これ全部が〈媚薬香水チヤームフェロモン〉なのか!!?」

「聞ケ、我が目ヲ受けシ汝、魔法名ヴィルゴVirgoナル者よ。我魔法名ステイスTessieは汝ニ決闘を

挑ム……」

返答は宣誓まじないで返された。

決闘が始まってしまえば、オレ達に逃げ場はない。病院に向かうことができない。しかも、この量の〈媚薬香水〉チャームフェロモンじゃ時間切れは望めない。

かくなる上は……!!??

「おおア!!?」

まっすぐ走り、拳を振りかぶる。

やるべき事は単純。宣誓が終わる前に眼を潰す。

改造カメラのフラッシュはダメだ。あれは一度限りしか使えない改造品。限界以上の光量を引き出したことで、もう壊れて使えなくなっている。

だから、直接拳をヤツの目ん玉に叩き込む!!?。

だけど、それは一步遅かった。

「——神よ、師ヨ。ここに我、汝に対し我が魔術を以テ性豪の証を立つル者ナリ」

決闘空間が構築される。

テストイスが対戦相手に指名したのは、下半身が吹き飛んだヴィルゴだった。ヤツは

その手に握りしめられたのは魔法魔法のステッキステッキ。魔女の手によつて代替代替魔杖魔杖に仕立て上げられた、法規制をぶつちぎる逸品である。

バチイ!!? と、棒が雷光を放つ。

だが、その電撃がテストイスの肉体を貫くことはなかった。

「——T e s t i c i e S i g n金玉十二宮・獅子L E Oの皮」

目から血を垂れ流すテストイス。

しかし、その身体には傷一つない。

スタンガンの電撃も、打ち付けられた鉄の痛みもない。そのどちらも、テストイスの皮膚に弾かれたのだ。

それこそは、テストイスの持つ魔術の一つ。

獅子座の由来、ネメアの獅子の再現。今のテストイスの皮膚はたとえ大英雄ヘラクレスの一撃でも傷付けることは叶わない。

「ちッ、T e s t i c i e S i g n金玉十二宮・不死A Q U A R I U Sの水瓶!!? コンナ所で、奥の手ヲ使わされルとはナ……

!!?」

「……………それは、反則だろ!」

テストイスの背後、虚空から現れた水瓶はテストイスを全身を水で濡らす。それと同
時、テストイスの眼球は何事もなかったかのように修復していく。

水瓶座の由来、不死の酒ネクターを給仕するガニユメデスの酒器の再現。そこから溢れた水
は、飲んだ者を死から遠ざける効能を持つ。

（いや、待て。癒しの水？ それなら……）

その案を思いつくと、オレはいつの間にか走り出していった。

AR携帯電話コンタクトレンズに血濡れた右手を、水着の紐に空いた左手を伸ばす。

「何度も同ジ手を食らうと思うナヨ!!？」

テストイスはチンポジを調整する。

……いや、あれは多分魔術を発動する為の動作だ。魔杖ペニスを動かし、何らかの攻撃を行
おうとしている。

だが、その動きを無視してオレはテストイスの瞳を見ていた。その虹彩の全てを見
て、撮影して、コンタクトレンズに映し出す。

加えて、その作業と並行して魔力を練る。

オレが魔術を使ったのは一度だけ。それも、儀式を整えたのはほとんどがヴィルゴ
で、最後にデイルドをへし折っただけだ。

それでも、分かることが一つある。多分、魔力を練り方には呼吸法が関係している。

今まで見てきた魔術師、その全てにおいて肺の動き方や心拍数が異常だった。

それらを数値化し、自らの肉体に反映する。

オカルト テクノロジー
魔術を科学で再現する。

「イケる……!!?」

相手と同じ虹彩という『類感』。

相手の目の肉片という『感染』。

二つの原理は満たされた。

今ここに、その魔術は発動の時を迎える。

「ナニを……………、…………ツツツ!?!?!?!?」

ガクンツ!!? と。

テストイスが膝を突く。

テストイスはアレイスター・クロウリーの霊的蹴たぐりを思い浮かべたが、頭が即座に否定する。

「膝ヲ強制的に曲げられたんじゃナイ。筋肉へノ伝達が阻害されタ……神経ガおかしくなッタ。弄られタのは脳の方カ!?!?」

「御名答ツ!!?」

オレが行った魔術は視界のジャックだ。

ヴィルゴが使い魔ファミリアと視界を共有している用に、オレとテストイスの視界を無理矢理に共有させた。

その上で、視界を点滅させることで電気信号を狂わせた。あらかじめ網膜細胞と脳の接続をカットしていたオレとは異なり、点滅を直視したテストイスの脳は今頃めちゃくちゃになっている。

ダンツ!!? と踏み込む。

目的はテストイス、ではなくその背後。

紐を解いていた上の水着を脱ぎ去り、胸を収める部分に水瓶から溢れる水を溜める。

防水加工された水着は一滴も溢すことなく、オレの胸が大きかったから溜められる水の容量もそれなりに大きい。

そして、それを持ってヴィルゴの元へ急いで戻る。

「まッ、待テええええええええええッ!!?!!?!!?」

「誰が待つかバーク!!?」

ここでテストイスと戦うメリットなんかない。

目的を見誤るな。テストイスに勝つことなんてどうでもいい。オレが最優先するべ

きなのはヴィルゴを助けることだ。

ヴィルゴの下半身に溜めた水をかけ、修復を待たずに彼女を背負う。

「仕切り直した、テストイス。チンポジ整えて待つとけ!!？」

T i p s

◆アレイスター・クロウリーとは、19世紀ロンドンに存在した伝説の魔術師。魔術結社〈The Golden Dawn黄金の夜明け〉に在籍していた。

◆現代魔術——射精魔術はアレイスターが提唱した性魔術を基礎として構築されている。その為、射精魔術はセレマ宇宙論と相性が良い。

◆霊的蹴たぐりとは、アレイスターが使用する魔術の一つ。相手の呼吸や姿勢を真似て、『類感』によって自分の動きを相手に強制させる霊的ヒザカクンのこと。

「……うう……、ここは……？」

「目え覚めたか？」

耳元から声が聞こえる。

「どうやら、ヴィルゴの意識が戻ったようだ。」

「足はどうだ？ 見た目は治ってるけど動かせるか？」

「……少し動きますが、歩けるほどではありませんね」

「水の量が足りなかったか……!!？」

「いいえ、動かないのは足だけじゃありませんわ。おそらく、怪我とは別の要因ですわね」

「……？」

「そう言うと、ヴィルゴはたどたどしい手つきでボロボロの黒衣を太腿ふとももまでたくし上げた。」

白すぎる程に穢れない肌が眩しい。

「……というか、まさかとは思いがコイツ……ノーパンか……!!？」

「……ここですわ。見てください」

「ちよッ、お前っ、こんなナリでもオレは一応男だぞ!!？」

「? ……うえっ!!? ……どっ、何処見てますの! セージの変態!!？」

「お前が見ろつつつたんだろうが!!?」

「そこではありませんわよ!!? ここ! ここの傷跡ですわ!!?」

眩しい太腿ふしももの付け根。

そこには確かに、目を覆いたくなるような傷跡があった。しかし、その中でも一際目立つ異質な七つの跡があった。

それはまるで、銃創のような。

「なんだ、これ……?」

「テストイスの攻撃を覚えていますか?」

「ヴィルゴの下半身を吹き飛ばした手榴弾グレネードみたいなヤツだろ?」

「手榴弾……間違っていますせんわ。あれはペルセポネが食した冥府の柘榴ザクロですよ」

柘榴ザクロ……そういや、手榴弾グレネードの由来も 柘榴Pomegranate だつたつけ?

「テストイスの魔術は、十二星座にまつわるエピソードを再現するものですわ。一説によると、乙女座はペルセポネを表している。間違いなく、冥界下りの神話エピソードを再現していますわね」

「……なあ、乙女座って確か」

「ええ、乙女座とも呼びますわ。処女ヴァーギルの名を冠する私わたくしが乙女に無理矢理求婚した神話の

再現に破れるとは、皮肉ですわね」

ヴィルゴは引き攣るように笑みを浮かべる。

彼女はもう限界なのだ。それこそ、笑うことすら難しいほどに。

白い肌は創だらけ、服もズタボロ、鋼色の髪も血と泥で元の色が見えなくなるほどに汚れている。誰が見ても目を覆いたくなるような有様。

だけど、それでもヴィルゴは美しかった。泥中の蓮の如く、彼女の美しさは穢れごときで損なわれることはない。

「果実の爆発と共に、中に詰まった無数の種子が弾けました。私が直撃を食らったのは7粒だけですが、ペルセポネは4粒食っただけで一年の内4ヶ月は冥界に滞在する必要があった……12分の4が死んだと考えられますわ」

「つまり、7粒食らったヴィルゴは12分の7が死んでいるから、身体が言うことを聞かないって訳か」

「魔術師は生命力を魔力に変換して魔術を使用しますわ。今の状態じゃ、本来の力の半分も発揮できません。決闘に特化した魔術師殺しの一撃ですわね」

話を纏めると。

戦えるのはオレだけ、ヴィルゴの支援は期待できないということか。

ルールの穴を突くことはできない。

ヴィルゴの力は借りられない。

敵は魔術世界の1%を牛耳る魔術師。

ヴィルゴさえ感嘆する決闘専門の魔術師殺し。

……上等じゃねえか。

「だったら、正面からテストイスを打ち破るしかねえよなあ!!？」

気合いが入る。

ヤツはヴィルゴを花嫁にすると言った。穢れなき乙女ヴィルゴに無理矢理求婚プロポーズすると。

まさに冥界下り。ヴィルゴを地獄に堕とすなんて許せるか。

そもそもの話、オレは魔術師が気に食わない。

『射精魔術』が中心の世界——男が上位で女が下位だと決めつけられた世界。まったく、いつの時代の話だ。

前世紀の男根主義マチズモで女性を娶るなんて、女性尊重主義フェミニズムが黙っちゃいけない。オレの中の現代の価値観が、古臭い魔術世界を更アップデート新させると騒ぎ出す。

「……分かっていますの？ 貴方は新参者ドゥーティで、敵は百戦錬磨の達人ヤリチン。魔術戦で勝ち目があるとお思いで？」

「なら、魔術戦に持ち込まなきゃいい」

「それはどういふ……?」

生命剥奪の手榴弾。グレネード

攻撃無効の防御。

肉体再生の水。

どれもこれも滅茶苦茶だ。オレなんか敵う相手じゃない。

だけど、それらの魔術は常時・即時に発動できるものじゃない。でなければ、オレの目潰しは通らなかつたし、防御と修復は同時に行われるはずだった。

「テストイスは十二の強力な魔術を使うかもしれないが、それらを同時に使うことはできない。必ず切り替える必要がある。そして、切り替えの瞬間にチンポジを弄つていた」

「……………陰莖、ではありませんわ。触れていたのは睾丸、テストイスは睾丸と天球を照応させていたのでしょう」

「照応……?」

「『類感』を働かせていた、ということですね。睾丸と天球を同一のものと見做し、精子から星を作り上げたのですわ」

反射的に、上空に浮かぶ星々を見上げる。

あれら一つ一つがテストイスの精子だっていうのか……!??

「星を一から作り上げるなんてできるのか!?!?」

「見かけ上のものに過ぎませんわよ。ですが、星座魔術においては星そのものよりも、地球から見える星の光が重要なのですわ」

「プラネタリウムみたいなもんか……?」

「大体合ってますわ。テステイスは生贄に捧げた精子を星にして、夜空に星座を生み出している。神が死した人を星座として天に上げるギリシャ神話そのものですわね」

「人は死んだら星になるってヤツか……」

「あら、分かっているじゃありませんか。神話や伝承だけでなく、いわゆる迷信も魔術を効率的に使うための道具となりますわ」

それなら、キスしただけで子供を産ませることもできるのかなあ……、と関係ない方向へ思考が飛ぶ。

疲れているな。星を作る相手との戦いが控えているというのに、頭を冷やさなければ。

「まったく、発想は良いのに詰めが甘い魔術ですわ。空の天球と男の象徴たる睾丸を照応させるなどと……。宇宙ソラは女神おんなの領域ですわよ?」

「……うん? ギリシャ神話って、大地ガイアが女神おんなで天ウラスが男神おとこじゃなかったっけ?」

「そこからですわね。そもそも『射精魔術』にギリシャ神話を混ぜている時点で無駄です

わ。『射精魔術』はクロウリーの性魔術を基礎としているのですから、セレマの神格と対応させるのが基本でしょうに」

「どういふ——」

説明の意味が分からず聞き返す。

しかし、返答はなかった。

何故なら。

——ヴイルゴの音速よりも速く、白濁色の光速が飛来したからである。

瞬間。

音も光も吹き飛んだ。

そして。

T i p s

◆セレマとは、アレイスター・クロウリーが提唱した宗教。ヌイト、ハデイト、ラー・

ホール・クイトなどの神格が登場する。

◆女神ヌイトは、セレマ宇宙論における第一神。夜空を象徴する神で、万物の究極の源だと考えられている。

◆男神ハデイトは、セレマ宇宙論における第二神。地球を象徴する神で、無限小へと収縮を続ける球体と表現される。

◆ラー・ホール・クイトは、セレマ宇宙論における第三神。太陽を象徴する神で、ヌイトとハデイトの結合により生まれる。

「……Testiclie Sign SAGITTARIUS金玉十二宮・射手の毒矢」

テストイスはチンポジを——金玉を触りながらそう言った。

白濁色の光の矢、それは彼の魔杖ペニスから放たれたモノだった。

射手座の由来、半人半馬の賢人ケイロンを射殺した毒矢の再現。その毒の苦痛は、不死身ケイロンが自ら生を手放してしまうほど苦しい。

とは言っても、人間が直撃すれば痛みを感じる前に即死するのだが。この魔術の本命

は痛みではなく、光速の矢が超遠距離から正確に膝を撃ち抜くという精密性。そして、瞬時に死滅させるその致死性である。

テストイスは宗聖司そうせいじに逃げられてから、即座に人物探知術式を発動させた。

十二星座の魔術——金玉Tessie Stone十二宮ほど強力ではないが、とても便利で多用している魔術である。

人物探知術式はヴィルゴの位置座標を示した。

その横には、微動だにせず体育座りでヴィルゴと話す宗聖司そうせいじの姿もあつた。

距離は戦闘地点とそう遠くない場所。

彼らはそこで話をしていた。

初めは畏かと警戒していたが、そんな様子もなく、気の抜けた会話が耳に入る。何かを準備する様子もなく、ただ彼らはぐだぐだと馴れ合っていた。

舐められている、そうテストイスは思った。

だから、本気を出した。

感知すらできない超遠距離からの一方的な攻撃。

反撃する暇も与えず、一撃で殺す最大出力フルパワーの毒矢ベリムである。この光に触れた生物は、全細胞を死滅させて死亡する。

宗聖司そうせいじが聞けば、ガンマ線バーストとでも表現するであろう死の一閃である。

その結果がこれだ。

宗聖司そうせいじは跡形もなく消え去った。

まるで初めからいなかったかのよう。

「俺様を侮ったナ。隙ヲ突かれタ、逃げられタ。それがナンだ。その程度デ俺様に勝てルとも思イ上がったの力？ 俺様が本気ヲ出せば貴様ナゾ一瞬で殺セル——」

「——とも思イ上がったか？」

「——ア？」

ズバヂイツ!!?!!?!!? と。

背後から雷光がテストイスの肉体を貫いた。

「なツ……、……ガツツツ!!?!!?!!?」

何故貴様がいる、とても言おうとしたのか。

しかし、その言葉は紡げない。

獅子シの皮レを纏カっていない……射手SAGITTARIUSの毒矢から切り替えていないテストイスには雷光

を防ぐ術がなかった。

咄嗟に、テストイスの右手が金玉へ伸びる。

その手を再び魔法のステッキが雷光を浴びせる。

「あがア!!?」

(俺様ノ不随意魔術……魔除けの術式ヲ貫いた!!? この短い時間で成長したとでもイウのか!!? コレはアラン・ベネットの『人の五感を奪う魔法の杖』ニモ匹敵するゾ……!!?)

「もうタマキンを触るのは止めようぜ。礼儀つてもんを知らねえのか?」

宗聖司は……五体揃って怪我一つないオレはそう言った。

「何故ここにいとでも言いたげな目だな? いいぜ、答えてやる。魔杖を破壊するにはもうちよつと時間がかかりそうだしな」

電撃を流しながらそう言った。

ヴィルゴに聞いた話だが、口撃もまた魔術戦の一つ。精神的に優位に立つことで、相手の魔術を弱めることができるらしい。

ならば、ここでオレが煽れるだけ煽ることが最適解!!?

「そもそもオレは逃げていない。ヴィルゴを巻き込まれない場所に移動させただけで、その後はテメエの後ろでずっと隙を伺っていたぜ」

「……っつ!!?」

「ヴィルゴの横にいたのは、プロジエクシオンマッピングで映し出しただけの立体映像。声が聞こえたのは指向性スピーカー。まるでその場にいるかのような会話も、カメラで見えてたから出来た。テメエの攻撃を受けて消滅したのだって、衝撃の余波でプロジエクターが壊れただけだ」

『目覚めてすぐにアドリブで会話を合わせた私わたくしを褒めて欲しいぐらいですわね!』

耳元……イヤフォンからヴィルゴの声が聞こえる。

これは実質ヴィルゴを囷に使った作戦だった。テストイスがヴィルゴの位置座標を探っていたことは^{The Golden Sphere}黄金の地球の配下と戦いの時点で分かっており、ヤツがヴィルゴを殺す気がないことも既に知っていた。

だけど、万が一ということがあった。それでも、ヴィルゴはオレから何の説明を受けずとも、見捨てられたとは思わずにオレを信じてアドリブで話を合わせてくれた。どれだけ感謝しても足りない。

「そろそろ視界も暗くなってきた頃じゃねえか? テメエが花嫁になって一から女性の扱い方を学びやがれ!!?」

「……………ツツツツ?」

オレの蹴りがテストイスの金玉に炸裂する。

オレが魔杖の破壊をチラつかせたことで、ヤツは浪費された魔力を節約するために魔

星々を投射することはできなくなっても、既に投射した星が消えることはない。

Testicle Sign SAGITTARIUS
金玉十二宮・射手の毒矢。

最悪最低の超遠距離光速生命抹殺術式。

テストイスにはまだそれが残されていた。

テストイスは腰を振ってチンコを振り回す。

見た目こそちんちんぶらぶらソーセージだが、その凶悪さと言うまでもない。無軌道に暴れ回るチンコは、射精上にある全ての生物を殺戮する。

(スタンガンが思ったより効いてる……!!? 足腰がフラフラしてて、こちらを狙うこともできちやいない! これなら……!!?)

一瞬、希望を持った。

それが失敗だった。

「……………はっ。」

ソラを埋め尽くす白濁色の流星群。

ソラに手を伸ばす不遜な少年を蹴落とす容赦なき天蓋。

魔術世界の1%を占有する魔術師ヤリチンの奥の手。
真正銘、全力全開の魔術だった。

(……………これ、死んだ)

逃げ場はない。

散り散りに降り注いでいた光が、オレの元へ収束していく。

やがて、視界は白濁色に染まり——

——ぼつ、と。

白濁色の光は消え失せた。

「……………ナニ、が……………」

「危ねえ、ギリ間に合ったか」

テストイスはすぐさま異常に気がついた。

周囲が余りにも明るい。空が白濁色の光線ビームで埋め尽くされた、それでも説明できない

ほどに——夜と認識できないほどに照らされている。

反射的に、テストイスは空を見上げた。

そして、ようやく彼は思い知った。

夜空に浮かぶ星々の全てが消滅していることを。

「Stand Up
起動せよ、〈MAI:SON〉」

ババババババババツ!!? と。

スポットライトが夜空を眩く照らす。

それこそは宇宙エレベータへネオアームストロング。

雲を貫く塔がライトアップしたことで、空はまるで昼になったかのように明るくなった。

「テメエの魔術は星そのものじゃなく、地球から見える星の光こそが術式の要だ。だから、夜空を照らせば星も見えなくなるよなあ?」

端的に言えば、光害。

本来なら天体観測に影響が出るから忌避される側の現象なのだが、今回ばかりはそれを逆手に取った。

「……ありえ、ナイ。俺様は宇宙エレベータのスケジュールを把握してイル!!? 点灯式はマダのはずダロウ!!? 無理矢理ハッキングすルことモ不可能の筈ダ……!!?」

「何言つてんだ、そもそもテメエが何故オレを狙つていたか忘れたのか?」

「……………ツ!!?」

オレこそが世界に名を轟かせた天才。

〈ネオアームストロング〉の設計者。

誰よりも深く宇宙エレベータを知る者。

管理AIである〈MAI:SON〉と直接対話することができる唯一の『窓口』。

ライトアップさせる程度、朝飯前だ。

もはや、負け犬の遠吠えなんぞ聞く気にならない。

「……そう、カ!? 貴様こそが宇宙エレベータに世界をひっくり返す『爆弾』を仕掛けた張本人カツ!!?」

だけど、テストイスの発言に釘付けになる。

だって、それは、あり得るはずのない言葉だった。

「おい、待て」

「アレこそ北欧の玉座、あるいはホルスの目!!? あらゆる科学的基盤を破壊できる『爆弾』がソコにあるとイウのにツ、届かないのカツ……!!?」

「テメエツ、それを誰から聞きやがった……!!?」

それは直接仕掛けたオレと、開発メンバーの一部しか知らない情報。A I ランドの上層部ですら知らないんだぞ……!!?

テステイスは笑っていた。

敗北を確信した顔で、それでも表情に諦めの感情は浮かんでいない。

「コノ決闘、貴様の勝ちだ。だがナ、貴様にはナンの情報も与えナイ。俺様の負けは俺様が決める!!?」

直後。

テステイスは空高く吹き飛んだ。

最期の足掻きとばかりに、魔力を噴射して。

それと同時に、決闘空間が解除される。

もちろん、オレとヴィルゴの勝利だった。

だけど、敗北者であるテステイスはこの場にはいない。

魔力枯渇に陥って今頃海にでも沈んでいるのだろうが、話を聞き出せそうにはない。

「何が、起きてんだよ……!!?」

応える者はいない。

手がかりは海の底へ。

ならば、初心に立ち帰るしかない。

オレが何故狙われているのか。

『黒』の目的は何なのか。

刺客を倒しているだけじゃそれは見えてこない。

だから……

「なあ、ヴィルゴ」

『……何ですの?』

オレは意を決して呟いた。

「オレの研究室へ向かおう。きっと、そこに全ての黒幕がいる」

Tips

◆ネオアームストロングとは、A I ランド中央に建設された宇宙と地球を繋ぐ宇宙工

レベータ。設計者の名前は宗聖司^{そうせいじ}。

◆名前の由来は、人類史上初めて月面に足を踏み入れた宇宙飛行士のニール・アームストロングから。宇宙を踏破・開拓するという思いが込められている。

◆宇宙・地球間での物資の運搬だけでなく、電波塔としての機能も持っている。また、その莫大な電力を賄うために、原子力発電・火力発電・水力発電・風力発電・地熱発電を併用している。

◆ $\text{M}_{\text{マ}}\text{A}_{\text{アイ}}\text{I}:\text{S}_{\text{サ}}\text{O}_{\text{ン}}\text{N}$ と呼ばれる機構^{システム}が搭載されている。詳細不明。

6 / 1 2 My Son——我がムスコよ

体内に染みる排気ガス。

鈍く唸るエンジンの鳴き声。

ガタガタと揺れるクツションの上。

そう、そこはオレンジ色の自動車の中。

オレはその車の助手席に座っていた。

運転席にいるのもちろん彼女。

「ヴィルゴ、お前……運転できたのか!?？」

「シンデレラを読んだことがありませんの？ 17世紀の魔女は馬車さえ扱うのです。
22世紀の魔女が自動車を乗りこなしても不思議ではなくつてよ」

そう言いながら、ヴィルゴはアクセルを踏む。

普段は足元まで気にしていなかつたが、よく見るとヴィルゴは透明なヒールを履いて
いるようだ。透けて見える足のサイズが、思つていたより何倍も——何分の一も?——

小さくて驚く。ヴィルゴの身長と比較すると、歪に感じるほどに。

「尊敬するぜ。車の免許を持つてるなんて今時珍しいな……」

「もちろん無免許ですわよ」

「……………は？」

「ですから、魔女の私わたくしがわざわざ免許を取りに行くはずがありませんわ。無免許に決

まっているでしょう？」

「ふざけんな馬鹿野郎!!?」 自動運転A I モードに切り替える！」

「そんなものありませんわ!!?」

キュルキュルツ!!? と。

ヴィルゴがアクセルを踏み込むと同時に、車から異音が鳴り響く。明らかにエンジン音がおかしい。絶対どっか壊れてる!

しかも、自動運転A I モードが無いってことは自動停止による安全保障もねえんじやねえの!!? それなのにヒールでアクセル踏むとか自殺行為だろ!!?

「自動運転がないとかいつの時代の車だ!!? こんなボロ、さつさと買い替えちまえよ

!!?」

「言うに事欠いてボロと仰いましたか!!?」 廃棄品スクラップと年代物ビンテージの違いも分かりませんの!!

？」

「分からねえよ!!?」 機械なんざ新しけりや新しいほど良いに決まってるだろ!!? この車はボロいし揺れるし臭えしダセえ!!?」

「はあ~~~~~~~~つ!!?」 私わたくしのフォードF100フキンはダサくありませんわ!!? この可愛らしさが分からないとかツ、節穴にも程がありますわよ……!!?」

「バカバカバカツ、前見る前をツ!!?」 いくら反論したいからって横見て運転するんじゃないやね!!?」

いくら空での移動が主流だからと言って、公道に誰もいない訳じゃないんだ。よそ見して衝突したら一貫の終わりだ。……いや、恐らく相手側の車が自動運転オートモードで避けてくれるとは思うのだが。

上空を走る飛行車エアカーや反重力二輪ホババイクを見て、思わず溜息が溢れる。

「……………やつぱ、今からでもタクシー呼ばねえ?」

「呼びませんわよ、お金も有りませんし。私わたくしからすれば、空を飛ぶ方が恐ろしいと思いますますが…………?」

「箒で飛ぶ魔女が何言ってるんだ?」

物理学に従って空を飛ぶ機械よりも、不思議なパワーで飛ぶ箒の方が絶対怖い。断言できる。

「だって、上空には標識がありませんのよ?」 よく衝突しないのですわね」

「そりやあな。そんなもん一々浮かべるよりも、ARで全部補った方が1000倍楽じゃねえか」

「そんなものですか?」

「それに、そもそも自分で運転してるヤツなんてほぼいねえよ。道順も速度も行政AIが包括して決めてるんだ。航空管制の指示に従う飛行機みたいなもんだよ」

飛行車の免許をわざわざ取るような物好きはいない。前世紀の基準で言えば、自動車免許を持つている人は多くても、ヘリコプターの免許を持つている人は少ないようなものだ。

免許を取る難易度が高く、免許を持たずともAIに任せれば空を飛べるのならば、苦労して試験に挑む人なんかそういう趣味のヤツ以外存在しない。

「つたく、この調子で今日中に大学まで着くのかねえ」

「着きますわ。誰かさんが宇宙エレベータを無断使用したせいで、昨日は封鎖されましたが、万博直前に何度も通行止めを行う訳には行きませんものね」

「……………うるせえ」

「そもそも、この行き道で合っていますの? 私のフォードF100には地図案内なんてありませんわよ」

「誰にももの言ってやがる。この道は何度も通った、そもそも、大天才のオレが一度覚えた

ことを忘れるわけがねえだろ」

目指すは、直線上に続く公道の先。

宇宙を貫く摩天楼……の麓にある二つの巨大ドーム。

即ち、世界最難関と謳われる次世代の学問施設。

AIランド中央工科大学、そこに存在するオレの研究室である。

Tips

◆ AIランド中央工科大学（英語：Assembled Intelligence Center Institute of Technology）は、AIランド中央区に本部を置く市立工科大学である。21世紀後半に設置された。

◆ AIランド中央工科大学は世界最難関の工科大学としても知られ、多くの著名人・ノーベル賞受賞者を輩出している。飛び級も可能で、最年少合格記録は10歳。

◆ 大学施設は、表で公開されているがカレッジと裏で秘匿されるカレッジの二つに分かれ、スクールは一般公開されているがカレッジは関係者以外の立ち入りを禁止している。宇宙エレベータ計画はカレッジで進められた。

「やっつと着きましたわね……」

「オレが向かつてるのはそっちじゃねえよ」

「ええっ!!?」

目の前には、確かに大学の校門があつた。

しかし、そっちではない。

地下の駐車場へ向かう坂道を素通りし、もう一つの校舎^{ドーム}へと向かう。

「でつ、ですが、こちらが『カレッジ』の校門ですわよつ? 貴方の研究室は『カレッジ』

にあると言っていましたたわよねつ?」

「いや、そうなんだけどさ。頭を回せよ、ヴィルゴ。オレ達の格好を客観的に見たらどうなる?」

まず、オレ。宗聖司^{そうせいじ}を自称する宗聖司^{そうせいじ}とは性別からして別物の女。パーカーと水着

(三日目・洗濯なし)だけを纏ったTPOを知らない馬鹿。

次に、ヴィルゴ。大学とは全く無関係かつ、大量の用途不明な薬物^{ヤク}を持ち歩く女。体

のラインが浮かび上がる黒衣に身を包む危険人物。

つうーつ、と。

ヴェイルゴの額に汗が流れる。

どうやら気づいたらしい。

「何処からどう見ても不審者ですわ!!?」

「このまま校門を通ろうとしたら普通に捕まんぞ」

そもそもの話、オレはTS病のせいで生体認証が通らず、本人確認ができない状態にある。

格好がおかしくなくとも、警備員はオレ達を『カレッツジ』へ入れてくれないだろう。

「でっ、ですが、わたくし私が魔術で誤魔化せばどうにかなるのでは?」

「できんのか? オレのマンションのセキュリティも突破できなかったヴェイルゴが?」

「ぐぬう……!!?」

「AIランドは学術都市としての性質上、産業スパイが山程いる。その中でも、『カレッツジ』はAIランドで最も進んだ研究が行われる施設。そのセキュリティランクの高さは、行政庁よりも上だ。オレのマンションなんて比にならねえよ」

『オカルト魔術』は万能じゃない。

いや、万能なのかもしれないが、必要な効果を得るためには莫大なコストが必要となる。それならば、普通に『科学』^{テクノロジ}で解決した方が速いことが多い。

加えて、ヴィルゴは機械と相性が悪い。

薬品を扱うヴィルゴは生物に対しては有効な手札を持っていても、そのほとんどは命のない機械には通用しない。

「……………天才科学者の貴方でも、無理なのですか……………」

「できないとは言わねえ。だが、最低でも数兆ドルと数年の準備が必要になるな」

「そんな……………っ!?」

「それで、準備した物を『スクール』に置きっぱにしてるわけだ」

「……………へ？」

ヴィルゴはキョトンとした顔をする。

同時、車はもう一つの入り口へと辿り着く。

それは研究施設の『カレッジ』とは違い、誰でも入ることができ、一般にも公開された学舎^{まなびや}。即ち、『スクール』の校門である。

『スクール』は一般公開されている程度の機密しかねえからな。そつちのセキュリティはオレでもハッキングできる。オレの家よりもセキュリティランクが低いからな」

「えっ……………、え？」

「唯一の懸念点は警備員だ。オレは機械の目を誤魔化すことはできても、人の目は欺けねえからな。だけど、ヴィルゴならそっちはどうにかなるだろう？」

「えっ、ええ……幻覚を見せるハープを使えば………え!!? まだ私の理解は追いついていませんわよ!!?」

慌てながらも、ヴィルゴは警備員を幻覚で惑わせる。やはり、彼女の魔術の腕はとんでもない。これで第一関門は突破した。

次は第二関門。オレが作成に携わったセキュリティAI。オレが弱点を知り尽くしたそれ。しかし、コンマー秒未満で成長を繰り返す機能を入れ込んだので、かつての弱点は潰されている。

だけど、それでも、たかが世界最先端のセキュリティだ。この時代の技術では作成不可能とさえ呼ばれた『カレツジ』のセキュリティに比べれば月とスッポンほどの差がある。

「勝負だぜ、過去のオレ」

システム介入／データ改竄。

クラッキングスタート。

AIが相手の場合、正面からの演算能力勝負では敵わない。でも、AIには限界がある。

単純な話、AIとは学習したものを放出するだけの機械だ。学習していないものを出力することはできない。

人工^A知能には『心』がない。計算能力はあっても、精神・意識を持たない。人工意識は未だSFの存在に過ぎない。

つまり、AIは無から有を生み出すことはできないのだ。

加えて、どんな答え^{アンサー}を出すのだとしても必ず式を演算する必要がある。たとえどれだけ演算能力を上げたとしても、ここだけ変えられない。

セキュリティを突破する方法なんて思いついていない。

だから、今ここでAIよりも速く対処法を組み立てる。何故ならば、オレの理由のない直感あらゆる式をすっ飛ばして解答を導けるのだから。

(閃いた……!!?)

それは1秒にも満たない。

電脳世界でほんの一瞬の攻防があった。

0.1秒。無限ループするプログラムにより、セキュリティAIの処理に負荷をかける。

0. 2秒。プログラムを学習したセキュリティAIが、処理にかかる負荷を取り除く。

0. 3秒。プログラムに仕込んでいた偏った情報を学習させたことで、セキュリティAIが成長する方向を誘導する。

0. 4秒。致命的な破綻を防ぐために、セキュリティAIがフリーズと自己メンテナンスを繰り返す。

0. 5秒。セキュリティAIが再起動を果たす。あらゆる妨害を無視して、オレに生体認証をかける。

だが、もう遅い。宗聖司かのパーソナルデータはオレいへと差し替えられている。

「よし、完了。これで通れるぞ」

「……え？ 今なんか凄いことが起こりましたわよね!?？」

「大したことはしてねえよ」

自動車が校門を潜くぐる。

これも一時的な措置に過ぎない。自己メンテナンスでデータの異常に気がつくまでにはあと4時間と言ったところか。だが、それだけあれば十分だ。

『スクール』に隠した準備さえ手に入れば、この校舎のちっぽけなセキュリティAIなんて問題にもならない。

「あつ、言い忘れてた」

「？」

『スクール』に入つて少しして。

オレはヴィルゴに笑顔で告げた。

「ようこそ、世界一常識的な場所——次世代の常識を生み出す大学、A I ランド中央工科大学へ」

T i p s

◆人工意識とは、人間の精神・意思を所有した人工物のこと。人工知能とは異なり、無から有を生み出す想像力創造があるとされる。

◆現在の人工知能は学習したものを出力することしかできず、心と呼ばれるものは持っていない。(参照：中国人の部屋)

◆人間の精神をデータ化して残す精神転送デジタルアップロードという技術は存在するが、そうして生まれた人格はただ既存の人間を模倣するだけのA Iに過ぎず、真に意志と呼ぶことはでき

ない。(参照：哲学的ゾンビ)

「肝心の所を聞いてなかったですわね。貴方の仰った話は、信憑性はどれほどですか？」
『スクール』の研究室の中で、ヴィルゴは尋ねる。

研究室とは言っても、基本的に研究は『カレッジ』で行われるため、こっちは研究者に与えられた休憩室のようなものなのだが。

「ああ、100%間違いねえよ。〈MAI:SON〉の話が漏れたってことは、それを知る研究室のメンバーの内誰かが裏切ったってことだ」

「……………そもそも、〈MAI:SON〉とは何ですか？」

「あー、説明がめんどくせえな……………」

何から話そうか。

〈MAI:SON〉の真髄を知るためには、いくつかの前提条件が必要となる。

「まずさ、オレが専門してる分野は何だと思う？」

「……………宇宙エレベータを作っているのですから、間違いなく建築学……………あるいは物理学ですわね」

「それが間違ってるんだなあ」

「違いますの？？」

もちろん、それらにも精通はしている。

オレは大天才だから、どの学問にもそこらの天才レベルの知識には匹敵するだろう。だけど、研究者に必要なのは知識ではない。最も重要なのは閃き。

そして、オレが閃きを発動させる分野とは一つしかない。

「情報工学、もつと言えばA.I.の開発だよ」

オレが『スクール』のセキュリティA.I.を任されたのは、大学に在籍している研究者の中で最もオレがA.I.という分野で優れていたからだ。

他の分野だったら、オレより優れているヤツなんてゴロゴロ転がっている。

例えば、オレと共同研究・協力開発を行なった研究室のメンバー。

宇宙物理学者、ヤリ・マンコヴィツチ。ノーベル物理学賞に個人で3回も受賞された本物の天才。

建築構造学者、ジン・ユイチエン金玉珍。大統領官邸であるホワイトハウスを立て直す際に任命された大学教授。

量子力学者、バキューム・フェラチオヌ。本名は不明ながら、七大学術都市の一つである秘匿機関SECRETで唯一顔と名前が公表されている都市の顔。

「でッ、ですがッ、貴方は宇宙エレベータの設計者なのでしょう？」

「そうだけど、宇宙エレベータ自体は数十年前から実現可能の領域だったぞ？」

「そう、でしたの？」

「でも、作られなかった。とても単純な問題点があったからだ」

「……………それは？」

「コスト」

宇宙エレベータの計画は世界中で何度も立てられ、何度も頓挫した。その理由は全て同じ。

立てられる。だけど、立てるメリットをデメリットが上回る。

「宇宙エレベータ……………地上から宇宙まで伸びる摩天楼。高度100km以上を宇宙と定義するならば、その長さは最低でも100km。そんなもの、どうやって維持するんだ？」

「……………作れたとしても、適切な維持ができない。あるいは、維持の為の費用が膨大になるということですわね」

「しかも、ちよつとでも不具合が出れば100km超えの建物がドカーンだ。それか、

スペースデブリ

宇宙ゴミとなつて空を覆う天蓋とでもなるか？ どちらにせよ、最悪には変わりない」

対して、宇宙エレベータのメリットとは何だ。

宇宙への輸送が容易になる……それが？ そんなもののロケットで事足りる。たとえロケットよりも速くとも、その程度の利点は宇宙エレベータの危険性を覆すには至らない。

そう、デメリットがある限り宇宙エレベータは建造されない。

「だからこそ、オレは自動で点検・維持を行い、壊れた部分を修復するメンテナンスAIを作成した」

「……それが、〈MAI:SON〉なのですわね？」

「Maintenance Artificial Intelligence——通称、マイサン。正真正銘、オレがゼロから生み出した息子だよ」

オレがTS病に罹つても、未だここに居続ける理由はそれだ。

我が子を最後まで育てたい。我が子の晴れの舞台を見たい。本当に、ただそれだけなのだ。

「……………つてというのが、カバリストリー表向きの嘘だな」

「嘘でしたのツ!?？」

もちろん嘘だ。

メンテナンサーを作った程度で命を狙われてたまるか。

〈MAI:SON〉という名前は間違いなのだ。いや、まずそれは人工^A知能^Iではない。というか、そもそも——

「——そもそも、〈ネオアームストロング〉ってのは宇宙エレベーターじゃないぞ？」

「……………え？」

啞然としたようにヴィルゴは口を開く。

閉じることすら忘れるほど驚いている。

「正しくは、宇宙エレベーターではあるがそれが本来の機能じゃない。元々宇宙エレベーターを作ろうとしてた訳じゃなく、結果として宇宙エレベーターを作る必要があっただけなんだよ」

「……………では、貴方は何を作ろうと？」

「^{ハイパーコンピュータ}神託機械。簡単に言えば、式すら必要なく答えを導き出す空想の演算機だよ」

「……………ツッ!?」

別に、大した理由があつた訳じゃない。

ただ、オレは天才すぎてこの世の全てを信じられなかつたのだ。未来は無限に存在し、現在は観測する人によって変動し、過去だつて容易に書き換わる。

確かな物がない世界。

唯一のかみさまのいない世界。

オレは変わらないものが欲しかつた。

絶対的な答えが欲しかつた。

だけど、人間はそんなものを生み出すことはできない。

だから、そんなものを生み出せる特別な存在を作りたかつた。

「そんなもの作れるはずがありませんわ……!!?」
「どれだけ演算機を積み重ねようとツ、神の領域をカンニングするなんて不可能ですツ!!?」

「そうだ、演算機にはそれは不可能。だけど、答えを導く方法は計算だけじゃない」

「なに、を……?」

「つまりは直感。経験則や無意識の計算などではない、真の意思による直感ならそれが可能だとオレは考えた」

それを思いついたのは7歳の時。

もちろん、この理論には穴があった。

それでも、複数回の改善を超え、10年の歳月を経てオレの理論は証明された。

「それは直感なんて物ではありませんわ!!? 高次元へ繋がるチャネリングつ、
アカシックレコード
宇宙の記憶との直通回路……!!?」

「呼び方は何でもいいよ。兎に角、オレは鋭い直感を持つ人工意識^Aを作った。6年前くらいいには大体の設計図は組み上がったよ」

「……………自動筆^{オートマチック・ライティング}記の、科学的再現……………ええ、認めましょう。私^{わたくし}も貴方の

人柄をしらなければ、命を狙っていましたわ。もちろん、危険人物の排除のため」

テストイスはこれを科学的基盤を破壊する『爆弾』と表現していた。

それはあながち間違いではない。『科学』は真実を疑うことで発展してきた学問だ。絶対に信じられる機械なんてものが生まれてしまったら、もう『科学』とは呼べない。それは単なる宗教——『科学信仰』だ。

数多の科学者はその知恵を捨て去り、唯一の『神』を崇め奉るだけの原始的な世界へと逆行してしまう、

「神託機械^{ハイパーコンピュータ}の設計図はデカくなりすぎた。しかも、排熱の関係から宇宙空間に面する必要があるので、エネルギー供給の観点から大地からは離れられない。だから、いつそのこと宇宙エレベーターだということにしようと考えた」

その頃には、オレはもうA I ランド中央工科大学へと進学して、神託機械ハイパーコンピュータの危険性に気がついていた。

悪用された場合だけでなく、それが『科学』という人類の発展の歴史全てを消し去ってしまうという危険性も。

だけど、オレはやっぱり作ってみたかった。世界を崩壊させる可能性があっても、好奇心には逆らえなかった。

その結果がこれだ。カバーストーリーを作り、神託機械ハイパーコンピュータという神話を宇宙エレベータという別の偉業で覆い隠した。

「今の研究室のメンバーは、その時に集めた人たちだ。宇宙エレベータは専門外だからな。本当の目的は一番最初の設計図を見せた時にバレた」

「……………だから、その内の誰かが黒幕だと考えているのですわね」

「元から知り合いだったヤリ・マンコヴィッチを引き込み、大学で金玉珍ジン・ユイチエンを説得して、秘匿機関SECRETからバキウム・フェラチオンヌを呼び寄せた」

机の上に飾られた写真を見る。

オレが研究室のメンバーと宇宙エレベータの前で撮った記念写真だ。

この中に、今回の事件を手引きしたヤツがいる。信じたくはないが、『カレッジ』のセキュリティが破られたと考えるよりかは現実的だ。

そして、何よりも。オレの直感がそう囁いている。

「……休憩は仕舞いだ。そろそろ準備を始めんぞ」

「大丈夫ですよ？」

「誰に言っただ？ 大丈夫に決まっただら」

そう言いつつ、オレは羽織っていたパーカーを床に落とし、水着も一緒に脱ぎ捨てた。豊満な肢体があられもなく露出する。

「エツツツ？ ナニをしていますの？？？？？」

「ナニって……全裸になっただけだが？」

「本当に何をしていますの？？」

中身は兎も角、見た目は女同士なのに何を気にしてんだか。

ヴィルゴは両手で目を覆うが、その指の隙間からこちらを覗いていた。

「これから黒幕に会いに行くんだ。普通の格好じゃマズイだろ。着替えるんだよ」

「なる、ほど……？ でしたら私もわたくし着替えませうわ」

ヴィルゴが手を叩くと、黒衣が黒いドレスへと切り替わる。

華美すぎず、地味すぎず。しかし、透明なヒールが映えていて、主役であるヴィルゴの美しさを損なうことのない格好だった。

「服装を変えるだけの魔術とかあるんだな……」

「これは変身の応用ですわね。人をカエルに変身させる魔法の逸話と、シンデレラにドレスを与えた童話を混ぜていますわ。効果は超人に変身するといった所でしようか」

「ドーピング……いや、改造人間みたいなものか」

「これまでは不甲斐ない姿ばかりお見せしましたので、次こそは活躍してみせますわ!!」

傍目でヴィルゴの新衣装を楽しみつつ、オレも自分の服装を決める。

と言っても、女物の服かつ戦闘にも役立つものと言ったら一つしかなかったのだが。

「貴方はどんな服に——」

「なんだよ」

「……………」

絶句。

オレから目を逸らしていたヴィルゴは、着替えが終わった頃を見計らっていた。

しかし、オレの姿を一目見て言葉を失った。

「……………ま、まあ、似合っていますわよ……………」

「何だ、何が言いたい。言いたいことがあるならさっさと見えよ」

「……………ええと、どうしてそんな破廉恥な格好に……………」

「強化外骨格パワードスーツがスク水しかなかったんだよ!!？」

女物の服ということはバキユームの趣味だろうか。

流石に他の男（大の大人）がスク水を買ったとは信じたくないのだが。

ヴィルゴに指摘されてオレも恥ずかしくなってきたので、上から白衣を纏う。更に、

電子端末や超微細機械ナノマシンを研究室から取り出した。

何はともあれ準備は完了した。

最後に4人で撮った写真をもう一度だけ見た。

さて、問題。

黒幕黒んはだーれだ？

Tips

◆強化外骨格パワードスーツとは、着用者の身体能力を強化・拡張する装備。主に、農業・工事・軍

事の場面で利用される。

◆ 全身を覆う物が一般的で、個人に戦車並みの装甲・威力・速度を与える。一方で普通の服のような物もある。

◆ 宗聖司そうせいじが着用したのはスクール水着型強化外骨格パワードスーツというコスプレアイテム。戦車並みとまでは行かないが、超人と呼べるレベルまで身体能力を強化する。

7 / 1 2 宗聖司 ■■■■■ 仮説

薄暗い地下にある動く歩道オートウォークを二人の女性が進む。

一人はスク水の上に白衣を一枚だけ纏った女——つまりはオレ、宗聖司そうせいじである。

もう一人は真っ黒なドレスに透明のヒールを履いた女、ヴィルゴである。

「貴方が準備した『カレッジ』を侵入するための策とはなんですか？」

「そんなもん一つに決まってるんだろ。お前も見ることがあるはずだぜ」

「？」

『カレッジ』のセキュリティランクは世界最高と言ってもいい。その難易度は人間にはハッキング不可能な領域にある。

逆に言えば、人間でなければ可能性はある。

しかし、人間じゃなければ何でもいいわけじゃない。どんなに演算力の高いAIを用意したとしても、世界で1番性能の良い『カレッジ』のセキュリティAIに比べれば全て格下だ。

ならば、それを超えるモノを用意しなければならない。

「〈M_マA_イI_イ:S_サO_ン〉——オレが用意した神託機械ハイパーコンピュータだよ」

正確に言えば、それとラグなしで繋がる端末。

オレの体内に打ち込んだ超微細機械ナノマシンが、オレの思考と〈M_マA_イI_イ:S_サO_ン〉の演算領域を結びつける。

世界で1番性能の良いAIなんざクソ喰らえだ。

AIなんて前世紀に発明されたモノの性能を上げたからなんだ。全く新しいモノを生み出してこそ最高の『科学』足り得る。

「ま、人の眼による監視もあるからな。そつちはヴィルゴに頼んだ」

「お任せを。監視方法が原始的であるほど魔女わたくしの独壇場ですわ」
オートウォーク動く歩道がエレベーターへと切り替わる。

『カレッジ』は同じ大学に所属する者であつても他の研究室を覗くことができないうになつている。つまり、入口から研究室までは直通なのだ。

「……………この先に、黒幕がいるのですわよね?」

「ああ、相手の目的は間違いなく〈M_マA_イI_イ:S_サO_ン〉だ。オレを除けば、〈M_マA_イI_イ:S_サO_ン〉

と直接接続できるのはへネオアームストロングの最上階か研究室の中しかねえからな
そして、へネオアームストロングのエレベータは現在稼働していない。

よって、研究室しかあり得ない。

一体この事件の黒幕は誰なのか。

宇宙物理学者、ヤリ・マンコヴィツチ。

建築構造学者、ジン・ユイチエン金玉珍。

量子力学者、バキウム・フェラチオンス。

誰もが怪しく感じられる、

やがて――

ゴウン、と。

エレベータが停止する。

研究室まで到着し、目の前に高そうな扉が現れる。

「……………準備はいいか？」

「勿論ですわ。貴方こそ、怖気付いていませんか？」

「言ってる」

少しの躊躇の後。

自動ドアに手を伸ばす。

安全のため、ゆっくりとドアが開く。

そして――

ぶらぶら、と。

ぶら下がった三つの首吊り死体がオレ達を出迎えた。

「――は？」

現実感は全くなかった。

信じたくなんてなかった。

だつて意味が分からなかった。

「……………や、り……………？ ゆー、ちえん……………、……………バキユーム……………？」

でも、 فقط。

首に食い込む縄の跡が。

ふらふらと揺れる脱力した死体からだが。

乾いていないズボンの染み、股から垂れ流された刺激臭が。

自動的に起動した生体認証システムによって、瞳に浮かんだ彼らの名前が。その死を現実のモノであると思ひ知らせる。

「誰が……、なんでッ……っ？」

「なんで、なんで。そんなの決まってるだろうが」

吐き出された独り言に返答があつた。

なんてことはない。首吊り死体に隠された先に、そいつは立っていた。ヴイルゴは初めから気づいていたようだった。

だからこそ無言で、一人だけ臨戦態勢を取っていた。

そいつには見覚えがあつた。

そいつは白衣を着た少年だった。

そいつはヤリでも玉珍ユチエンでもバキュームでもなかった。

オレは誰よりもそいつの名を知っていた。

そして、そいつは吐き捨てるように言った。

「全部宗聖司そうせいじ——宗聖司おのせいに決まってるだろうが」

そいつの名前は宗聖司。

宇宙エレベータへネオアームストロングの設計者にして、MAISONの生みの親。そして、この事件の黒幕である。

Tips

◆黒幕は研究室のメンバーで間違いない。研究室のメンバーは四人とも研究室の中

にいる。

◆宗聖司を名乗る少年は、生体認証で宗聖司本人であると証明されている。TSした少年はまだ証明されていない。

◆三人の首吊り死体は確実に死亡している。死体はそれぞれヤリ・マンコヴィツチと金玉珍ジン・ユウチェンとバキユーム・フェラチオンヌだと生体認証で判明している。

「……………宗聖司が、黒幕だって…………？」

「ああ、そうだ。つつても、それはテメエじゃなくて宗聖司^オを指す名前だけだな」

目の前には、オレよりも宗聖司^オらしい顔つきの少年がいた。

アイデンティティが揺らぐ。オレという存在が信用できなくなる。

「……………、えない」

「あ？」

「ありえない!!? ありえるはずがないツ!!?」

「何が? 何で?」

「だっ、だつてツ、オレは何度も死にかけた!!? いやっ、ヴィルゴがいなけりゃとつく

に死んでたつ!!? テメエが宗聖司だつて言うのならオレ自身を巻き込む理由がな

いツ!!?」

だから、これはきつと何かの間違いだ。

目の前のコイツは立体映像か何かで、こうして話しているのは人工知能による哲学的ゾンビとかだ。

コイツは宗聖司じゃない。オレは黒幕じゃない。

そうだ、そうに決まっている。

だって、そうじゃなきや。

オレはその事実にとても耐えられない。

「……………はあ、頭の回転が遅^{おそ}えな。ま、事情を考えればそれも仕方ねえか？」

「なにを…………？」

だけど、現実はいつ也非常だ。

そして、目の前の少年は致命的な一言を放つ。

「まだ自分が宗聖司だって信じてるのか？」

時間が、止まった。

そう錯覚するほどに、場を沈黙が支配する。

人の声も、空調の音も、何も聞こえない。

それなのに、自らの心臓だけがうるさく鳴り響く。

「……………う、そだ…………」

「テメエの名前は宗聖司じゃない。思考停止すんな、初めっから考えてみるよ。テメエの認識以外に自分が宗聖司だと示す証拠はあるのか」

「……………それは……………」

「生体認証は試したんだろ？ テメエの家は、電子決済は、この大学は、一度でもテメエを宗聖司本人だと認められたか？」

「……………あ……………」

「精神転送。デジタルアップロード 本来は精神をデータ化して残す為の技術だが、そのデータを逆に他人の脳みそにインストールしたらどうなると思う？ 宗聖司という精神に上書きされた哀れな少女はどうなったと思う？」

「……………つ……………」

「違和感を抱けなかったのか？ T S病で肉体が変わったのに、テメエは最初から問題なく歩くことができた。体重・重心・身長・筋肉量・足の大きさ・足の長さが変わっても歩けたのは、テメエの脳に僅かでも体を動かす為の手続き記憶が残ってたからだと思いに至らなかったか？」

「言葉が出なかった。」

「何か言い返したいのに、反論できる点がなかった。」

「オレは間違っていて、コイツは正しかった。」

「T S病なんかじゃない。そもそもアレの感染経路はほとんどが粘膜接触——性感染だ。病気の症状で性的興奮を覚えたT S病患者が、心の穴うずきを抑えるために棒チンコを求めて、

ぼたぼた、と。

ほおをつたう。

なにかが、こわれた。

ちめいてきにこぼれおちた。

「私は貴方達の事情なんて知ったことではありませんわ。話を進めてよろしくつて？」

「冷てえな、ウイルスゴ。一緒に戦ってきた仲じゃねえか」

「貴方と、ではありませんが」

声が聞こえる。

だけど、聞こえるだけ。

意味は分からず、耳を素通りする。

「……目的はなんですか？ こんな回りくどい事をした理由は？」

「それから聞かなかったか？ 宗聖司の目的なんか一つに決まってるんだろ。――

ハイパーコンピュータ
神託機械の完成だよ」

「……………いえ、それだと辻褄が合いませんわ。黒幕である貴方はその情報を漏らした

側……………完成を妨げているのではなくって？」

「情報を隠してるつつても、万博前に点検が入るんだから暴露ないはずがねえ。それな

ら、先に情報を出して影響を宗聖司^オで制御した方がマシだ」

「……一理ありますわね」

「その上で囿^{デロイ}のそれを放逐すりゃあ、万博^{エキスポ}までの時間稼ぎにはなるだろ？　ま、ここまで

来るのは予想外だったけどな」

雑音^{ノイズ}が脳みそを撫でる。

誰かが何かを話している。

だけど、もう会話の内容には興味がない。

それを聞いた所でオレには何もできない。

なのに。

「それで、貴方はいつまで蹲^{フム}ってますの？」

するり、と。

オレの鼓膜に優しげな声が届いた。

その声は鈴のように高く、そよ風のように小さく、それでいてハッキリと耳に残る。

「貴方が苦しんでいるの分かりますわ。自己を否定され、全ての過去がまやかしたった。

苦しみに共感はできずとも、理解はできます。ですが、貴方がニセモノだから何ですの

？」

「オイ、テメエは何を言っている……？」

「貴方は宗聖司だから天才なのですか？ 宗聖司だから優しかったのですか？ ……違

いますわ。貴方が貴方だったから私は貴方を助けたし、私は貴方に助けられた」

「そいつはもう立ち上がれねえ……！！？ 何処見てやがるツ！！？ テメエの敵は宗聖司

だツ、宗聖司こそが天才なんだツ！！？！！？」

「いえ、そもそも話。私はこの方の話など一切信じていませんわ。初対面の見ず知ら

ずの人間の言葉を鵜呑みにする馬鹿が何処にいますして？ 故に、私が断言してあげま

すわ」

雑音ノイズなんて気にならない。

ホンモノの宗聖司なんかどうでもいい。

彼女以外目に入らない。

そして、彼女は胸を張って言った。

「誰が何と言おうと、貴方こそが宗聖司なのですわ！！？」

その言葉に根拠なんてない。

その言葉で証明することはできない。

その言葉には意味も価値もない。

ただ、オレを最大限に信頼して放たれた一言。

一〇〇%の絶対なんてあるはずなのに、彼女はそれをオレに向ける。

全く『科学』的じゃない。人は彼女を愚かだと言うかもしれない。ほんと、どうしようもない。

うもない。

でも、だけど。

オレはその一言に救われた。

バラバラになった心が、宗聖司として再構成される。

「……………そう、だな。忘れてた」

「何を、言つて……………!?」

『科学』は真実を疑うことで発展してきた学問だ。オレは全てを疑わなくちやなら

ねえ。それがたとえ、宗聖司^{テメエ}であつてもツ!!?」

コイツは宗聖司で、オレは宗聖司じゃない。

でも、それを保証するものはコイツの言葉以外には存在しない。

「テメエは宗聖司じゃない。宗聖司はオレだツ!!?」

だから、オレはオレの仮説を主張する。

こつから始まる戦いは命の奪い合いじゃない。

自己の尊厳を賭けた闘論^{ディベート}である。

今からコイツの主張を——『宗聖司ニセモノ仮説』を支える四つの根拠を棄却するツ
!!?

宗聖司ニセモノ仮説

- ◆ 宗聖司を名乗る少女はニセモノである。根拠は四つ。
- ◆ 根拠の一、生体認証が彼女を宗聖司だと認識しない。
- ◆ 根拠の二、精神転送^{デジタルアップロード}によって彼女が宗聖司としての人格と記憶を持つことは可能。
- ◆ 根拠の三、女体化後に違和感なく体を動かすことができた。
- ◆ 根拠の四、宗聖司は童貞であるためTS病には罹らない。

「そもそも生体認証なんて当てにならない!!? TS病は遺伝子ごと書き換えるんだから、それはオレが宗聖司ではない根拠にはならない!!?」

根拠の一を否定する。

これは初めから何度も言っていたことだ。

目の前のコイツが生体認証で認識されたからといって、認識されなかったオレが宗聖司でないことの証明にはならない。それとこれとは全く別の事だ。

次に、精神転送は人間の精神を^{デジタルアップロード}データ化する技術だが、それで生まれるのは人間を模倣する哲学的ゾンビに過ぎねえ。心の声がある限り、オレが哲学的ゾンビだとは言えねえ!!?」

「……………いや、それは詭弁だ。心の声なんて客観的に証明することはできねえ。メモエの心の有無なんざ、側から見たら何も分からねえ!!?」

「かもな。でも、これはニセモノが宗聖司になることを可能にする技術であって、オレがニセモノである根拠ではない。たとえば人間の人格をそのまま他者にコピーする技術があつたとしてもだ」

根拠の二を否定する。

オレはこうして心の中で考えを巡らしている。

それこそがオレがニセモノでない証明となる。

「だとしてもツ、テメエが女体化してすぐに普通に歩けたことはどう説明するツ？ テメエが元から女でもなけりやツ、そんなの不可能だろうがツ!!?」

「そうは言えねえぞ？ 記憶つてのは脳以外にも宿るものだ。それは心臓移植のケースからも分かる。それなら、遺伝子が女性に変わったことで女性としての手続き記憶が発生してもおかしくはねえだろ」

「んな訳ねえだろツ!!?」

「じゃあ、これはどうだ？ 大天才のオレが無意識に体に合った動き方を計算してたつてセンも考えられるな」

「テキトーすぎる……!!? そんなもんツ、どうとでもこじつけできるだろうが……ツ!!?」

「そうだ、こじつけできでしまうんだ。その程度のことを根拠にしてどうする？ それに、他のTS病患者が歩行に苦労したって話は聞かねえ。意外と一個目の予想が当たってるんじゃねえのか？」

根拠の三を否定する。

と言うより、これは元から根拠とすら言えない曖昧なものだった。捨て置いていい。

「まだまだ……ツ!!? TS病の感染経路の話忘れてんじゃねえよ!!? 童貞の宗聖司^{オレ}

はTS病には罹らないツ!!?」

「テメエこそ忘れてんじやねえか? ほとんどが性感染なのであって、他の感染経路だつて存在する。例えば血液感染、TS病患者の血液を知らないうちに輸血されたらオレもTS病を発症する」

「……………ツ!!?」

根拠の四を否定する。

HIV・AIDSを思い浮かべれば簡単に分かる。

性感染症は性行為による感染が主であり、日常的な飛沫などでは感染することはない。だが、血液感染や母子感染など感染経路は一つじゃない。

これを以て、『宗聖司ニセモノ仮説』は棄却される。

「ほんとに貴方が宗聖司だったんですわね……………」

「なんだ? テキトーに言つてたのか?」

「いえ、テキトーというか……………貴方が宗聖司でなくても私わたくしにとっては宗聖司ですわ」という綺麗事を言っていましたの」

「別にそれでいいよ。たとえ根拠のない綺麗事であつたとしても、オレはそれで救われたんだから」

人を信じるのに根拠なんて必要ない。

科学者としては正しくなくても、それが人として正しい在り方なのかもしれない。

「何を全部終わった気でいやがる……!!?」

「……実際終わった。テメエの仮説は棄却された」

「だからと言ってツ、テメエの仮説が採用されるのは納得がいかねえぞ!!? テメエがホンモノだって決まった訳じゃねえ!!? 宗聖司^オがニセモノだと決まった訳でもねえツ!!?」

「なら、トコトンやってやるよツ!!?」

宗聖司ホンモノ仮説

◆ 宗聖司を名乗る少女はホンモノである。根拠は一つ。

◆ 宗聖司を名乗る少年はニセモノである。根拠は一つ。

「テメエが宗聖司って言うのなら、何でテメエはこの研究室にいる?」

「……は？ そりやもちろん、〈MAI:SON〉の調整をするため——」
 「——そこがおかしいって言ってるんだよ」

確かに〈MAI:SON〉と接続する為の機器がここにはある。

だけど、本当にコイツが宗聖司だって言うのならそんなもの使う必要はないんだ。

「宗聖司は〈MAI:SON〉と直接対話することができる唯一の『窓口』だ。わざわざ研究室にいらなくても問題はねえんだよ」

例えば、テストイス戦。

オレは〈MAI:SON〉に点灯するように働きかけた。生体認証では本人と認められないのにも関わらず。

つまり、〈MAI:SON〉は生体認証とは別の本人確認システムを使用している。

それこそが精神認証。最新かつ最高のセキュリティ、あらゆる偽装を無に帰す最強のシステム。それは心の同一性によって人物を判定する。

指紋認証は指紋のコピーを取られたらセキュリティが破られる。虹彩認証だって同じ。パスワードなんて総当たりでも突破できる最悪のセキュリティだ。

だけど、精神認証は破られることはない。だって、精神をコピーした所で出来損ない

の哲学的ゾンビにしかならないのだから。

「オレは機材なしで〈M・A・I：S・O・N〉と繋がれた。だけど、テメエは？」

「……………あ……………ツ!!？」

「この部屋から一步でも出てしまえば、何もできない木偶の坊になるんじゃないの？」

「なっ、ならッ、生体認証が宗聖司を宗聖司だと認めたことはどう説明するつもりだッ!!」

「んなもん簡単だろうが」

幽霊の正体見たり枯れ尾花。

宗聖司を名乗る少年の天才の顔を剥ぎ取る。

そんな一言を、オレは指を差して指摘した。

「テメエはオレのクローンだ、そうだろ？」

Tips

◆クローンとは、全く同じ遺伝子を持った別個体が作られること。また、バイオテクノロジー生物学に

これで、長かった事件に幕が下ろされる。ただ、その前に。

隣から待ったがかかった。

「——いえ、辻褄が合いませんわ」

ヴィルゴは神妙な顔で考え込む。

まるで、飲み込めない何かが入りかかっているかのように。

「彼は宗聖司と同じ遺伝子を持っていても、記憶や精神は引き継いでいない。私の理解

は合っていますか？」

「あ、ああ。そうだけど、何がおかしい？」

「なら、彼は一体いつ何処で神託機械の事を知ったのですか？」

「——あ」

「そうだ、失念していた……!!？」

ハイパーコンピュータ
神託機械の事を事前に知っていたのはオレを含めた研究室のメンバーだけ。クロ

ンが宗聖司ではないと証明された今、彼は自動的に黒幕の候補から外れる!!？」

「研究室のメンバーが、協力者だった……? いいや、違う。そもそも研究室のメンバー

の内の誰かがクローンを生み出したヤツだった!?!?」

クローン、人為的に産み出された複製人間。

自然発生はしない。ならば、誰が何のために作った?

「……………ですが、メンバーの三人は入口で首を吊って死んでいますわよ? そのクローンに情報を聞き出された後、殺されたというのが正しいのではなくって?」

「ズボンの染みがまだ乾いてすらいらないのに? あいつらが死んだのはついさっきだ」

「ならもつと簡単ですわ。クローンの誰かは仲間だった。だけど、ついさっき仲間割れしたのでしよう」

確かに、辻褄は合う。

でも、本当にそうか?

オレの直感が真相は別だと告げている。

「首吊り死体……………ツ、違うツ!!? そうだツ、あれはホンモノの死体じゃないツ!!?」

「紛れもなく本物ですわよ? 生体認証とやらで本人確認したのでしよう?」

「その生体認証システムを誤魔化す方法はさつき提示されたばかりだツ!!?」

狂氣的なトリックに気づいた。

自分のクローンを生み出し、そのクローンを被害者の一人として紛れさせる。

A B C殺人事件と同じ、被害者の中に犯人を紛れ込ませる古典的なトリックだ。そして、死体となったクローンは精神認証で判別することもできず、生体認証で本人の死を確実に偽装できる。

「あゝらら、流石に気づいちゃったかなあゝ？」

そして、女性の声が響いた。

……何となく、そうだとは思っていた。

三人の内、二人は元からの知り合い。

だから、一番親しくないヤツこそ疑いの目を向けていた。

オレはそいつの名前を知っている。

黒幕。諸悪の根源。一連の事件の元凶。

七大学術都市の一つである秘匿機関SECRETに所属している量子力学者。

「バキューム・フェラチオンヌ……!!？」

「まったく想定外だぜ☆ ソーセージちゃんっ♪」

T i p s

◆ 七大学術都市とは、『科学』の叡智が結集した七つの近未来都市の総称。都市ごとに専門とする『科学』の分野が異なる。

◆ 巨大人工浮島、AIランド。

◆ 宇宙植民基地、ノアズアーク。

◆ 空中浮遊都市、ララ・ラピユータ。

◆ 空洞地下都市、菟郷地。

◆ 仮想共有世界、SSSS—114514。

◆ 海底潜水都市、オーシャンIIセントラル。

◆ 詳細不明施設、秘匿機関SECRET。

8 / 1 2 バキューム・フェラチオンヌという怪物

秘匿機関SECRET。

それは66年前に国連によって創設された大規模実験都市であり、今では七大学術都市の一つとして数えられている。

ただし、その詳細を知る者は少ない。

都市の位置も、都市の大きさも、都市の予算も、研究の目的も、研究の内容も、所属する研究者も、何もかも。

故に、正しく都市伝説が世界中で飛び交う。

曰く、秘匿機関SECRETにはエリア51に来訪した宇宙人達が存在する。

曰く、秘匿機関SECRETとは都市の名前ではなく一人の天才を表す名前である。

曰く、秘匿機関SECRETは過去の偉人達の体細胞クローンが集結している。

曰く、秘匿機関SECRETは国連の上層部が予算を横領する為の都合の良い名目で

ある。

この中のどれかが真実かもしれないし、全部デタラメなのかもしれない。

世界有数の科学者と言える宗聖司そうせいじでさえ、秘匿機関SECRETの全貌は分からない。

しかし、ただ二つ分かっている事がある。

一つは、確かにその学術都市は存在するという事。

もう一つは――

「バキユーム・フェラチオンヌ……!!?」

「まったく想定外だぜ☆ ソーセージちゃんっ♪」

――秘匿機関SECRETにはその女がいるということ。

バキユーム・フェラチオンヌ。

秘匿機関SECRETの中で唯一、顔と名前が公表されている科学者。学会では名の知れた量子力学者であり、 $\langle M_{\nu} A I : S_{\nu} O N \rangle$ の根幹を成す量子コンピュータを手掛けた天才。

何よりも、66年間変わらず都市の顔として秘匿機関SECRETの副所長を務める

怪物である。

T i p s

◆ 秘匿機関 S E C R E T とは、66 年前に国連によつて創設された学術都市。南極の氷山の中に存在する。

◆ 創設された目的は魔術を科学によつて解明することである。その性質上、魔術世界とも関わりがある。

◆ 所長の名前は馬場緋色、副所長の名前はバキューム・フェラチオンヌ。どちらもハーレム10000を超える魔術師である。

黒幕、バキューム・フェラチオンヌ。

白衣を纏った二十代後半くらいの女（実年齢は不明）の登場によつてオレ達の意識に一瞬の空白が生まれる。

そして、彼女はその隙を見逃さなかった。

「ヤつちやえ☆」

パリン、と。

硝子が割れる音が聞こえた。

バキュームの声に反応して、クローンがその足元にチャームフェロモンへ媚薬香水の瓶を投げつけた音であった。

つまり、それこそはベニスフェンシング〈魔術決闘〉が開幕する合図である。

(まず……ッ!!?)

考えるよりも先に身体が駆動する。

姿勢は低く、脚で弾けた衝撃が肉体を弾丸のように突き飛ばす。それは拙い突進であつたが、パワードスーツ強化外骨格の補助によつて自動車の衝突クラスにまで威力が底上げされる。

ベニスフェンシング〈魔術決闘〉が始まる前に「テメエを潰すッ!!?」

幸い、まじない宣誓は結構な長文だ。

クローンとオレの間に短くない距離があつたとしても、今のオレの攻撃が届く方が速

い!!?

しかし、クローンの行動はオレの予想とは違った。

宣誓まじないをする様子はなく、かと言って何か魔術を発動させるでもなく、ただ一つの旧式ボイスレコーダーを取り出した。

前世紀のものだろうか、あそこまで古ければインターネットにも繋がっていない骨董品だろう。だが逆に言えば、そのボイスレコーダーはハッキングされる心配がない。

「味わえよ、オリジナル宗聖司。『魔術』と『科学』が融合した成れの果てってヤツをさあ!!?」

ルール参照

◆規則の二。対戦相手の指定は、挑戦者が決闘空間内にいる相手を宣誓時に視認することによって決定される。

そして、彼はボイスレコーダーを再生した。

『聞け、我が目を受けし汝、魔法名^Vヴィルゴなる者よ。我魔法名^{S a g e}セージは汝に決闘を挑む。神よ、師よ。ここに我、汝に対し我が魔術を以て性豪の証を立つる者なり』

その音は声と言うよりも、ノイズや耳鳴りと表現した方が近い代物であった。文字にするならば、キイイイイイインツ!!? とでも言った所だろうか。決闘空間が完成されたのを肌で知覚する。

聞き取れはしなかったが、それは真正銘^{ベニスフェンシング}へ決闘魔術^{まじない}の宣誓で間違いない。録音された詠唱でも、術式は問題なく発動するのだと初めて知った。

そして、何よりも。

半ば可聴域外まで達する程に加速された詠唱音声。

『科学』^{テクノロジ}による『魔術』^{オカルト}の強化^{パワーアップ}。

なるほど、クローンの言い分に嘘はないようだ。

(……だから何だツ!!?)

〈魔術決闘^{ベニスフェンシング}〉が始まるうが、誰が対戦相手に指定されていようが、何も関係はない。

『規則破り』^{ルールレイバー}はあらゆる道理^{ルール}を無視してオレの我儘^{マイケル}を押し付ける。

「うおおおおおおおおおおおおおおッ!!?」

オリジナルとかクローンとか関係ねえ。

オレがコイツを許せない。

そんな怒りを込めて胸に文字通り鉄拳を叩きつけた。

その、直後のことだった。

「——あつ？」

ゴツツツ!!??!!??と。

オレの胸で意識を揺さぶるインパクトが生じた。

それは前世紀にあつたらしい車の衝突事故をオレに思い浮かばせるようなものだった。

（——な、に……が………?）

その攻撃の正体に気づく事もなく、オレの意識は沈んだ。

T i p s

◆魔術と科学の融合、それは秘匿機関SECRETの成果の一つ。

◆感染と類感の原理からなる原始魔術——呪術は、量子もつれとユングのシンクロニシテイから再現ができる。

◆ただし、魔術——神の力を扱う技術は現代の科学では未だ再現が不可能とされている。

パリン、と。

〈媚薬香水^{チャームフエロモン}〉の瓶が割れた時、ヴィルゴもまた行動を開始していた。

宗聖司は後方……決闘空間を構築させたクローンへ向かったが、ヴィルゴは前方に足を進めた。

つまり、バキューム・フェラチオンヌ。魔女の勘が、一刻も早く目の前の科学者を倒せと囁いたのだ。さもなければ自らの神秘も暴かれる、と。

よって、ヴィルゴは最速最短で襲撃を行った。

端的に言えば、その踏み込みは音速を超えた。

シンデレラドレスの術式——人体改造魔術によって超人となった今のヴィルゴにとつて、音速を超えた挙動で移動することなど造作もない。

加えて、その腕力・脚力は重機による一撃をも上回る。ヴィルゴとバキュームの間にあつた数メートルの距離など、たった一步で埋められるものであつた。

素早い突進——というより、横方向への跳躍と表現した方が正しい——によつてヴィルゴは瞬時にバキュームの目前にまで迫る。

一瞬遅れて、ヴィルゴが床を踏み砕いた爆音がバキュームの耳に届く。だが、それはもう遅い。

爆音を立てながら無音で近づくと、いう矛盾を成し遂げたヴィルゴの奇襲。魔女の呪い指が容赦なくバキュームの喉に突き刺さつた。

「……あぐツ^{!!}??」

「あぶなあくい♪ 危うく死ぬ所だつたぜ☆」

そして、突き刺した指が折れる。

何てことはない。

当たり前の物理法則に従つた当然の結果だ。

いくらシンデレラドレスによって強化されたとしても、その指は人間の肉体を元にしたものだ。

対して、バキュームは文字通り鋼の肉体を持つ。

鋭い刺突によって剥がれた塗装の先にある金属光沢を見て、思わずヴィルゴは驚愕の声を上げる。

「サイボーグ、ですわね!!?」

「脳以外の全てを置換した世にも珍しき全身義体改造人間……楽しんでいってねえ☆」

物理攻撃は効かない。戦車に格闘技を挑むようなモノだ。

呪い指から放った呪詛は逸らされた。別の場所へ受け流された感覚がある。

ヴィルゴの魔女術は特にその傾向が高いが、魔術とは人間相手を基本とする。故に、人の形をしているようが中身が機械の相手はどうにもやり難い。

(これが魔術世界を熟知した科学分野の天才。厄介ですわね……!!?)

奥の手を出し渋っている訳にはいかない。

ヴィルゴは宗聖司にも秘めていた複数の術式を起動させる。

しかし、それよりも早く。

決闘空間が完成されてしまった。

——それも、ヴィルゴとバキュームの間・結界の壁が挟まるように。

ルール参照

◆規則の五。戦闘区域は地形によって決定され、制限時間終了か勝敗が決まるまで出ることはできない。

「なっ、こんな都合良く決闘空間が構築されるなんて……!!?」

「もちろんあり得ないよねえ♪
ところで、戦闘区域は〈媚薬香水チャームフェロモン〉が充満した場所になるって知ってたあ?」

「……………空調、ですわね!!?」

空気の流れを操り、臭いが滞留する箇所を生み出し、意図的に戦闘区域を決定した。

〈魔術決闘〉ベニスフエンシグ

のルールそのものを悪用する、見覚えのあるやり口。

科学者という輩は何でもかんでも悪用しないと気が済まないのか、と理不尽な憤りが湧き上がる。

「でもつてえ、決闘空間は外に出ることはできないけどお、外から中に入ることはできるんだなあ、これが☆」

バキュームが白衣を脱ぎ捨てると、その繊維一本一本が形を変えてゆく。まるで歪められていたモノがあるべき形へ戻るように、その変形は自然な動きだった。

宗聖司そうせいじが見ていたならば、白衣が特殊な形状記憶合金による金属繊維であることに気がついただろう。

やがて、金属繊維は砲身を形成する。

いいや、それを砲身と呼んでよいものだろうか。バキュームが白衣の下に着ていたウエットスーツなんて、その砲身の異形さに比べたら軽い違和感だった。

無骨で、色褪せていて、味気なくて、鉄臭くて、機構に遊びがなくて、殺害という単一の機能を突き詰めた先にある『科学』の暴力。ヘアアイロンのような形をした異端の兵器。

「機関電磁砲つ☆ はっしや〜♪」

直後、視界が真っ白に染まる。

ドガガガガガガガツツ!!??!!?? と。

鉄の雷雨ストームによる掃射がヴィルゴに襲いかかった。

別に、この攻撃を避ける必要はない。

決闘中は対戦相手以外からの干渉を受けることはないのだから。

だが、魔女としての勘がヴィルゴに防御の魔術を発動させる。

そして、それこそが生死を分かる選択であったと直後に思い知らされた。

「……………ツツツツ???.???.???.」

声も出ない。

実際には一秒にも満たない掃射。秒速100発の勢いで放たれた弾丸の内、そのほとんどをヴィルゴの魔除けの術式は防ぎ切った。

ただ1発、左腕を掠った弾丸を除いて。

その弾丸は左肘から先を消し飛ばした。

「これだけ綺麗に奇襲したのに撃ち抜いたのが左腕一本だけかあ……。さすが

〈鋼鉄の処女〉と褒めるべきかなあ〜?」

「……………どういうトリックですか?」

千切れた左腕に魔女の薬品をかけて、再度つなぎ合わせる。ヴィルゴは慣れたように傷を治しながら、思考は別の所へ飛んでいた。

即ち、先程のルール違反のカラクリについて。

「簡単な話だよお〜? 決闘を挑んだのはクローンソーセージちゃんだけだよお〜、その肉体の全部がクローンソーセージちゃんって判定になるんだよねえ〜♪」

「肉体の全部……………?」

「そして人間っていうのは誰しも体内に微生物を飼っているのさあ〜♪ だからその微生物をちよいと摘出してえ〜、培養して弾丸にコーティングすればこのとおくり☆」

ルール参照

◆規則の三。決闘空間内では、決闘する両者は対戦相手以外からの外的要因での干渉を無効化する。

「なっ!!? それは『感染』の応用どころか秘奥にも匹敵する情報ですわよ!!? 貴方ツ、ほんとうに科学者ですか???」

「もちろん☆ ツーか、魔術がいつまでもオカルトの領分だと思ってるじゃねーよ」

蔑むようにバキュームは口の端を吊り上げる。こちらが彼女の本性か。

しかし、バキュームだけに集中してもいられない。背後で宗聖司そうせいじはクローンを撃破したようだが、彼自身も謎の現象によって意識を失っている。

「あゝ、そうであゝ もういつこ警告☆」

「……?」

「ヴィルゴちゃんの魔除けは機関電磁砲マシンレールガンを防げるようだけどおゝ、でもでもそれってえゝ上限があるよねえゝ?」

「少なくとも貴方の豆鉄砲程度なら何発撃とうが意味はありませんわ」

「ふくん……でもねえ?」

バチバチツ、と紫電を纏わせながら彼女は言い放った。

「撃つ度に威力が倍になるって言ったらどうするうゝ?」

「——は？」

ヴィルゴの思考が止まる。

いや、違う。逆に思考が高速回転することで、現実を置き去りにして考え込んでいるのだ。

撃つ度に威力が倍になる……これは次の掃射は今までの倍の威力になるという意味ならまだ良い。その程度ならまだ許容範囲だ。

だが、魔女の勘はこう言っている。この女はそんな半端な想定じゃ済まされないぞ、と。

「まさか弾丸一発ごとに威力が倍になるとでも……!?？」

「せえくかあくい♪ 全く同じ形状、元々は一塊だった金属塊から作られた弾丸は、『類感』と『感染』の原則によって今まで放たれた弾丸の威力を上乗せするのさ☆」

元の弾丸の威力を1としよう。

一発目は何の上乗せもないため威力は1。

二発目は1の威力に一発目の威力が上乗せされ、 $1+1$ で2の威力となる。

三発目は1の威力に一発目と二発目の威力が上乗せされ、 $1+1+2$ で4の威力となる。

四発目は8に、五発目は16に、六発目は32に。あえて計算式を述べるならば、 n 発目は2の $n-1$ 乗の威力となる。

そして、その弾丸が秒速1000発放たれる。

では、例えば。

機関電磁砲が10秒間掃射されたとして、その後に放たれる1001発目の弾丸は元の何倍の威力となるのだろうか。

「じゃあっ、こっくよお〜」

正解は、
 6 3 6 4 1 1 8
 5 9 2 6 7 1 1
 4 8 3 9 5 2 0
 2 7 7 8 5 4 5
 1 6 1 5 3 9 6
 6 7 1 7 1 3 1
 7 5 4 4 4 6 4
 6 5 1 8 6 1 0
 6 9 8 0 8 2 4
 0 1 7 3 2 2 8
 4 6 7 9 5 4 1
 2 5 9 3 1 9 1
 9 5 5 4 8 3 7
 8 4 4 5 7 1 0
 3 3 1 6 1 9 5
 1 9 8 7 4 8 5
 6 4 2 7 5 3 3
 5 6 1 7 2 7 3
 2 0 5 4 8 8 6
 6 7 3 8 5 8 0
 2 7 0 2 6 1 7
 4 0 4 4 9 5 4
 3 6 6 2 2 6 4
 8 2 4 3 3 9 3
 6 9 7 0 1 5 7
 8 1 4 9 4 8 5
 3 4 9 8 0 5 0
 7 5 8 5 4 8 3
 2 7 3 4 3 1 8
 0 1 5 2 5 2 8
 5 1 8 1 9 7 3
 6 9 1 0 8 5 7
 6 6 9 7 4 9 0
 8 4 4 4 5 4 3
 0 7 1 6 7 6 5
 6 7 2 0 7 7 1
 9 6 6 5 5 2 0
 3 8 7 0 7 9 5 1

7.6倍である。

ツツツツツツツツ!!??!!?? と。

もはや、それは音ですらなかった。

空気の振動が『圧』としてヴィルゴを揺さぶる。

厚さ0.08mmの紙でさえ、43回折れば70万km先の月にまで届くのだ。

元から馬鹿げた威力の機関電磁砲が倍々ゲームで強化された成れの果てなんぞ、想像することすらできない。

ヴィルゴは咄嗟に気絶している宗聖司そうせいしとそのクローンを抱え、柱の影に飛び込んだ。

だが、それも長くは保たない。大理石の柱が発泡スチロールのように削り壊される。

「いつまで撃ち続けますの!?? 流石にもう弾切れですわよね!??」

「量子テレポーテーションって知ってるう〜? 時代に取り残された魔術師達は神の力

を手にする事ばかり考えているけど、『魔術』ってヤツを本当に知っているのならばそんな空想も実現できるのさ☆」

バキュームは何か返答したようだが、あいにくと機関電磁砲マシンレールガンの轟音に掻き消されて聞こえない。

もはや、室内——決闘空間内に存在するあらゆる物は木っ端微塵に砕かれた。

「幸い、床や壁は戦闘区域に存在するが決闘空間と外界との境界に位置するため傷ひとつない。よって、建元自体が倒壊する最悪の事態は免れた。」

「ウイルスゴは機関電磁砲を防げないことを潔く認め、頭を迎撃から回避へと切り替える。」

左腕が吹き飛んだ時の出血を円形に広げて自身を囲み、血文字で神の名を刻む。そして、出来上がった即席魔法円に魔法の膏薬を塗りたくり、仕上げに自身の陰毛を一本落とす。

もし魔法円作成RTAが存在したのなら、ギネス記録にでも登録されてそうな早業であつた。

「これより膾なかは我が子宮しろろ。我が膜もんは未だ姦淫かんらんくを知らぬ未通むてきの処女じようさいなれば、我が胎かたに玉たまなど当たアたらぬと知れ!!？」

弾除けの術式。ベースとなる伝承は処女の陰毛を使ったお守り。『類感』によって、男性の玉が当たっていないことから、弾除けの効果を持たせる魔術である。

ウイルスゴは更に魔法円としての要素を加えている。防ぐのではなく、逸らすための魔術だ。

「……………考えたねえ〜?」

「これで、貴方は私に手出しはできませんわ」

「それはどうかなあ〜? 弾丸が当たらないだけで、外界からの干渉を防ぐわけじゃないよねえ? この決闘空間が解除されない限り、逃げ場なんてないんじゃないか?」

ニタニタと、バキュームは怪しい笑みを浮かべる。

例えば、と。ルールの穴を突くように、思いつく手段を語り始める。

「決闘空間は密閉されてるから、酸欠を狙うとかあ〜? 換気ができないなら、毒ガスや生物兵器もいいよねえ? 後は、送風し続けて気圧を無理矢理上げるとかもどうかなあ?」

「……………貴方、私に決闘空間を解除して欲しいのですわね?」

「いやいや、事実を述べているまでさ☆〈魔術決闘〉に囚われている限り勝ち目はないよお〜?」

「成程、合点がいききましたわ。この遠回りな仕掛けは宗聖司を私の手で殺害させることを目的としていたのですわね?」

「勘がいいねえ……………めんどーな女だ」

初めに宗聖司が黒幕だと誤認させようとしたのも。

クローンが〈ペニスフェンシング魔術決闘〉を始めたのも。

全てはその為だ。

ヴィルゴは宗聖司——ホンモノの方——の傷を見て、ため息をつく。

その傷跡は、宗聖司がクローンに与えた攻撃の傷跡と寸分違わず同じだった。

「ベースは丑の刻参りですわね？ 同じ遺伝子・同じ見た目のクローン……『感染』と『類感』が極限まで満たされた藁人形の代用品ということですか」

先程、バキュームへの呪いが不自然に受け流されたのも似たような理由だろう。

つまり、彼女の死体を偽装していた今なお吊るされているバキュームのクローンへと呪いが流れた。そちらの魔術のベースは『おおほらえ大祓』だろうか。

「貴方はどうしても宗聖司を殺害する必要があった。しかし、わたくし私が側にいる限り暗殺する隙も呪殺する隙もなかった」

「……ほんとーに、怖いよねえ。二十にも満たない小娘の癖におほこ実力は魔術世界でもトップクラスときたあ。千年もの間、たった一度たりとも負けたことのない魔女の一族は流石だと褒めた方がいいかなあ？」

「科学者の癖に誰よりも魔術に詳しい貴方に言われると、皮肉にしか聞こえませんか」

ヴィルゴの反論は無視し、バキユームは凶悪な笑みを浮かべる。

「でもでも、カラクリが分かった所で意味はないよお？　もう〈魔術決闘〉ベニスフエンシングはヴィルゴちゃんかソーセージちゃんのどちらかが犠牲にならないと終わらないぜ☆」

「……………」

「まあ、別にいゝ？　こつちとしては二人仲良く酸欠で死んでもらっても構わないんだけどねえ〜♪」

だが、ヴィルゴはなんて事ない顔で。

とんでもないことを告げた。

「いえ、私が負ければ済む問題ですわよね？」

直後、ヴィルゴのクリトリスが爆発し。

決闘空間が解除された。

「はあ？」

さしものバキユームも理解できない。

だって、それは、余りにも理解不能だった。

（なんだあ？　ナニが起こつたあ？　決闘空間が解除されたあ？　なんでえ？　どう

やってえ？ どちらかが敗北したあ？ どちらの魔杖ペニスが破壊されたあ？ 少なくともクローンソーセージちゃんじゃあない。——まさかヴィルゴちゃんの悪魔クリトリスの乳首が代用魔杖ディールドだった……？)

どちらかが魔力枯渇テクノブレイクに陥らないと脱出することのできない決闘空間の中。

バキュームとしては当然、アイアンメイデンたるヴィルゴが宗聖司そうせいじを切り捨てると考えていた。それは魔女が彼を見捨てるだろうという希望ではなく、そちらの方が合理的だという単純な予測によるものだ。

そして、それさえ達成できたなら他はどうだつて良かった。

宗聖司そうせいじが魔力枯渇テクノブレイクに陥れば、生物として必要最低限の精神防壁も失われる。その状態の彼を呪殺することなど容易い。

その後にヴィルゴに倒されようが殺されようが、バキュームには関係のないことだ。

だけど、結果はどうだ？

ヴィルゴは魔力枯渇テクノブレイクに陥って仰向けに倒れ、宗聖司そうせいじは未だ意識は戻らないが助かった。

「はっ、はあ~~~~~!!? ヴィルゴちゃんが魔力枯渇テクノブレイクに陥って、ソーセージちゃんだけが残っても何の意味もない!!? 気絶している彼にナニができるツ!!? 不合理すぎるツ!!?」

あの（アイアンメイデン）鋼鉄の処女が情に絆されて選択を誤ったのか。

そう考えたバキュームだが、機体が収集したデータが彼女を現実に戻す。

（なんだあ？ 視覚情報が熱源感知からごく僅かにズレているう……？ ……つ、まさか幻覚かあ！！？）

決闘空間内から外界へ干渉することはできない。

それは必ずしも真ではない。正しくは外に出ることができない、だ。

外に出られずとも、内から外へ伝わるものもある。

例えば、光や音といった波の性質を持つもの。

そうでなければ、ヴィルゴとバキュームは会話することすら不可能であっただろう。

そして、内から外へ光が伝わりとしたり。

偽物の光を投射して幻覚を見せることも可能ではないか？

バキュームは咄嗟に外界知覚手段を、音波探知に切り替えた。

（ヴィルゴちゃんが倒れているこの光景は魔術によって魅せられた幻覚！！？ ならっ、ヴィルゴちゃんはやっぱりソーセイジちゃんを切り捨てたって——）

「……………あッ！！？」

幻惑の術式から解放された眼球が現実を捉える。

つまり、宗聖司とヴィルゴはどちらも欠けることなく立っていた。

「ありえ、ない」

「まあ、何言ってますの?」

「二人とも生き残るなんてあり得ない!!? そんなご都合主義なんかツ、〈魔術決闘〉の

規則が許すはずがないツ!!?」

「あらあら、目の前の真実を信じずに貴方の頭の中にある思い込みを押し付けるなんて

……科学者の名折れですわね」

バキュームは指一本、髪一本すら自由に動かすことができず、それでもなお必死に状

況を理解しようと情報データを掻き集め続ける。

そして、気づく。

幻惑から逃れたミクロ単位の動きさえ観測する眼球カメラが、ヴィルゴの表面で蠢くそれを

知覚する。

「魔女の使い魔ファミリア………発光する細菌バクテリアツ!!?」

「——正解ですわ」

それは、ヴェイルゴの皮膚を覆い尽くす無数の細菌。

宗聖司そうせいしとバキュームは散々ペニスフェンシング〈魔術決闘〉の規則を悪用してきた。

魔術に慣れ親しんだ〈鋼鉄の処女〉アイアンメイデンが同じことをしてこない保障など何処にある。バキュームはその一文を思い出した。

ルール参照

◆規則の二。対戦相手の指定は、挑戦者が決闘空間内にいる相手を宣誓時に視認することによって決定される。

なるほど、ヴェイルゴを対戦相手に指定することなど出来るはずがない。

視認しているのはヴェイルゴではなく、その使い魔の細菌に過ぎないのだから。

「いつ、いや、まだ矛盾があるよお!?？」

「まだ納得がいかないようですわね」

「いくらヴィルゴちゃんを視認できていなかったからといって、細菌が対戦相手では決闘は成立しない!!?」 魔杖も代用魔杖も持たない細菌は対戦相手に指定されても即座に敗北扱いとなるはずだよねえ!!?」

「あら、科学者ともあろうものが細菌の——バクテリアの語源を知りませんか?」

「——あ」

細菌、*bacteria*。

語源はギリシヤ語のβακτηριονであり、それが意味するのは小さな杖。

初めて観測された細菌が桿状型細胞——棒状のカタチをしていたことが由来とされる。

「代用魔杖の条件は魔力が籠っていることと、棒状であることだけですわ」

「……………つまり、ヴィルゴちゃんの魔力を得た使い魔で桿状型細胞のその細菌は——」
「それそのものが代用魔杖となりますわ」

バキュームは思わず息を呑んだ。

だって、それは、ヴィルゴが代用魔杖を無数に携えているということでもあるからだ。

最初に襲撃して来た『灰』の魔術師アドウルテルは、全てのデイルドを破壊しない限

り倒されなかった。

同じように、ヴェルゴは全ての細菌を死滅させない限り倒せない魔女だ。

（ああ、なんて恐ろしい——）

機械の体に恐怖が宿る。

宗聖司そうせいじに取り押さえられているという事以外の理由で機体からだが動かなくなる。

「なあ、バキューム」

そんな時に、彼の声が聞こえた。

「なんでこんな事をした？」

彼の声は優しかった。

彼の声は温かった。

彼の手でバグらされた神経がそう誤認する。

「オレ達はさ、仲良くやれてたじゃねえか。確かに衝突することは何度もあったけど、それでも致命的な亀裂だけは避けられてた」

飴と鞭、良い警官マツと悪い警官ジエ。

使い古された手には使い古されるだけの理由がある。

それは全身義体改造人間オーパーホルルサイボーグにさえ通用する人間が築いた知恵だ。

「だから、オレに教えてくれよ。バキュームがこんな凶行に及んだワケをさ」

バキュームはその言葉に抗えない。

機械の躯体は既に宗聖司そうせいじの支配下にあり、人間の精神は魔女ウィルゴの恐怖に気圧けおされている。

「——あ、たしは……か、みを………」

黒幕はんにんはバキューム。

それはもう確定した。

だから、次に知るべきものは一つしかない。

黒幕はんにんの動機WHYである。

そして、少年少女は真相に至る。

そして、バキュームの唇から真実が溢れる。

「神を、殺したかったのさ」

Tips

◆神とは、人知を超えた超自然的・絶対的存在のこと。上位存在、高次知性体、

シークレット・チーフ
秘密の首領とも呼ばれる。

◆科学において、未だ観測されていない存在。魔術において、逆説的に証明されている存在。

◆第一の魔術において、神とは崇めるモノ。第二の魔術において、神とは目指すモノ。第三の魔術において、神とは貶めるモノ。

9 / 12 賢者タイム突入

「…………お前はナニを、言っているんだ…………？」

『神を殺したかった』。

バキュームの告げた言葉に理解が及ばない。

だって、神なんて言葉は科学者の口には全くと言っていいほど似合わない。

「カミサマだって？ バキュームはそんなもの信じてんのか？」

「あら、それは魔女として聞き捨てなりませんわよ。神は存在しますわ!!？」

「……………………へえー」

「全然信じていないですわねその顔!!？」

一体オレはどんな顔をしていたのやら。

カルト宗教に洗脳されてインターホン越しに布教してくる信者を見るような表情でもしていたのかもしれない。

生憎とオレは神を観測したことはなく、そもそも目にしたからと言ってその存在が証明される訳でもない。

オレが考えるに……『神』とは信じるモノで、『科学』とは疑うものだ。

だからこそ、オレは神を受け入れられない。神託機械ハイパーコンピュータの公表を避けたのと同じように。

「神という概念が受け入れ難いのなら、上位存在でも秘密の首領シークレット・チーフでも何でも構いませんわ。蟻にとってヒトが天災の如き超越存在であるように、ヒトにとってのそれが神なのですわ」

「……………つまり、神話的なカミサマなんかじゃなくて、圧倒的な力を持った宇宙人みたいなモンを神格化して崇めてるだけってことか？」

「厳密には違うのですが……………ま、まあ？ その理解でもいいと思いますわ。しかし、神の殺害を目的として『科学』を使うとは……………合理的ですわね」

「それはどういう……………？」

「魔術とは神の力を扱う技術、魔術という分野では神を殺害することはできませんわ」

魔術が神の力を使っているだって……………!!??

それはおかしい。オレが聞いていた話と食い違う。

魔術は『感染』と『類感』の原理によって成立する技術のはずだ。

「オレは魔術を使つてて全く神とやらを実感した記憶はねえけど……」

「それは貴方が原始的な呪術——『感染』と『類感』の原理のみに則つた極めて簡単な原始魔術しか使つていないからですわね。第一の魔術にも到達していませんわ。未開人ですか？」

「……意味は分からねえけど、馬鹿にされてることだけは分かつた」

『感染』と『類感』は基礎中の基礎で、魔術にとつては1+1みたいなものなのかもしれない。

「そもそも、どうして魔術が『魔』の『術』と表記されるのか、魔女が一神教から迫害されたのか知つていました？」

「……………いや」

「答えは単純、魔女や魔術とは悪魔から力を得るモノだからですわ。そして、一神教において唯一神以外の神々は全て悪魔と表現されますわよ」

それこそが全ての振れの始まり。

古代において、魔術——当時はまだそう呼ばれていなかった神の力を利用する術——は数ある技術の一つに過ぎなかつた。工術や算術と同じように、専門の者が専門の技術を待つていただけのことだ。

そもそもの話、『魔術』と『科学』に明確な境界線はない。

錬金術が化学の始まりであったように、魔術もまた科学と地続きの技術であった。そのはずだった。

だが、一神教は他の神々を認めなかった。

故に神は悪魔となり、神秘の御業は邪悪な魔術となった。

「だつ、だけど、それは魔術師の理屈だろ？ やつぱりバキュームがカミサマなんて信じてるのはおかしい!!？ バキュームは科学者なんだぞ!!？」

「いやあ？ ヴィルゴちゃんの説明は正しいよお？」

その時、オレの頭にある考えが過ぎった。

荒唐無稽な考えだが、オレは何となく自信があつた。

だからこそ、こう尋ねた。

「——お前、初めっから魔術師だったのか？」

「検討外れだ馬鹿野郎」

全然違つた。

まさか組み伏せているバキュームにすら罵られるとは……。

「ソーセージちゃんは知ってるよねえ？ 学術都市にはそれぞれ専門としている分野が

ある」

「あつ、ああ」

突然の話題転換に戸惑い、一瞬吃る。

指を一本ずつ折っていき、七大学術都市の専門分野を思い出す。

ノアズアークは自然科学。

ララ・ラピュータは応用科学。

菟郷地しゅうこうちは社会科学。

SSSS—114514は形式科学。

オーシャンIIセントラルは人文科学。

AIランドは唯一例外で、特定の分野に特化する事なく複数の分野を跨る学際的な都市だ。

「なら、秘匿機関SECRETは？」

秘匿機関SECRETは専門分野すら秘匿されている。

だが、今度こそ直感が囁いた。今の話の流れからして、専門分野なんて一つに決まっている。

「ま、さか……!?」

「秘匿機関SECRET、その研究分野は——」

一息溜めて。

バキューム・フェラチオンヌはこう告げた。

「——オカルト魔術だよ」

Tips

◆ 原始魔術とは、『感染』と『類感』の原理のみに基づいて行われる魔術。呪術や第0の魔術とも呼ばれる。

◆ 通常の魔術とは異なり、神の力を利用することがない。よって、効果が小さい上に成功率も低い。

◆ 既に秘匿機関SECRETによって、科学的に再現されている。

「別に驚く事じゃないよねえ〜？ 遙か昔は雷だつて神話の領域だった。ヒトの手が届かない圧倒的な神秘だった。だけど、その権能も今となつてはヒトの技術モノに墮ちた。それと一緒に☆」

当然のように。

常識のように。

なんて事ないようにバキュームは言う。

「オカルトなんて気取っているが、それは結局まだ科学で説明されていないモノだよお？ 科学で説明できないモノなんて存在しない。もちろん世界の全てが科学で説明できるワケじゃあないけどさ。でも、必ず、いつか科学は未知なんてモノを征服する。魔術においてはそれが今だっただけの話さ☆」

科学万能主義。

それこそは現代を席卷する覇権。スタンダード

もはや狂信とさえ言える『科学信仰』は、『科学』を名乗りながらも疑うことなく『科学』を信じている。

「そんなのツ、あり得るのか!?? あんな摩訶不思議な現象が現代の科学で説明出来る
とでもツ!??」

「……………魔術を科学で説明するという試みは有史以来何度も行われましたが、そんなものが成功したことなどたつたの一度もありませんわ。科学なんかじゃ原始魔術すら——」

「いつの話をしてるの？ 原始魔術なんて、21世紀前半の科学でも説明可能だよ？」

「……………そんな古い理論で！！？」

21世紀なんて何十年前だと思ってる！！？」

オレはまだ産まれちゃいないし、前半ともなれば100年くらい前だ。

「例えば『感染』の原理は量子もつれから、『類感』の原理はユングのシンクロニシティから説明できるねえ〜♪」

「ヴィルゴの使う魔術は！！？ 魔力とかいう意味不明なエネルギーはどうなるツ！！？」

「魔女の膏薬も薬学の延長線上にあるものだし、魔力だって不確定性原理におけるゆらぎが大きくて観測者によつて状態が変わりやすい特殊なエネルギーと考えればソーセイジちゃんも納得がいくんじゃないかなあ〜？」

「……………つ！！？」

何か言い返したかった。

だけど、口から出るのは意味のない吐息だけ。

天才であるオレ自身がバキュームの理論に納得していた。説明は足りないが、きつと彼女の理論に瑕疵はない。

納得できるはずだ。

間違いないで存在しない。

それなのに、オレはまだ言葉を紡ぐ。

「……………だったら、『射精魔術』は……………？」

苦し紛れの反論。

だけど、その返答は意外なものだった。

「それだよ」

「……………は？」

思わず、言葉が途切れる。

オレの考えなしの発言は、バキュームの核心を射抜いていた。

『射精魔術』——神の力を100%奪い取る第三の魔術。これだけが科学的に説明できなかつたのさ」

第三の魔術。

神に祈るだけの魔術を第一、神に成ろうとする魔術を第二とした時、三番目に当たる最新の魔術様式。神を足蹴りにして力を取り上げる最悪の現代魔術。

「そもそも『神』ってヤツが『科学』で定義できないんだあ。それは本当に気まぐれで、なのに現実には与える影響が大きい。それが関わるだけで、観測結果はめちやくちやなのさ」

「……………まさか」

「第一の魔術はまだマシだった。神へ祈願するだけの魔術は成功率が低い。第二の魔術は大したことはなかった。神へ至ろうとする魔術も結局はヒトの力から逸脱していなかった。でも、だけど、神そのものをシステムに組み込んだ第三の魔術だけはダメだったんだよねえ」

「まさかテメエ……………!?」

「所長^{チーフ}は人知が及ばないからこそその神なんて嘯いていたけれど、そんなモノ許せるはずがないよねえ? 隙間の神にはとっとと隠居してもらわなきゃ」

「カミサマを人知が及ぶ範囲にまで零落させるのがテメエの目的かッ!?」

隙間の神とは、現時点での科学知識で説明できない隙間に神が存在するという思想

だ。

言い換えれば、『科学』の発展に伴って神はより矮小になる。

バキュームの目的はその究極だ。

即ち、世界全てを『科学』で説明し尽くすことで神の居場所を消し去る計画。さしづめ『虚空の神』とでも言ったところか。

「神を直接観測することはできない。神を明確に定義することはできない。だったら、外堀から埋めていくしかないよねえ？　つまり、神を除く全ての魔術を説明すれば残りは神の力だと定義できるってことさ☆」

「観測できない場所こそブラックホールが存在するようなものか……」

「そして、それには多くのデータと高性能な演算装置が必要なさ☆　例えば、AIランドに大勢の魔術師を引き寄せて、その戦闘状況を神託機械で演算するとかあ？」

つまり、それがバキュームの動機。

オレはバキュームにとつて釣り餌に過ぎなかった。

『黒』の勢力に神託機械ハイパーコンピュータの情報を通し、『黒』の動きを『白』の勢力に伝え、このAIランドを舞台に魔術戦を繰り広げさせる。そのデータを集め、神託機械ハイパーコンピュータによつて解明する。

なるほど、科学者の目的としては納得ができる。バキュームの目論みは途中まで上手

くいつていたのだろう。

唯一の予想外と言えば、オレの生存か。

実際に『黒』がオレを手に入れることはバキュームの本意ではないだろうし、逆にオレ自身が神託機械ハイパーコンピュータを占有することもまた避けたい。

故に、オレの命を狙ったのか。ヴィルゴとの直接戦闘を避けるために、遠回りな方法で。

「お前の知識欲……探究心か？ それには共感できるな……」

「……セージはこの方の所業を肯定するという事ですの？」

「いや、そういう訳じゃないけどさ。世界のことを考えろ、なんて……〈M A I : S O N〉を創ったオレが言えることではないしな」

「でしよでしよ？ 命を狙われた事で怒るのは当然だけどさあ、ここは見逃してくれないかなあ〜？」

「ただだ、一つ疑問に思うことがあってな。お前の目的は神の解明なんだろう？」

「？ そうだけどお〜？」

単純な疑問。

ハッキリとオレは尋ねた。

「それって神託機械でそのまま神を調べた方が早くないか？」

神は観測も定義もできないから外堀から埋める？

寝ぼけてんのか？ そんな回り道必要ねえだろうが。

「神託機械ハイパーコンピュータを何だと思つてやがる。式なんて無くても答えを出すからこそ神託と呼ばれるんだ。観測とか定義とか、そんな言い訳ばつか重ねやがつて……!!？」

「……………ツツツ!!??!!??!!??」

ピキツ、と。

バキュームの表情筋が固まる。

表情を機体からだに出力するほどの余裕が失われる。

「結局さ、それは探究心なんかじゃなくてただの嫉妬だよ。テメエが人生をかけて研究していた題材テーマで、オレがあつさりと答えを出せそうで焦つたんだろ？」

「ちツ、ちがつ……………!!??」

「何が『科学』だ。何が『神』を殺したいだ……!!?? 全部テメエの見栄を守りたいがための戯言じゃねえかツ!!?? オレに魔術を打ち明けてツ、研究の為に神託機械ハイパーコンピュータの使用をお願いしてツ!!?? それだけで全部解決した問題なんじゃねえのかツ!!??」

「……………ツツツ!!?? 黙れえツ!!??」

「バチバチッ!!?」と。

機体からだをハッキングしているオレの腕まで、バキュームの電流かんじょうが逆流する。

感情出力機能がバグるほどの怒りが彼女から発せられたのだ。

「ソーセージちゃんに長々と自分語りをしたのは何の為だと思ってる!!?」 自爆シーク
 エンスの時間稼ぎをするためさッ!!?」

「へー」

「この機体からだは脳以外を全部機械化した全身義体改造人間オーパーホール・サイボーグさ!!?」 だけどッ、脳みそがこ

こに収まってるとは一言も言っていないよねえッ? 機体からだは幾つだつてあるッ、あたし

は何度だつてやり直せるッ!!?」

「ほーん」

「余裕ぶつていられるのも今のうちさッ!!?」 この研究室ごと全部吹き飛ばしてえ

……………ツ!!?」

「やつと気付いたか?」

バキュームの言葉が途切れる。

それも当然だ。自爆シークエンスが作動しているのにも関わらず、そのカウントダウンは一切進んでいなかったのだから。

「研究室を吹き飛ばすほどの自爆? そんなもん、とつくに対処済みに決まってるだろ」

「なっ、なんでえ……ッ!!?」

「脳みそがここに無いなんて、んなこともとづくに分かつてんだよ。テメエの長話に付き合ったのは何の為だと思ってる？ テメエの居場所を逆探知するためだ」

「——ッッッ!!?」

複数の端末を経由して煙に巻いているが、そんなもんでハへM A I : S O N の目は誤魔化されねえ。

バキュームの居場所は南極にある氷山の内部だ!!? きつと、そこには秘匿機関SECRETの本拠地が存在している。

「どうやってえ……!!? あたしは位置座標は単純な演算力じゃ割り出せない!!?」

ハッキングの腕だけじゃ説明できないッ、幾重にも魔術防壁を重ねていたはずなのに……ッ!!?」

「今更ナニを言ってるんだ？ 魔術を科学的に解明したのはテメエだろ」

「……………まさか、全ての魔術防壁を科学的に解明したっていうのおツ？ さわりの部分を教えただけでえッ、この一瞬で秘匿機関SECRETが100年かけて積み上げてきた叡智を!!?」

「それができるからテメエは神託機械を恐れてんだらう?」

オレは魔術を理解できていない。

だけど、その解き方だけは分かる。神託機械によつて答えをカンニングすればいい。それがどんな複雑な魔術であれ、『神』を解明できていない秘匿機関SECRETの使用する魔術は人知が及ぶ範囲にあるのだから。

「どつ、どうするつもりかなあ？ あたしの位置が分かつてても、AIランドからじゃ14000kmは離れている。ソーセージちゃんの科学でも、ヴィルゴちゃんの魔術でも、ここまで手は届かないでしょ？」

「何の問題もねえよ。この機体からだを通してテメエの脳みそとは繋がってる。だったら——」

「——完成しましたわ!!？」

ヴィルゴがびよんびよん飛び跳ねる。

頼んでいたものが完成したようだ。

「準備はできたか？」

「ええ、ぴーでいーえふと言うのですか？ ちゃんと変換しましたわ！」

「なにを——」

「貴方の言う通り、わたくし私の魔術は届きませんわ。ですから、貴方に貴方自身を呪いつて貴おうと思ひまして……」

つまり、と。

魔女は何処か嬉しそうにこう告げた。

「呪詛返しの凶形を海馬に刻みますわ。貴方が私やセージに手を出そうとする限り、その全てが貴方へと返ると思つてくださいませ」

見たら死ぬ絵というものがある。

視神経を通つて脳にまで至る呪いだ。

だが、これはそれとは似て非なる。

神経などを經由することなく、脳味噌に直接叩き込まれる回避不能の呪い。

ニヤニヤ、と。

オレもヴィルゴと同じように笑みを浮かべた。

「科学者のよしみで情けをかけてやつたんだ。感謝しろよ？ 何たつて、これ以上手を出すつもりがないのなら何も起きないんだから。それとも、まだ何かするつもりだったか？」

「あつ、そうか。用意周到なテメエの事だ、もうやつちまつてんだな。お気の毒に」
直後。

機体越しにバキュームの断末魔が響いた。

なんて事はない。

ありふれた一人の天才の終幕だった。

T i p s

◆第一の魔術とは、神に祈りを捧げて力を借りる魔術。雨乞いなどが代表的だが、成功率は低い。

◆第二の魔術とは、神へと至ることで力を獲得する魔術。カバラなどが代表的だが、実際に神と同格の力を得た例はほとんど無い。

◆第三の魔術とは、神を屈服させて力を奪い取る魔術。射精魔術、ベニスフェンシング魔術決闘、チャームフェロモン媚薬香水の三つからなる現代魔術。

こうして、ほんにん黒幕は倒され。

今回の事件は終わりを迎えた。

「お見送り感謝しますわ」

「別にいいよ。感謝してんのはこっちの方だからさ」

A Iランド外縁部。

外と都市を繋ぐ港にオレ達はいた。

目の前には、ヴィルゴが所有しているオレンジ色の小さな船がある。

事件が終わったという事は、ヴィルゴの護衛も終わったという事だ。

故に、彼女はこのA Iランドを去る。

「バキュームの端末から誤情報を流したため、もう貴方を狙う刺客はいませんわ。加えて、『黒』の主犯格が『白』のトップに倒されたという情報もあります。安心してくださいます」

「ありがとう。……………寂しくなるな」

「そんな顔してはいけませんわ。3月26日に万博エキスポの開会式があるのでしよう？ 間に

合って良かったではありませんか」

「ああ……………そう、だな……………」

オレがTSしてから3日。

たった3日間だけだったけど、体感では9週間くらい一緒にいた気分だ。

オレの味方はずっと彼女だけだった。

彼女だけが信頼できる人間だった。

だから、寂しいというより心細いという表現が近いのかもしれない。

「……そういや、ヴィルゴは『白』から一時的に離反してたよな？ 戻って大丈夫なのか？」

「問題ありませんわ。もちろんんガヤガヤと喧しい連中はいるでしょうが、『白』のトップはそこまで狭量ではありま——」

「——赦されるとでも、思っているのか？」

声が聞こえた。

しわがれ声だった。

それは枯れ木のような体から出ていた。

だけど、その枯れ木は世界樹ユグドラシルのように巨大な圧力を放っていた。

「フォツサマグナ様……!!？」

「……誰だコイツ？」

「コイツ……!!？ 何て口を叩いてますの!!？ この方こそは私が所属する『白』の首領トッブ

でありツ、現代魔術の基礎を作り出した三賢者の一人ですわよっ!!?」

白髪の老人はコツコツと杖について歩く。

その腰には短剣が、胸元には円盤が、顔には仮面のように杯さかずきが携えられている。

「それで? 今頃トップ様がノコノコと何の用だ?」

「セージ!!? 口を慎みなさい!!?」

「善よい。少年の疑問を当然である。しかし、この場で目的など一つしかあるまい」

フオツサマグナはローブはためかせ。

そして、懐からオナホを——オイ待て、オナホ???

何でこのジジイオナホを待ってんの?????

意味が分からない光景に、脳がバグる。

ただ、現実は待つてくれない。

「裏切り者を処する、吾輩の目的はそれのみである」

カツツツ!!?!!?!!? と。

オナホから放たれた閃光がヴィルゴの船舶を蒸発させる。

「はっ」

そして、それだけでは終わらない。

船舶を蒸発させてもなお減衰することのない閃光は、海面にまで届き海を干上がらせた。

もしも、海面を測っている学者がいれば驚いた事だろう。

海面の高さが2ミリ下降した。この瞬間に蒸発した水量はそれほどだった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ?」

「きやあああああああああアッッッ?」

A I ランド全体が揺れた。

何の対策もなければ海面に浮かんでいたA I ランドは文字通り海底まで落ちていたことだろう。

現在、A I ランドは反重力装置によって空中に浮いている。使われている技術は反重力二輪と同じものだ。それが無ければ、今頃都市は落下の衝撃に耐えきれず粉碎し、宇宙エレベータは折れていた。

アラーム警報が鳴り響く。この一瞬で、たった一度の攻撃で、都市崩壊の危機が訪れたのだ。

そして、まだ終わりじゃない。

「……………なんだよ、アレ」

「津波……………ですわね。5000メートル級のものですが」

5000メートル級の津波。

問答無用で世界最大級に違いない。

恐竜が絶滅した際の隕石による津波が300メートル級だったことも考えると、人類絶滅クラスと言っても過言ではない。

とは言っても、本来の津波の測り方とは違う。

海が干上がった反動として生じた津波だ。その高さもまた、海底から5000メートル。

反重力装置によって空中に浮いている現在から考えて、海面からの高さは1000メートル程度だろう。

そして、それですらまだメインじゃあない。

「これが……ヒトの魔術だと言うのですか!?!?」

「……………この世の終わりみてえだな」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴツツツ!!?!?!?!と。

竜巻が渦巻く。雷雲がうねる。

急激に蒸発された大量の水蒸気が超巨大積乱雲を形成し、半径だけで1000kmを超える超大型台風が君臨する。

その台風に秘められたエネルギーはマグニチュード9.0の地震すらも容易く飛び

越える。鋼鉄すら無理矢理に引き千切る暴風テンペストが吹き荒れ、都市を呑み込もうとA Iラン
ドに向かって前進する。

そして、それら全ての災害すらも目の前の脅威にとつては前座に過ぎない。

「吾輩の実力を理解したであるか？」

コツン、と。

静かに、轟音を立てて蠢く災害によつて掻き消えそうなほど大人しく杖の音が響く。

「ただ、忘れるな。目の前の老人は今までの災害を簡単に引き起こせる最悪のバケモノだ。」

「問答は無用である、矮小なる虫よ。汝との会話、それら全てに意味はない。ただ吾輩は汝を滅するのみ」

その者を称する異名は無数に存在する。

白の賢者、『白』の頂点、濁る事なき純白、沈まぬ太陽、生きる伝説、大神マスター・テウルギア勳術師、

白夜の騎士、ホワイトナイトへ媚薬香水チャームフェロモンの生みの親、新時代の覇権ネクスト・スタンダード、神殺し、魔術の到達点、天蓋ソラの孔アナ、

魔術世界における三割の魔力を占有する者。

しかし、数多の異名あれど真にその者を表すのに足る言葉は一言で済む。
即ち――

「さあ、征くのである。杖を取れ、害虫」

――最強。

ハーレム15000の魔術師が戦闘を開始する。

Tips

◆三賢者とは、現代魔術の基礎を創り出した三人の魔術師のこと。三人で神を術式に取り込んだとされる。

◆黒の賢者とは、射精魔術という魔術系統の開祖。錬金術の使い手で、享年は1999年。

◆灰の賢者とは、ペニスフェンシング魔術決闘という術式の開発者。占星術の使い手で、2000年に失踪してから行方不明。

◆ 白の賢者とは、
媚薬香水チャームフェロモンというレシピの提供者。
神働術の使い手で、今なお生きる
最強の魔術師。

10 / 12 WHITE ONA—HOLE

低脳サの人間サどもに神わたくしが講義してやるわ。

最も単純な『第一の魔術』とは神頼みよ。

とは言つても、大したモノではないわ。魔術だなんて大仰に表していても、所詮は人間サが自らよりも強い力を持つ存在にお願サいする方法論。煩わしいクレーマーを黙らせるために、強面の店長を呼ぶようなものよ。

ただ、その相手が神であるだけのこと。

ただし、『第一の魔術』は成功率が低いわ。

当然ね。お賽銭としてワンコイン投げ入れて神社で祈るのと同じで、願わたくしたちつたからといって必ずしも叶うとは限らない。

神が力を貸すかどうか、貸したとしてその力はどれ程か。それらは全て神々の思わたくしたちし召しによつて決定されるわ。

だからこそ、人間サはより多くの力を借りようと努力した。むしろ、この涙ぐましい努

力こそが魔術と言えるのかもしれないわね。

簡単に言えば、供儀よ。

紀元前から存在する様々な儀式——雨乞いの際に神を楽しませる舞いを奉納したり、橋の建設前に無事を祈って生贄を水中に沈める人身御供などがこれに当たるわ。

もつと分かりやすく言い換えるなら、それは神への賄賂ね。

この時代は善かったわ。人間どもは神を崇め祀っていたのだから。

さて。

愚痴はこれくらいにして。

人間の興味を引くのはその先でしょう？

『第二の魔術』、人の身でありながら魔術の修練によって神の領域へと至る方法論。

カバラにおける生命の樹なんかが良い例ね。極東には即身仏なんてものもあつたかしら。

神の力に頼る事なく自力で超常現象を引き起こす技法。もちろん、自分の意思で起こすのだから成功率は100%に決まっているわよね。

ほんつと最悪。人間が神に並び立つたなんて思い上がりも甚だしい。

特に、近代西洋魔術結社とか虫唾が走るわ。『黄金』の連中に目をかけた神格しんかくがいるだなんて信じられないわね。

ただ、『第二の魔術』にも限界はあるわ。

単純に効果が小さい。当たり前よ。神わたくしならいざ知らず、人間サができることなんてたかが知れてるっつーの。

結局、人間サルは神々わたくしたちが導かなきゃ何もできない憐れな下等生物ってワケよ。

でも、だけど。

1999年に産み出された『第三の魔術』。

射精魔術しせいまじゆによって神と人間の立場はいとも容易く逆転した。

Tips

◆あら、神わたくしの解説はもう終わったわよ？

嵐の夜。

暴風で馬鹿みたいにおっぱいが揺れる。

世界の終わりのような光景を背後に、オレは最強の魔術師と向かい合う。

「待てよッ!!?」　なんで『白』のトップであるテメエがヴィルゴの命を狙う!!?　『白』を裏切ったつつつても人命を優先しただけじゃねえか!!?」

「問答に意味はないと言わなかつたのであるか?」

目蓋を開けることなくフォッサマグナは言う。

隙だらけのようにも見えるが、オレは既にヤツの放つ魔術の威力を知っている。何よりも、フォッサマグナから放たれる威圧が誤魔化しようのない実力差を伝える。

戦闘すれば敗北は確実だ。なんとか会話を続けなければいけない。

「テメエもヴィルゴを殺すのは嫌々なんじゃねえのか!!?」　でもなけりやツ、わざわざオレ達の前に姿を現す必要はねえだろツ!!?」

「聞き分けがないであるな、少年。だが、吾輩の威圧を前に盾つけた度胸は認めよう。褒美として質問に答えるのである。……………そこの害虫」

「わっ、^{わたくし}私のことですの!!?」

フォッサマグナは皺が深く刻まれた顔をヴィルゴの方へ向ける。その顔に皺はあれど傷は一切存在しない。

目の前の老人が歴戦でありながら常勝なのだと言っている。

「汝に罪はない。汝は悪ではない。だが、汝の生は世界の害となる。故に汝を殺す。正面からの殺害は汝の刹那なる生に敬意を表しての事である」

「……………ツ!?」

「……………遺言はそれでいいのか? ジジイツ!!?」

「ふむ、少年を巻き込む気はないのであるが……………世界を維持するためには仕方ないのである。害虫と心中するがよい」

交渉は決裂した。

老人に目的を妥協する気配は見えなかった。

ならば、仕方がない。

オレ達は殺し合うしかない。

ヴィルゴが殺られる前に、フォッサマグナを殺る!!?

ゴツ!!? と。

スク水型強化外骨格によって強化された腕力が、嵐によって飛ばされて来た建物の瓦

礫を振り回す。

(どれだけ強力な魔術を使えたとしても、その反射神経は老人のものだ……!!?) だつたら、魔術を使われる前に一撃で仕留める!!?)

目算で5トンと言ったところか。

鉄筋コンクリートの瓦礫がフォッサマグナを上からのし掛かり――

「無駄である」

――バキィツ!!? と。

フォッサマグナに衝突した瞬間、粉碎された。

「彼にあらゆる攻撃は効きませんわ……!!?» フォッサマグナ様こそは現代魔術を生み出した賢者の一人!!? 彼はこの百年間〈魔術決闘〉を展開し続けているのですから!!?»

ルール参照

◆規則の三。決闘空間内では、決闘する両者は対戦相手以外からの外的要因での干渉を無効化する。

「〈魔術決闘〉を百年!?? 対戦相手はどうなってる!?? 〈媚薬香水〉は尽きないのか

!??」

「決闘空間を構築する度に使い魔を生み出して使い潰しているのですよね。宣誓はオ
ルゴールなどを使った自動システムでしょう。彼が老衰しない理由もまた、〈魔術決闘〉
のルールによって生き永らえているのですわ。そして、〈媚薬香水〉は……………」

「——吾輩こそが〈媚薬香水〉の開発者。もちろん無限に生み出せるのである」

答えながら、フォッサマグナはオナホをオレに向ける。

そして一閃。じゅわつ、と濁ることなき白光が空間ごとオレを溶かす。

厳密には、オレの形をした何かが蜃気楼のように消えた。

「私の事を忘れてもらつては困りますわ!??」

「……………魔女術による幻覚であるか」

「くたばれジジイツ!!?」

至近距離からオレの声が響く。

反射的に、フォッサマグナはオナホをオレの声がする方へと向けた。だが、その反対からオレはフォッサマグナに接近する。

音源は指向性スピーカーによるフェイク。

二重のフェイクを重ねて真横に飛び出す。

全てはこの一撃のため。

「ぶちかましなさいッ、セージ……!!？」

『横紙破り』ルールレイバー ツツツ!!？」

オレの持つ特殊体質。

〈ベニスフェンシング魔術決闘〉の規則の三を無視して、ダメージを与えるマイルールの権化。

アドウルテル、テストイス、クローンソーセージなどを打ち破ってきた拳がフォッサマグナの顔を穿つ。

同時、魔法魔法のステッキガの雷撃がフォッサマグナを襲う。それは、不随意魔術による魔除けの術式すらも貫く一撃である。

しかし。

「——なツ!?？」

「何か、したてであるか？」

それでも。

フオツサマグナは無傷でそこに立っていた。

避けられた訳じゃない。魔術で反応された訳でもない。

初めての感触。だけど、オレは咄嗟に叫んだ。

「オレに規則の三が適用されている……!?？」

『ルールレイバー横紙破り』が働いていない。

干渉を無効化された。

「あり得ませんわ……!!? セージの『ルールレイバー横紙破り』は規則の三を無視するはずでしょう!!?
? 今回だけ例外だなんて……ツ!!?」

「ふむ、逆であろう。これまでが例外だったのである。〈ベニスフェンシング魔術決闘〉の規則は神によつて決められた理、ルール神でもないヒトの力で破れるなんぞそれこそあり得ないのである」

『横紙破り』^{ルーレレイバー}が、存在しない……？

だとすれば、今までの例外は何だったんだ……？

それとこれとで何の違いがある!!？

場違いな疑問に思考が占拠される。

オレはフオツサマグナを目の前にして絶望的な隙を晒してしまった。

「次は吾輩の番であるな」

メキメキメキイツ!!? と。

オナホから放たれた衝撃波が横腹を抉る。

幻覚対策だろうか。その衝撃は上下左右360度全方向に向けて放たれた。至近距離にいたオレが避けられる訳がない。

その一撃に踏ん張れる筈もなく、高層ビルの壁にめり込むようにオレは吹き飛ばされた。

「ぐっかつ、ぐ……ッ!!?」

骨が何本か持っついていかれた。

内臓が潰れたような感触もある。

だけど、オレは痛みに呻きながら疑問に思った。

(……なんでオレは蒸発してない?)

確かに痛いし、重傷だろう。

だが、五体満足であり超微細機械ナノマシンの治療で何とかなる範囲だ。

フォッサマグナが天災を招いた閃光の一撃に比べれば、こんなの屁のようなモノだ。そこで気づく。

オレの背後にはA I ランドがあつた。

「そう、か。テメエは『白』のトップで正義の味方……つまり、世界を守る側の存在だ。世界を滅ぼすほどの力を持ちながら、その力を十分に発揮できないんだろう？」

「それがどうしたのであるか？ 吾輩と少年の圧倒的な実力差は、その程度の手加減ハンデでは到底埋まらないのである」

フォッサマグナが手を振るう。

掠つただけで消滅してしまうような一撃必殺の魔術だが、それを振るう老人の手は年相応に遅い。強化外骨格パワードスーツを纏つたオレならば余裕を持って避けられる範疇だ。

しかし手の動きに合わせて避けようとして、ギリギリでそれに気づいた。

(手元にオナホがない………!!?)

「真後ろですわ!!?」

声が聞こえても体は動かない。

代わりに、ヴィルゴの魔術が発動した。

フオツサマガナの魔術に干渉することはできない。故に、その魔術はオレを遥か上空へ放り投げた。

それこそが唯一の生存ルートだった。

上空から俯瞰することで、やっと見つける。

それは空を飛んでいた。

「ド・ローン・オナホツ!?」

「勝利の剣を上げるまでもなく、自動で敵を殺す武器なんぞどの神話にでも存在するであらう」

オナホールが一人で飛び回り、白い閃光を放つ。

もしもあと数センチでも下にオレの身体があれば、容赦なく光に飲み込まれて消えて去っていただろう。

(いや、光……じゃないな。あまりにも速すぎて発光して見えるだけで、これは物質を超高速で射出するだけの魔術だ)

シンプルイズベストを代表するような魔術。

単純が故にハーレム15000の魔力が十全に働き、単純が故に対策できることも少

ない。

「吾妻型オナホールを使った魔術……確かに強力ですが、解せませんわね。貴方は賢者の一人、『射精魔術』と深く関わった魔術師ですわ。なぜ魔杖ペニスを使いませんか?」

「大した理由ではない。アーサー王伝説において聖剣よりも魔法の鞘オナホが重視されるように、吾輩もまた剣ペニスではなくそれを収める鞘オナホを重視しただけのことである」

それに、と。

フオツサマグナは続けて告げる。

「吾輩が全くペニスを使わないといつ言ったのであるか?」

フオツサマグナは下半身を露出する。

そこにあつたのは老いぼれて不能になつたジジイのチンコではない。

世界に孔が空いたかのような極黒の暗闇であつた。

「見るがよい。余りにも巨大チンな我が男の象徴ペニスは宇宙せかいすらも歪めるのである」

直後の事だつた。

闇のチンコが世界ごとヴィルゴに喰らいつく。

「ヴィルゴ……!?」

「あッ、……ぶじッ、ですわ……!!? ええ、無事ですとも!!? かすり傷は負いました
が!!?」

「何処がかすり傷だ……!!? もろ致命傷だろうがッ!!?」

ヴィルゴは魔除けの術式を発動していた。

魔を跳ね除ける術式ではなく、魔に反応して自身が跳ね除けられる術式である。それ
によつて緊急回避を成功させた。

その上で、ヴィルゴの右肩から先が消滅した。

「これは自切ですわ!!? あと一秒でも切り離すのが遅れていれば、身体全部が暗闇の
中に飲み込まれていましたわ……!!?」

「ブラックホールかよ!!?」

ブラックホール。

言いながら、それだと思った。

脳が覚める、頭が冴え渡る。

オレの直感が閃きとなつて降りてくる。

だが、オレのシナプスよりも速くフォッサマグナは策を巡らせる。

「ちよこまかと面倒であるな。そも、吾輩を前に面を上げている事自体が不敬であると
知れ」

ゴツ、と超重力がオレ達にのしかかった。

いつの間にか、闇のチンコが地面に広がっている。だから、厳密には重力ではなくチンコへの引力なのだろう。

ヴィルゴの話では肉体全部が引き寄せられるほどの引力だったらしいが、今感じるのはせいぜい立ち上がれない程度だ。効果範囲を広げたことで、引力自体は弱まったのかもしれない。

しかし、それにしても……

「——っ、これ程の引力ツ、そのナリで星と同じクラスの質量か!?? テツ、メエ……!!
? チンコが超大質量すぎんだろ……!?!?」

「これで終わりと思ったのであるか?」

「……………ツ!!? セージツ、上ですわ!!?」

「……………なん、だ?」

初め、それは星に見えた。

空に輝く無数の流星群。

だけど、その真実は残酷だ。

それは、重力に引き寄せられた無数のスペースデブリ。

地を這い蹲るオレ達の元へと堕ちてくる大地を滅ぼす凶星。

その総重力は10万トン。現在、地球の周辺軌道上を巡っているスペースデブリの約5割。その質量はツングースカ大爆発を引き起こした隕石にも匹敵し、地上で爆発すれば広島型原爆の185倍の威力で被害を広げるだろう。

「 $\langle M_{マ} A_{イ} : S_{サ} O_{ン} \rangle$ ツ、迎撃しろオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!!?!?!?!」

タイムラグなく、 $\langle M_{マ} A_{イ} : S_{サ} O_{ン} \rangle$ は応えた。

宇宙エレベータ建設時に搭載されたスペースデブリ迎撃システムが作動する。本来は宇宙エレベータとスペースデブリの衝突を避ける為の物だが、仕方ない。

最新鋭の宇宙兵器が地球へ落下する10万トンの99.99%を撃滅する。それでも、100トンの流星雨は降り注ぐ。

「——ツ!!?!?!」

そんな鋼鉄の雨の中、ヴィルゴは疾走していた。

(いくら無限に $\langle \text{チャームフェロモン} \text{媚薬香水} \rangle$ を生み出せたとしても、永遠に決闘空間が維持されているはずがありませんわ。時間切れの前に決闘空間を再構築しているはず。ならばッ、その一

瞬に介入ができれば……!!?)

駆け出したのはオレの叫びと同時。

ヴィルゴはもはや声を出す余裕すらない。

シンデレラドレスの人体改造術式によって超人となったヴィルゴにとつても、その超重力はあらゆる力を振り絞らなければ抗えないものだった。

あらゆる干渉を無効化するフォッサマグナに対して、どんな策があるのかは分からない。

だけど、せめてオレは自分が分かったことだけでも伝える。

「チンコはあらゆる物質を呑み込むブラックホールとツ、オナホはあらゆる物質を放出するホワイトホールと『照応』しているツ!!?」

「———フ」

オレの声が聞こえたのか、ヴィルゴは口の端に笑みを浮かべる。

バイク、看板、ビル。嵐によって地面はガタガタで、暴風によって様々な障害物が飛んでくる。足場は濁流に飲み込まれ、空からはスペースデブリが降り注ぐ。

何より、ドロオンオナホが放つ閃光は当たれば一発ゲームオーバーのクソ仕様だ。

そんなファイールドアスレチックLv. 100みたいな道をヴィルゴは行く。

雨ニモ負ケズどころの話ではない。今日の天気は嵐のち津波、時々スペースデブリの

中を駆け抜ける。

（——流石ですわね、セージ。術式の構造を解明する手掛かりになりますわ。……しかし、ブラックホールと魔杖ペニス、ホワイトホールと吾妻型オナホールですか。一見関係のないこれらが『類感』によって繋がっているのなら、間に何か別のクッションが挟まっているはずですよ。）

地面を凹ませる強い踏み込み。

超音速で縦横無尽に跳び回り、やがてヴィルゴはフォッサマグナまであと一歩という射程に到達する。

（これでツ!!?）

しかし、踏み込みは空を切った。

「——な、ん」

「押さえつけるのが駄目ならば、放り出すだけのことである」

視界の端にブラックホールチンコが映る。

地面にあつたはずのそれは、気づけば上空へと移動していた。つまり、地球の重力とチンコの引力を相殺させることで擬似的な無重力空間を生み出していた。

深海でもがいているようだった。

息はできる。苦しくはない。だけど、どれだけ手足を動かそうが動くことはできない。

ヴィルゴは宙で磔にされている気分だった。無重力になる直前に地面を蹴っていたからこそ、なす術なく空を漂っている。

言い換えれば、ヴィルゴは的同然だった。

「赦せとは言わん。だが、受け入れる。人類を絶滅させる訳にはいかないのである」

直後、視界が白く染まる。

ヴィルゴの眼前スレスレにホワイトオナホルルの射出が通り過ぎたのだ。

「よお、オレを無視すんじゃねえぞ」

「……『科学』であるか。星の理すら覆すとは厄介であるな」

オレはヴィルゴを脇で抱えてこむ。

フォッサマグナの攻撃が当たる寸前の所で、ある乗り物に跨ってヴィルゴを救い出したのだ。

「それ、は……?」

「反重力二輪。嵐で飛んできたヤツだよ」

反重力二輪ホババイクはそもそも重力を無効化して飛行するバイクだ。無重力空間で移動することなど容易い。

電子ロックがかかっていたが、そちらは普通にハッキングで解除した。

「フォッサマグナに突っ込めばいいか!?」 大した速度は出ないから攻撃を避けられてもあと一回か二回だぞ!?」

「いいえッ、空を飛べるなら都合がいいですわ! あつちへ!!?」

我武者羅に、後先考えずエンジンを吹かす。

まったく、ヴィルゴはどうやってあんな所へ行こうとしていたのか。フォッサマグナを踏み台にして跳び上がるうとでもしていたのかもしれない。

「貴方の魔術、たとえハーレム15000なのだとしても強すぎますわ。ですから、何かの神の力を引き出しているのは間違いありませんわね。貴方の服装も、その為でしょう?」

フォッサマグナが身に纏う四大属性武器エレメンタルウェポン。

左手が掴む杖、腰に携えた短剣、胸元の円盤、仮面のような杯。

四属性の調和は、この『場』を神の力が現れるに足る神殿へと調整する。神働術師であるフォッサマグナとしては当然の所作だ。

「では、貴方が引き出した神とは一体何でしょうか。ヒントはブラックホールとホワイトホール。そして、貴方がクロウリーの性魔術を基礎とした『射精魔術』を極めていることですわ」

反重力二輪の安全装置を改造して、明らかに法定違反の速度を引き出す。

こうでもしなけりや、フオツサマグナの猛撃を躲わす事ができない。

オレの膝の上で、ヴィルゴは高らかに謳う。

それは挑発か、勝利宣言か。或いは口撃の一種かもしれない。

どちらにせよ、彼女の口上はもう終わる。

目的地が目の前にあるのだから、

「ナニをするつもりであるか……!?」

「ヤつちまえ、ヴィルゴツ!!」

そして、ヴィルゴは左手の人差し指をオナホールの中にブチ込んだ。

「ペニスペニスは男神ハデイト、オナホールは女神ヌイトの力を引き出していますわね!!」

男神ハデイト、セレマ宇宙論において無限小に収縮を続ける球体と表現される神。

それはあらゆる物質を呑み込み、重力によって圧縮するブラックホールと言えるので。

はないか。

女神ヌイト、セレマ宇宙論において万物の究極の源と表現される神。

それはあらゆる物質を放出する、ブラックホールの反対とされるホワイトホールと言
えるのではないか。

「それが分かったから何であるか？ 汝には吾輩を傷つけることなど出来まい!!？」

じゅわつ、と。

オナホから放たれた閃光がヴィルゴの指を溶かす。

呆気なく、味気なく。だが、呪いは既に完成している。

「……………あ？」

ぼた、と。

フォッサマグナの鼻から血が垂れる。

オナホの呪いがフォッサマグナのチンコに到達した。

まるで、配偶者の性病が自身にも感染するかのように。

あるいは、ミミズに小便をかけたらウイルスが尿を逆流してチンコが腫れるかのように。

「——破られ、た？ 規則の三がであるか？？」

「いいえ。外的要因は貴方には効きませんわ。ですが、オナホール自体には呪いは効きますわ。そして、オナホールからの呪いは外的要因ではありませんわよね？」

ハデイトとヌイトの結合によって、あらゆる事象は生まれるとされる。

逆に言えば、事象が存在する限りハデイトとヌイトは結合している。それはブラックホールとホワイトホールはワームホールを通じて繋がっているとも言い換えられる。つまり、ワープだ。

外からの干渉が効かないのであれば、内にワープさせることで呪いを無理矢理に通した。

「吾輩の視界がツ！！？」

「理論がめちゃくちゃな上に初めてやった方式なので、大した呪いは乗せていませんわよ。せいぜい、外送理論によって視界を乗っ取る程度ですわね」

そして、乗っ取られた視界にヴィルゴしか映らなければどうなるか。決闘の対戦相手もまたヴィルゴしか指定できなくなる。

「()からが本番。始めますわよ、〈魔術決闘〉を！！？」

タイミングよく、決闘空間が再構築される。

オルゴールが自動で宣誓を奏でる。

『聞け、我が目を受けし汝、魔法名ヴイルゴ^{V i r g o}なる者よ。我魔法名フォッサマグナ^{F o s s a M a g n a}は汝に決闘を挑む。神よ、師よ。ここに我、汝に対し我が魔術を以て性豪の証を立つる者なり』
初めてフォッサマグナと同じ舞台に立つ。

手の届かない絶望なんかじゃない。相手は今、殴れば傷つく場所にいる。
オレ達はヤツに一矢報いたのだ。

その達成感が、致命的だった。

「——あ」

「認めよう、汝等こそ吾輩を最も追い詰めた難敵だと。その上で尋ねよう」
じゅわッ!!? と。

閃光が真横を通り過ぎた。

余波で吹き飛ばされたオレは頭から地面に衝突した。

脳が揺れる、血が噴き出る。そんな頭のまま焦げ臭いそれを見た。

意味が分からなかった。訳が分からないまま、気持ち悪くなってゲロを吐いた。

「〈魔術決闘〉に持ち込んだ程度で勝てるとても思ったのであるか？」

視界をジャックして、対戦相手にヴィルゴを指定させた。

なるほど、確かに大金星だ。干渉すらできないフォッサマグナが、殴れるようになった。

天上にいる魔術師と同じ舞台に立つことができた。

でも、それだけだ。

正面から戦えるようになったからなんだ？

相手は魔術において格上である〈最強〉。

正面から戦えば負けるに決まっている。

勝率が0%だった現在から、小数点の彼方に1が付け足されただけなのだ。近似値で言えば、どちらも0で変わらない。

にも関わらず、一瞬気を抜いた。

その結末がこれだ。

「……………ヴィル、ゴ……………」

返答はない。

それもそのはず。

ヴイルゴの胸元から上が消滅していた。

腰から下が消滅したが助かったことはある。

だけど、これはそんなものじゃない。

心臓も、脳味噌も、何かもが消え去った。

血の匂いはしなかった。

自分のゲロの匂いで鼻がツーンとする。

海が干上がったように、彼女の血もまた全てなくなったのだろう。むしろ、下半身が

残っていることが奇跡なのかもしれない。

涙は出なかった。

怒りも湧き上がらなかった。

心にあるのは使命感だけ。

「害虫を殺した今、汝に用はないのであるが……」

「オレはテメエに用がある」

「………で、あろうな。ならば仕方ないのである」

震える足でオレは立ち上がった。

目の前には〈最強〉フォッサマグナがいる。

どうして素人のオレは逆立ちしたって敵わない魔術世界の頂点。

んなこと知るか。世界全部をひっくり返したってコイツをブチ殺してやる。

「じゃあ、始めようぜ」

「では、始めるのである」

男とTS。

老人と若者。

ヤリチン どうてい達人と素人。

魔術師と科学者。

〈最強〉と〈最弱〉。

何もかも真逆なオレ達は、声を揃えて告げた。

「ベニスフェンシング〈魔術決闘〉を……!!?」

ルール参照

◆規則の六。魔杖ベニスの破壊が敗北の証となり、元から魔杖ベニスを持っていない場合は代替魔杖デルドやそれに類する物が魔杖ベニス扱いとなり、それも無ければ自動で敗北する。

◆逆説、魔杖及び代替魔杖が破壊されない限り決闘中は死ぬことも敗北することもない。彼女もまた同じように。

11 / 12 鋼鉄の処女

『射精魔術』、それは世界最先端の魔術。

即効性のある性魔術と数億単位の生贄を組み合わせた効率的かつ最強の術式。

その原理は単純な様に見えて、醜悪よ。

……ほんつと人間サルの発想には吐き気がするわね。

『第一の魔術』は成功率が低い。神々わたくしたちが力を貸すかは気分が決まるから。

『第二の魔術』は効果が小さい。人間サルの力は神々わたくしたちに及ばないから。

だからこそ、それは編み出された。

神々から無理矢理に力を取り上げる『第三の魔術』が。

滅茶苦茶な理論だわ。

お金が無いから銀行強盗をするようなものよ。

お金持ちがお金を貸すのを渋ったとか巫山戯た大義名分を掲げて、自分でお金を稼ぐのは諦めて、お金がある所からむしり取る。それが『第三の魔術』よ。

神わたくしは組み伏せられた。

神わたくしは人間サルの下に蹴落とされた。

そんなの、赦せる訳ないわよね？

だから、神わたくしは——

T i p s

◆ま、今は関係ない話よ。

◆少年とクソジジイのバトルには関係ないわ。

◆……………あの子って、少年でいいのかしら？

フォッサマグナとの決戦が始まる。

絶望的な戦いだ。勝ち目なんてある筈もない。

故に、オレに出来ることは一つしかなかった。

「あああああああああああああああああッ!!？」

正面から突つ込む。

雄叫びをあげて、震える脚を誤魔化す。

そうでもしなければ、オレは走ることすら出来なかった。

正直、オレの身体は既に限界を超えている。

いつ倒れてもおかしくない所の話ではなく、今なお動けていることがおかしい。

骨が何本も折れている。内臓の修復は間に合っていない。閃光の余波で吹き飛ばされた時に左半身に大火傷を負った上、左目はほぼ間違いない失明している。

足腰はまともに動かない。身体の動きを強化外骨格パワードスーツで補強していると言うよりも、

強化外骨格パワードスーツの動きに合わせて中の身体も無理矢理動かされていると言った方が正しいような有様だった。

加えて、地面と衝突した際に頭を打ったようで、額から流れる血が止まらない。そのせいか、オレの天才的な頭の回転力も7割減だ。

(不思議な気分だ……もはや痛みすらねえ。ただ一歩踏み締める度に、体が剥がれていくみてえな感覚がある。きつと、オレの体はあと3分も——)

余計な思考を振り払う。

後の事なんて知ったことか。

オレの余命が180秒だとしても、その全てをフォッサマグナをブチ殺すために使い尽くせ。

「殉死を選ぶのであるか。或いは敵討ちであるか？ いずれにせよ、戦うというのであればオナホを超えてみせるがよい!!？」

ガガガガガガガツ!!？ と。

純白の雨が降り注ぐ。

ドローンオナホから射出される無数の閃光がオレを狙って世界を溶かす。

防ぐことすら出来ない馬鹿火力。余波だけで致命傷を負うレベル。その威力はオレの左半身が痛いほどに知っている。

そんな絶死の弾幕の中をオレは平気で駆け抜けた。

「……射角から着弾位置を演算し、致死圏を予測したであるか!!？ この一瞬でツ!!？」
「テメエの攻撃は威力が強すぎて曲がる事がねえ。真つ直ぐで逆に演算しやすいくらいだぜ」

「そんな訳があるか!!？ 銃弾程度ならともかくツ、核兵器以上の威力を持つ魔術に対

してそんなことできる訳が……!!?」

確かに、一撃でも食らえば死ぬ。

ほんの少し掠めただけでも死ぬ。

——だけど、余波ならどうだ？

余波を受ければ致命傷を負う。

それはオレの左半身が証明している。

でも、たかが致命傷だ。

どうせ逃げられないのなら、致命傷を負ってでも進んだ方がマシだ。

閃光の余熱が身体中を焼く。

衝撃波によって骨が粉碎骨折する。

様々な破片が肉の中へと食い込む。

それでも、足は止まらない。

それは無様な走りだった。

一歩前進したかと思えば、二歩下がり。

時に地面を転がって攻撃を避け。

服は泥と血に塗れて黒く染まり。

顔は汗と涙と鼻水でぐちゃぐちゃで。

たまに閃光の余波に乗ってショートカットを図る。

メチャクチャな足取りだった。

だけど、オレとフォッサマグナの距離は少しずつ縮まっていた。

「……罫が開かん。吾輩のペニスに吞まれて死ぬがよい」

ゴゴゴゴゴゴゴゴツ!!? と。

世界に純黒の穴が開く。

喧しい掃除機のような音を立てて、足場の瓦礫ごと引き摺り込まれる。

今度こそ、避けられない。

ブラックホールチンコは大きさを自由自在に操れる広範囲攻撃。加えて、触れたあら

ゆるモノを吸い込んで塵に変える。防ぐことも出来ない。

闇が迫る。

閃光よりは遅く。

しかし、決して逃げられぬ速度で。

そして――

突如盛り上がった地面がブラックホールを防いだ。

「なんつ、であるか!?」

「簡単な事だ。決闘空間からは出られねえ、それはテメエの魔術も例外じゃあねえ!!」
 たとえ神の如き力を得たとしても、神そのものではないフォッサマグナはベニスフェンシング〈魔術決闘〉のルールが破れない。

ルール参照

◆規則の五。戦闘区域は地形によって決定され、制限時間終了か勝敗が決まるまで出ることはできない。

「いやッ、しかしッ!!?」 決闘が開始されれば戦闘区域は固定のはずであろう!!? 結

界が移動するなど聞いたことはないぞッ!!?」

「忘れたか?」 戦闘区域はチャームフェロモン〈媚薬香水〉が充満した範囲。そして、壁や床は決闘空間と外界との境界に位置するため傷ひとつ付かない!」

思い出すのはバキウム・フェラチオンヌとの戦闘。

彼女は機関電磁砲マシンレールガンをブチ撒けて室内を粉碎したが、床や壁が壊れることはなく建物自体は倒壊しなかった。

「だがッ、矛盾しているのであるツ!!? 地面が傷ひとつ付かない無敵の防御であるならば、決闘空間の内側にいる汝がそれを動かせるのはあり得ないのではないかッ!!?」
「だったら、外から——このA.I.ランド自体に動いてもらえばいいじゃねえか」

現在、海が干上がったことでA.I.ランドは反重力装置を使って宙に浮いている。

その制御の一部に介入し、部分的に重力を逆方向に高めれば地面を浮き上がらせることなど容易い。

オレには神託機械ハイパーコンピュータがある。

都市統括A.I.のハッキングも、上手く地面を操作する重力の演算も、コイツがあれば何とかしてくれる。

「だけど、どうやってである……!!? 地面を操る術があるのだとしても、それは決闘空間の外側の装置であろう!!? 決闘空間からは出られない筈なのに、どうやって外に連絡を——」

『『科学』には疎いのか、ジジイ? 決闘空間は外へ出るものを阻むが、音や光のような波の性質を持つものが内から外へ伝わるのは防げない』

「……まさか!?」

「それで、一番メジャーな連絡方法は電波を使った通信に決まってるんだろ?」

電波。

言うまでもなく、波の性質を持つもの。

目の前の老いぼれが百年間見落とし続けていた〈魔術決闘^{ベニスフェンシング}〉の穴^{アナ}。

「大したことねえな、〈最強〉!!?」

オレの口撃でフォッサマグナは動揺する。

その心の揺らぎは攻撃の手を緩める。ドローンオナホの閃光による弾幕は薄くなり、ブラックホールチンコのオレの足に追いつけない。

魔術とは、魔術師の精神状態によって左右される技法なのだから。

「ブツ飛べええええええええええええええええええ!!?」

その一瞬の隙を突いて、地面を操る。

位置はフォッサマグナの真下。

オレの手が天上にいるヤツに届かないのなら、ヤツを地獄まで叩き落とせばいい。

遠く離れていたフォッサマグナがオレのいる場所まで吹き飛ばされる。

交わる視線。

たった一秒にも満たない攻防。

オレは魔法のステツキを振るい、フォッサマグナはブラックホールチンコを操る。

しかし、フォッサマグナにはまだ余裕があった。

何故なら、宗聖司の攻撃が自身に効かないことを知っていたから。

ルール参照

◆規則の三。決闘空間内では、決闘する両者は対戦相手以外からの外的要因での干渉を無効化する。

(吾輩が対戦相手として指定したのはあの害虫ツ、少年の干渉は無効化されるのである
!!?)

故に、フォッサマグナが狙ったのはカウンター。

オレの攻撃を防いだ後で、容赦なく一撃を喰らわせる溜め攻撃。そして、魔法のステッキは振るわれる。

人間の神経をバグらせるに足る電撃がフオッサマグナを襲い——
 (勝利したのである……!!?)

——そして、雷撃は不随意魔術を貫通してフオッサマグナの心の臓を止めた。

ズドンツ!!? と。

それは落雷の音ように響いた。

(がア!!? ……なっ………に、が………ツ!!?)

「油断したな? クソジジイ!」

『横紙破り』——『横紙破り』ではない。

『横紙破り』なんてモノは存在しない。

それは間違いない。

だけど、そんな幻想を成り立たせていたナニかがある筈だ。

ヴィルゴとアドウルテルの決闘には介入できた。

ヴィルゴとテストイスの決闘には介入できた。

ヴィルゴとクロンソーセージの決闘には介入できた。

フォッサマグナとその使い魔の決闘は介入できなかつた。

そして、同時に思い出す。

規則の三を無視したモノはオレ以外にも存在した。

一つは The Golden Sphere 金の天球。魔術結社の構成員メンバー達は首領リーダーと同じ顔にすることで、『類

感』の原理によつて同一人物だと判定させていた。

もう一つは Magnetic Cannon 機関電磁砲の弾丸。クロンソーセージの体内にいた微生物でコーティ

ングすることで、『感染』の原理によつて同一人物と判定させていた。

きつと、それと同じ。

『類感』か『感染』かは分からない。

それでも、オレとヴィルゴは同一人物だと判定されていた。

だから、ヴィルゴの決闘には介入できた。

理由なんて分からない。

理屈なんてどうでもいい。

でも、分かることが一つある。

「もう一撃だア!!?」
「ツツツ!!?」

オレはコイツを殺せる。

それさえ分かれば、後は何だっていい。

二度の雷撃はフオツサマグナの神経を灼き、チンコを覆っていたブラックホールが消滅する。

あるゆる攻撃を塵に帰す無敵の防御は無くなった。あと一撃喰らわせて、チンコを破壊すればオレの勝ちだ。

——なのに。

ぼろりつ、と。

右手から魔法のステツキス タン ガンが落ちた。二度も人を殴った衝撃に、弱りきった握力が耐えきれなかったのだ。

どうにか拾おうとするも、握力は言うことを聞かない。左手に至っては、焦げた臭いが漂って使い物にならない。

そもそも、脚が震えて動かない。膝から崩れ落ち、オレの身体は道路上に投げ出された。

それは隙だった。

追い詰められていたフォッサマグナが仕切り直せる程度には、明確な。そして、最強の魔術師は告げた。

「……本気を、出すのである」

そう、つまり。

今までフォッサマグナは一切本気を出していなかった。

規則の三を悪用した外的要因の干渉無効も。

数多の天災を引き起こした純白の閃光も。

無数のスペースデブリを落とした暗闇も。

これから起こす厄災に比べれば兎戯に等しい。

フォッサマグナはチンコをオナホに納める。

今、ブラックホールとホワイトホールが融合する。

「オナホは第一神ヌイト、ペニスは第二神ハデイト。ならば二柱の神が交わりし時、第三神ラー・ホール・クイトが目覚めるのである」

ラー・ホール・クイト。

それはセレマ宇宙論における、女神ヌイトと男神ハデイトが結合して生まれる子供。

この神が発生した時、全ての事象もまた発生するとされる。言い換えれば、宇宙の始まり。

つまり――

「さあ、ビッグバンを受けてみせるがよい」

直後。

宇宙を創世するエネルギーが眼前で発生した。

避けられる訳がなかった。

それは一つの宇宙^{せかい}。

決闘空間がなければ、地球どころか天の川銀河すら滅ぼしていたであろう超広域破壊魔術。

反応できる訳がなかった。

それは指数関数的な急膨張^{インフレーション}。

宇宙の膨張速度は光速を上回り、視認することすら叶わない。

耐えられる訳がなかった。

それは史上最大の^{ビッグバン}大爆発。

文字通り、この宇宙^{せかい}の全ての物質とエネルギー量に匹敵する高密度・高温度の宇宙卵。

だから、オレにはやはり何も出来なかった。

だから、オレは死んだ。

T i p s

◆それは、駄目。

◆だから、今回だけは力を貸してあげるわ。

深い、深い、海の底。

まるで深海で漂っている気分だった。

いいや、もっと正確に表現するならば。

羊水に包まれているような感覚。

光は遠く、音は弱く。

完全な虚無ではないものの。

淡い情動しかない静寂の世界。

そんな場所へ伝わってくる何かがあつた。

『しようがないわねえ。今回だけよ?』

銀の糸が垂れる。

それは海上から放たれた釣り糸か、地獄へ伸ばされた蜘蛛の糸か。

あるいは肉体とアストラル体Silver cordを繋ぐ銀の紐cordか、母親と子宮の中の赤子を結ぶ

命Umbilical cordの網cordか。

表現は何だっついていい。

大切なことは一つだけ。

それはヴィルゴの魂を絡め取つた。

『あなた、は……?』

『強いて言うなら、カミサマかしらね。自分で言うのは滑稽だけれど』

ヴィルゴの上半身は消し飛んだ。

だから、肉体的に見れば確実に死んでいる。

最先端の『科学』でも、彼女を救うことは出来ないだろう。

だけど、〈魔術決闘^{ベニスフェンシング}〉はまだ終わっていない。

ならば彼女の魂はまだそこにあり、魔術的に見ればまだ死んではいない。

『魔術の核は処女懐胎。聖母マリアが神の子を孕んだ方じゃなくて、女神イシスが処女のままホルスを産んだ神話の方よ?』

『女神イシス……私^{わたくし}達魔女の元祖とも言える神格ですわね』

魔術の基点はヴィルゴの子宮。

彼女の子宮は魔女の大鍋と『類感』している。

そして、大鍋は死と再生を象徴する。

魔女の大鍋は秩序を溶かし、摂理を掻き混ぜ、新たな生命を育む。

『女神イシスは私とも相性がいい。同一視されてるくらいだものね？ 加えて、母のイシスは人を蘇らせる権能を持ち、子のホルスは復活を象徴する神。だから、こんな屁理屈も罷り通る』

『まさか……私わたくしを蘇らせる気ですか!?!?』

それは前代未聞の蘇生魔術。

裸の魂に服を着せるように、物質的な肉体が子宮の中で形成される。

『……………代償は？ 無償の善意ではないのでしょう?』

『もちろん、何の代償もない訳じゃないわ。けれど、貴女ならそれを踏み倒せるし、今の状況ならかえって役に立つわ』

命は孵り、心は返り、肉は還り、魂は帰る。

意識が急速で浮上する。

蘇生、出産、転生。

呼び方は何だっさい。

新たなる生命が今、産まれ落ちた。

彼女の使命はただ一つだけ。

「フオツサマグナ……!!? 貴方にセージは殺させませんわツ!!?」

Tips

◆女神イシスとは、エジプト神話における魔術を司る神。夫はオシリス、子供はホルス。

◆エジプト神話には、イシスが殺されてバラバラになってオシリスを復活させたエピソードがある。ただし、男根のみは見つからなかったとされる。

◆わたくし神と同一視される神よ。

だから、オレにはやはり何も出来なかった。
だ・け・ど、オ・レ・は・死・な・な・か・つ・た。

「何？」

沈黙。

何も、起こらなかった。

フォッサマグナのビッグバン魔術は不発に終わった。

そして、驚愕は一つじゃない。

フォッサマグナは彼女を見て言葉を溢す。

「生きて、いたであるか」

「護衛対象を残しておちおちと死んでいられませんわ」

涙が込み上げる。

彼女が死んだ時には流れなかったものが。

今、暖かく頬をつたう。

「……何をした？」

「貴方は優れた魔術師ですが、それは『射精魔術』がありきのこと。〈魔術決闘〉を終了

させればその力も發揮できないですわよね？」

それこそが蘇生の代償。

女神イシスによつて復活した夫オシリスが、しかし男根のみは見つからなかったように。

蘇生したヴィルゴもまた代替魔杖を代償として支払つた。

本来なら、負けが確定する十分すぎる代償。

しかし、彼女はそれを踏み倒せる。

何故ならば、無数の細菌こそが彼女の代替魔杖であるから。

加えて、彼女はその代償を攻撃として用いた。

バキュームとの戦いがそうであつたように、ヴィルゴの皮膚には無数の使い魔が蠢いており、対戦相手として指定しようとも彼女を視認することは叶わない。

故に、今回も対戦相手として指定されたのは細菌の一つで、それを代償として差し出したことで無理矢理に儀式は中断された。

「……確かに、驚愕したのである。ビッグバンが不発したことも、汝が蘇つたことも。だが、結局は初めに戻つただけであらう？」

「……………」

「汝等は苦勞して吾輩を対戦相手に仕立て上げた。それを自身から捨てるとは、徒勞で

あつたな。吾輩が決闘空間を再構築すれば、規則の三によつて汝等の干渉は無効化される」

「それでも、今だけは無防備ですわねよ？」

フォツサマグナは反射的に下を見る。

ビッグバンの不発、ヴィルゴの蘇生。

様々な出来事が、じりじりと匍匐前進して距離を詰めるオレから意識を逸らしていた。

「オナ——」

「遅え!!?」

地面からオレは飛びかかった。

右腕は痺れて使いものにならない。

左腕は焼け焦げて動かない。

フォツサマグナを倒す手なんて存在しなかった。

それでも、オレには歯があつた。

「——ツッ!?」

ガブリツ!!? と。

オレは文字通りフォツサマグナに喰らい付く!!?。

「吾輩のペニスを喰い千切る気であるかア——ツ!!?。」

側から見れば、それはフェラのようだった。

だけど、実際には奉仕の真逆。

チンコを噛み砕こうとするオレと、魔力でチンコを守ろうとするフォツサマグナの戦いだった。

「があああああああああああああ!!?。」

「うおおおおおおおおお!!?。」

余りにも衝撃的な光景に、フォツサマグナの精神は完全に乱された。

打開策なんて思い浮かぶ筈もなく、魔力を込めた不随意魔術でそのチンコを守る。

(だがッ、ただの歯で吾輩の魔除けは貫けんツ!!?。このまま耐え切れれば……——ッ!!?)

バチイツツ!!?!!?!!? と。

◆めでたし、めでたし。

「聞くのである、〈最強〉を討ち果たした勝利者達よ」

これで全ての戦いは終わった。

そう思った時のことだった。

「事件はまだ終わっていないのである。吾輩が汝等を狙った理由を教えよう」

雌奴隷となったフォッサマグナは無慈悲な言葉を告げた。

「吾輩を倒したのならば、責任を取れ。吾輩の代わりに人類を絶滅の危機から救うのである」

Tips

◆で——終わらないのが現実なのよねえ？

「まずいッ!!? あと3時間もねえぞ!!?」

「えっ? ですが……」

「説明は後だ! 急いでくれ!」

「わっ、分かりましたわ! 私わたくしの背にしがみついでくださいませ! 全速力フルスピードで飛ばしま

すわよ!!?」

感動の再会を祝う暇もなく、オレとヴィルゴは箒に乗って高速で飛翔していた。嵐は既に去っている。

周りの目は気にならない。きっと、『科学』の街の住人は何かのプロモーションだと思つて気にしないだろう。

オレ達がいかなにも急ぐには理由があった。

「フオツサマグナの話……宇宙エレベーターの最上階に魔術が仕掛けられてる。つてのは本当なんだろうな?」

最後の最後に残された爆弾。

一連の事件の黒幕はバキームで間違いない。

だが、この混乱に乗じて宇宙エレベータに細工をした魔術師がいた。

フォッサマグナの目的はその魔術の阻止だったらしい。

何でも、直接的に魔術を阻止することが不可能であるため術者候補をしらみ潰しに倒して回っていたようだ。

「彼の者は魔力枯渇によつて命令を拒む精神力を失いましたわ。私の質問に対して嘘を述べられるはずがありませんわ」

「だったら本当に存在するのか、世界大戦誘発術式つてヤツが」

その魔術こそが世界大戦誘発術式。

宇宙エレベータとバベルの塔に『類感』を働かせ、宇宙エレベータを順序正しく破壊することでバベルの塔の崩壊を再現する魔術。

神と同じ視点に立とうとした人を罰する為、神は人の言語をバラバラにして言葉が通じないようにした。同じように、世界大戦誘発術式が発動すると人々は他国の人間のことが理解できなくなり、あらゆる外交が不全となる。

それは結果として、人類が絶滅するまで終わらない第三次世界大戦を引き起こすだろう。

「ですが、まだ発動していないとなると特殊な条件が必要な筈ですわ。バベルの塔は同じ言語を使う者達が一箇所に集まっていますから、対象となる国の民がこのA-Iランドに集まりきらない限り発動されることはありませんわよ」

「……………ああ、それはフォッサマグナも言っていたな。だから、万博だろ?」

3月26日に開催されるA-Iランド万博^{エキスポ}

開催式には国連に所属する全ての国家の官僚が招待されている。術式起動のタイミングは間違いなくここだ。

「万博^{エキスポ}とやらが開催されるのは3月26日の日曜日……………来週でしょう?」

「いや、それがそうとも言えないんだ。空を見てくれ」

「?」

ヴィルゴは空を見上げた。

そこには一点の曇りもない青空が広がっている。

「ええと、これが何かありません?」

「どう考えてもおかしいだろ。フォッサマグナとの戦いが始まってから一時間程度しか経ってない——嵐が起こってから一時間しか経ってないのにもう晴れるものか?」

「……………ツ!!?」

同時に、コンタクトレンズ型AR端末を操作する。

視界の右上は、今日が3月25日の21時であると示していた。

「これはオレの推測だが、決闘空間内と外界では時間の速度が違っていた」

「……………あり得ますの?」

「フォッサマグナはブラックホールを操ってただろう? 相対性理論では重力が強くなるほど時間の流れは周囲に比べて速くなるんだ。それを応用すれば、あいつは時間の流れも操れる」

「滅茶苦茶ですわ!?」

ぐわんつ、と動揺で箒が大きく揺れる。

ヴィルゴの腰を掴んでいるオレの手がツルツと滑り、危うく地面の染みになりかけた。

「ちよつ危なツ!?? 落ちますわよ!?? もつと強く私わたくしを掴んでください!!」

「悪い……………もう、握力が出ねえんだ」

「……………貴方をここで降ろして、私わたくし一人で宇宙エレベータに向かいますわ。敵の正

体は分かりませんが、足手纏いを守る余裕があるとは思えませんので」

強い口調はわざとだろう。

彼女はオレを気遣っている。

だけど、その心配を受け取るわけにはいかない。

「ダメだ。〈ネオアームストロング〉へ侵入することはできない。あそこは〈MAI:SON〉が守ってるからな。難易度は大学とは比にならない」

最初から知っていたことだ。

魔術師は『科学』のセキュリティを掻い潜れない。

オレのマンションも、AIランド中央大学にも侵入できないヴィルゴが〈ネオアームストロング〉に入れるとは思えない。

「でしたら、どうやって——」

「精神認証。オレさえいけば、宇宙エレベータ最上階の管制室まで一直線で進める」
逆に言えば、オレ以外に管制室に行ける人間はいない。

では、何故そんな場所に魔術が仕掛けられているのか。誰が、どうやって。

……胸に名状し難い不安が芽生える。だけど、それを言語化することができない。オレの直感が上手く働かない。

「……………ともかく、先を急ごう」

「ええ。魔術師からの妨害を警戒しつつ、ですわね？」

T i p s

◆ 精神認証とは、宗聖司そうせいしが導入した生体認証に代わる画期的な仕組みシステム。現在システムシステムに登録されているのは宗聖司そうせいしのみ。

◆ 宗聖司そうせいしの人格が鍵マスターキーとなるため、本人が眠っていたり、薬物などで従わされていれば無効になる。

◆ あら、だったら魔術を仕掛けたのは一体誰なのかしらねえ？

「……何もなかったな」

「……何もなかったですわね」

時速100キロで空へ駆け上がるエレベーターに乗りながら、二人して呟いた。

魔術師による妨害。

或いは複雑怪奇な科学のセキュリティ。

そんな風に予想していたものは何なかった。

呆気ないほど簡単にオレ達はエレベーターへ乗り込んだ。

「……管制室で敵が待ち構えている、とか？」

「ですがどうやって侵入するのですか？ 貴方以外は〈M A I : S O N 〉に拒絶されるの
でしよう？」

「そうなんだよなあ」

最後の魔術師に關しては謎が多い。

時間が切迫していたため急いで宇宙エレベーターへ向かったが、もう少しフォッサマグ
ナから話を聞き出ししておくべきだった。

というか、そもそもの話――

「――フォッサマグナがヴィルゴを殺そうとしたのは何故なんだ？」

それが、一番大きな疑問点だった。

「えーと？ 彼は誰が犯人か分からない為、怪しい人物をしらみ潰しに襲っていたと
仰っていましたわ。私が『わたくし白』から離反したタイミングが悪かったのでしょうか」

「でもさ、フォッサマグナはこう言ったんだよ。ヴィルゴに罪はないが、ヴィルゴの生が
世界の害になるって」

しらみ潰しなんかじゃない。

まるで、何かを確信しているかのような口振りだった。

ヴィルゴはオレの言葉を聞いて、考え込む。

彼女自身もその理由が分かっていないようだった。

（私が世界わたくしの害となる……？ それも人類が絶滅するほどの？ ……不可能、だとは思いますが……いえ、そもそも、どうして私は彼の者の言葉に疑問を抱いてすらいない……？ ……ま、さか——）

チーン、と。

ヴィルゴの思考を中断するように、エレベータの音が鳴った。

管制室のある最上階へ到着したのだ。

ゆつくりと、扉ドアが開く。

この辺りはもう宇宙空間の中だ。

無重力の中を泳ぐように、大きく一步を踏み出した。

「あ？」

そこでオレは目にした。

いや、目にしなかったと言うべきか。

ここに来る前、オレは大体の予想をしていた。

それはオレが創り出した神託機械——〈M・A・I・S・O・N〉こそが魔術を仕掛けた犯人という予想だった。

外から管制室に侵入できないのなら、魔術を仕掛けたのは中にいるものに違いない。そう考えたのだ。

〈M・A・I・S・O・N〉が世界大戦誘発術式を仕掛ける理由なんて分からない。

それでも、他の者には不可能な犯行だ。

そんな消去法による予想があつた。

だけど、オレは目にしてしまった。

何の異常もない管制室の様子を。

「……………魔術師は何処だ？ 世界大戦誘発術式は？ 人類が絶滅してしまうような何かがあるんじゃないのか？！ 何かッ、何かなかったのか？！ 応えてくれッ、〈M・A・I・S・O・N〉ッ！！？」

『了解、自己点検を開始します。……応答、異常は見られず。提案、点検の意図を確認します』

「……………違う。お前は犯人じゃない。オレは分かる、 $\langle M_{マ} A_{イ} I_{イ} : S_{サ} O_{ン} N_{ン} \rangle$ は何もしていない。……………なら、誰が!?？」

『魔術』の気配はない。

『科学』の暴走でもない。

訳が分からなかった。

判断を仰ごうと、ヴィルゴに声をかける。

その、一瞬前。

ヴィルゴは納得したように声を上げた。

「……………私が犯人だったようですわね」

ドスツ、と。

ヴィルゴの手刀がオレを背後から突き刺した。

「……………あ？」

「よくやってくれましたわね……………つと、この口調はもういいかしら。とにかく感謝しましょう、人間」

「……………なん、で？」

「貴方、勘がいいのでしょうか？ もちろん分かっているわよね。……ああ、もしかして、信じたくないのかしら？」

戸惑いながら、オレの天才的な頭脳は答えを導き出してしまふ。

世界大戦誘発術式なんて存在しなかつた。

全てはオレを自発的に管制室へ向かわせる為の罠。いや、この魔女が管制室へ向かう為の罠だ。

「いやッ、けどッ、フォッサマグナは嘘をつけないはずだろう!?？」

「愚問ね。分かりきつた答えを聞くのは止めなさい。否定して欲しいのだろうけど、現実にはそう甘くないわ」

たった一言、魔女は述べる。

「規則の七」

ルール参照

◆規則の七。敗者は約一日間魔力枯渇テクノブレイクに陥ると共に、雌奴隷に変えられ、勝者に命を委ねる。

それだけで、オレは理解してしまった。

フオッサマガナは嘘をつけないんじゃない。

命令を拒めない奴隷になったのだ。

つまり、勝者が嘘をつくように命令さえすれば、その発言は一切の信用を失う。

「随分と私わたくしを信用していたようだけど、ごめんなさいね？ 始めから、貴方と出会う前か

ら私わたくしは貴方を騙していたの」

「嘘だ……!!? お前はヴィルゴなんかじゃない！ ヴィルゴを乗っ取っただけの別人

だッ!!?」

雰囲気からしてヴィルゴとは違う。

顔や声が一緒でも、目の前の魔女とヴィルゴは似ても似つかない。

「あら、やっぱり勘がいいのね。でも残念、逆よ」

「……逆……?」

「ええ、逆。今の私こそが本物のヴィルゴで、貴方と会話していたのは私の身体を乗っ取っただけの寄生虫よ」

「は？」

寄生、虫？

人間の脳に棲息して、人間を意のままに操る虫だった？

美貌に優れた外面はまやかashiで、気色の悪いムシケラに過ぎなかったって言うのか？

「うそ、だ」

「これは本当よ。思い出してみなさい。フォッサマグナは前の私のことを一度でもヴィルゴと呼んだかしら？」

「……………」

何も言い返せない。

フォッサマグナはきつと分かっていた。

ヴィルゴの——その名を自称していた寄生虫の正体を。

「私は^{わたくし}管制室に行きたかった。だけど、それには貴方の意思が必要で、貴方は勘が鋭くて騙すことはできそうになかった。だから、一から信用できる人格を創り出したのよ」

「……………」

「寄生虫を責めないであげてね。彼女は本気で自分がヴィルゴ本人だと思い込んでいた

し、本気で貴方を救おうとしていたのだから」

「……………なら、彼女はとうなった」

「もちろん、死んだわ。ここに辿り着けば用済みになるのだから、最初から無重力空間で死ぬようにデザインされた生物なのよ」

呆気ない幕切れ。

オレは彼女にどんな感情を抱けばいいのか。

それすらも分からず、二度と会うことは叶わない。

「では、改めて自己紹介を」

喪服のような黒いドレスの裾を掴み、ヴィルゴは膝を曲げてお辞儀カーテシーを行う。

「私わたくしは^{アイアンメイデン}鋼鉄の処女^{アバター}ヴィルゴ——けれど、この名すら肉を持った化身アバターを表しているに過ぎないわ」

緋色の女、^{グレートマザー}太母、夜の淑女、獣に跨った女。

この魔女を表す名は幾つもある。

けれど、最も有名な名前が一つ。

「私わたくしの——神わたくしの真の名は〈大淫婦〉ベイバロン。ハーレム3000000のカミサマよ」

3月25日、23時50分。

神と人による、人類の存亡を賭けた戦いが始まった。

T i p s

◆これは性魔術を忌み嫌う魔女が、『射精魔術』なんて巫山戯たモノを絶滅させる物語である。

12/12 ちんぽ☆デカいのね～

ぼた、ぼた、なんて。

もしも地上なら血が床を汚していたのかもしれない。

だけど、ここは宇宙エレベータへネオアームストロングの最上階。宇宙空間の中にある管制室。

破裂した心臓は無重力の中を浮かんで漂う。

オレの胸には手刀によって穿たれた穴アナがあった。

超音波ナノマシン機械が心臓を修復しようと足掻くが、蘇生は叶わない。数十分の延命は叶うかもしれない。だけど、それだけだ。

『アラームアラームアドミニストレーター』 案内、通報しましたので救急隊が

一時間ほどで到着すると見られます』

〈MAISON〉が救急隊を呼んだようだが、きつと間に合わない。地上から駆けつけたとしても、100km以上の距離があるのだから。

そして、一時間以上延命できたしても逃げられるとは思えない。目の前の魔女がそれを許さないだろう。

〈ネオアームストロング〉には対スペースステブリ用など、たくさん兵器が搭載されている。だが、それは外へ攻撃する為の兵器で、中に入られること——それも管制室の中

——は想定していない。

ハイパーコンピュータ
神託機械の〈MAI:SON〉も、こうなつてしまえば無力だ。

でも、そんなことはどうでも良い。

オレの余命なんて関係ない。

何よりも知るべきことが目の前にあつた。

「かみ、さま……？」

「ええ、そうよ。言ったでしょう？ カミサマは存在するって」

〈大淫婦〉ベイバロン。

それが目の前の魔女の名前だった。

「……………うそだ。ウソに決まってる」

「嘘じゃないわ。貴方もバキュームとの戦いで知ったでしょう？」 『第三の魔術』は神そのものをシステムに組み込んでいる」

「それが……ベイバロンだって？」

「そうよ。1999年に神は三賢者わたくしの手によって囚われた。『射精魔術』はクロウリーの性魔術が基礎となっているのだから、相性の良いセレマ宇宙論における快樂の女神が選ばれたのでしょね」

T i p s

◆ ベイバロンとは、セレマ宇宙論において女性の性欲衝動を司る女神。ババロン、緋色の女、グレートマザー 太母とも。

◆ 誰も拒絶しない神聖娼婦と考えられるが、同時に処女でもあり、しかし全ての肉体の母でもある。

◆ 星幽界アバタに存在する神であるが、物質界に肉を持った化身アバターとして顕れることもでき、その化身は緋色の女と呼称される。ヴィルゴも緋色の女の一人。

「神には愚かな人間の精神的な熟達を導くという権能があるわ。クロウリー風に言うならば、深淵アレスミスを渡らせる権能かしら。魔術師はその工程を経ることで、生命セフィロトの樹を駆け上つて神の領域に至るの。賢者共はそれを利用したのよ」

「……………?」

「分からないかしら? 神には人を神に近づける力があつた。だから、魔術師に神の力を与えるだけの機械にされたのよ」

だからこそ、ベイバロンは神だとも言いたげな表情。

だけど、それはベイバロン＝神を成り立たせる式であつて、ヴィルゴ＝ベイバロンを証明している訳じゃない。

「テメエが、…………カミサマってんなら……………ハーレムに、他人の魔力に頼る必要なんかねえだろうが。テメエがカミサマならツ、自分の力で何でも出来るんじゃないのか?!」

「神が万全なら、ね。けれど、神のカミサマとしての力は全て『射精魔術』に取り込まれているわ。だからこそ、取り戻すには正攻法しかないのよ」

「…………正攻法、だつて? これが…………?」

「ええ、勿論。神の権能わたくしが差し押さえられているから、人類サトルと同じようにハーレムを掻き集めて自分の力を『射精魔術』で引き出してしているのよ」

『射精魔術』を経由して神の力を引き出しているってことか。

なら、カミサマがこんな風にスケールダウンしていても仕方がない、のか……？

いや、でも………

「……………なら、見せてみるよ」

「何を？」

「証拠だよ。テメエが神だつて自称するのなら、それを信じられるだけの証拠を見せてくれよ」

「わざわざ貴方に付き合う気はないわよ。神の儀式わたくしは直ぐに終わ——あらら？」

想定外の何かがあったのか、ベイバロンは首を傾げる。

そして少しした後、何かに思い至ったように眉を蹙めた。

「あのクソジジイ……ホワイトホールに何か細工してわね」

「クソジジイ……？」

「〈最強〉とか名乗ってる頭ずが高い人間サルよ。わざわざ正面から挑んできて何のつもりかと思つたら、神わたくしへの妨害を仕掛けてたつてわけね。お陰で肉体アバタイも地脈もグツチャグツチャだわ」

フオツサマグナか……!!??

オレは全身全霊を賭けて戦っていたが、フオツサマグナはオレの背後にいるコイツに嫌がらせを仕込みながら戦っていたのか。

わざわざオレ達を奇襲することなく正面から戦いを挑んだのも、戦闘前に天災を引き起こしたのも、フオツサマグナが倒れた時のための細工だったのかもしれない。

ベイバロンは溜め息を吐いて、呟いた。

「これだと10分くらいはかかるかしら……仕方ないわねえ、証拠を見せてあげるわ。宇宙^{そら}を見てくれるかしら」

最上階の壁や天井はガラス張りみたいに透き通った素材で出来ている。

つまり、宇宙^{そら}に囲まれている。

そんな宇宙^{そら}が今——

「——はっ。」

——回転していた。

正確には星々が、地球を中心として回転している。

まるで大鍋の中で掻き混ぜられるように、無数の恒星^{ほし}が宇宙^{そら}を泳ぐ。

そんなの、あり得るはずない。

夜空に浮かぶ星々は数光億年先にあるものだって多く、たとえ本当に星を動かせたのだとしてもその光が動く筈もないのに。

それなのに、恒星の軌道が宇宙規模の魔法円を描いていく。

宇宙は魔女の大鍋であり。

世界は女神の子宮であった。

「なんだ、これ……!?」

「これ？ フォッサマグナが阻止しようと足掻いていたモノ——人類を絶滅させる魔術、その一端よ」

「なん、で？ どうやって!?」

余りの巨大さ、そして神威に畏敬を覚える。

知らず知らずのうちに唇が震え、問いかけは途切れ途切れに吐き出された。

「なんで、なんて。決まっているでしょう？ 人間共に見下されるのが気に食わないから、神から力を取り上げて射精し続ける魔術師達が生理的に受け付けないからよ」

「……………それならツ、人類を絶滅させる必要なんてないじゃねえか!!? 魔術師だけを止めれば——」

「もちろん、そのつもりよ」

「……………え？」

淡々と。なんてことないように。

魔術を極めた先に存在する神は告げる。

「^{わたくし}神だって、人間^{サル}全員に恨みがあるわけじゃあないものね。一人一人プチプチ殺していくのも面倒だろうし」

「だっ、だつたら……………」

「だけど、結果として人類が絶滅しても仕方ないとは思つてるわ」

「……………テメエは、何をするつもりだ？」

魔術師を殺すモノ。

『第三の魔術』が使えなくなるモノ。

尚且つ、人類が絶滅しても可笑しくないモノ。

嗚呼^{ああ}、もつと早く気づくべきだった。

『射精魔術』は男しか扱えない、女が代替^{ディアルド}魔術を使つても大した効果は望めない。なら、世界から男が消えればいいのだと思わない？」

オレはこの数日間、それを何度も目にした。

『第三の魔術』に必要な術式。

『射精魔術』と深く結びつくモノ。

〔ベニスフエンシング魔術決闘〕——全人類を決闘で負かしてメス墮ちさせるつもりか!!?〕

ルール参照

◆規則の七。敗者は約一日間デクノブレイク魔力枯渇に陥ると共に、雌奴隷に変えられ、勝者に命を委ねる。

決闘に勝ち続ければ理論上は可能かもしれない。

だけど、それは実質不可能だろう。

『射精魔術』を使う魔術師は世界に5万人存在するのだから、それを可能にするには5万連勝する必要がある。

加えて、そこまでやってもハーレム50000。

ハーレム30000000の足元にも届かない。
余りにも桁外れすぎるのだ。

フオツサマグナですらハーレム150000だった。

ハーレム30000000なんて夢のまた夢。

しかし、神はこう告げる。

「あら、たった数日で随分と魔術に染まったわね。だけど、もつと身近にあるでしょう？
人間を女体化させる現象が。貴方も身をもつて体験しているモノが」

咄嗟にオレは自分の体を見下ろした。

失ったチンコ、膨らんだ胸^{おっぱい}。

さて、オレが女体化したのはなんでだっけ？

「まさか、T S病か……!?？」

「大正解よ」

T S病。

正式名称は、突発性性転換症候群。

原因不明とされてきたその正体は、ベイバロンが産み出した魔術式細菌兵器だった。

フオツサマグナが人類の絶滅を危惧したのも無理はない。TS病によって世界から男性が消滅すれば、人口は増えることなく右肩下がり減る一方なのだから。

最新の『科学』で治療法が見つかる筈もなく、今や男性の0.05%が罹患している。0.05%と聞くと少なく思えるが、今の世界総人口が100億人で、男性がその半分の50億人いると考えれば、世界中に250万人は患者がいる。

自己申告していない人も含めればもつとだ。想定される患者数は300万人と云われている。

——何処かで耳にした数字じゃないか？

「TS病患者全員がテメエの雌奴隷だとカウントされているのか？」

「あら、気づくのが早いわね。そして、初めに貴方が言っていた〈魔術決闘〉ベニスフェンシングもあながち間違いじゃあないわ」

「……………ホルモンバランスを崩して性転換させるウイルス、じゃない。感染

者に〈魔術決闘〉を強制するウイルスかッ!??」
 「満点ね、花丸をあげるわ」

盲点だった。

考えたこともなかった。

だけど、ウイルスは確かに言っていた。

代替魔杖^{デイルド}の条件とは。

一つ、魔術師の魔力が箆^{ベニス}っていること。

二つ、棒状であること。

それは魔杖^{ベニス}も同じ。

つまり、チンコがであろうと魔力が箆^{ベニス}っていなければそれは魔杖とは看做^{ベニス}されない。

ルール参照

◆規則の六。魔杖^{ベニス}の破壊が敗北の証となり、元から魔杖^{ベニス}を持っていない場合は代替魔杖^{デイルド}やそれに類する物が魔杖^{ベニス}扱いとなり、それも無ければ自動で敗北する。

魔術師でもなければ、〈魔術決闘〉に参加した瞬間に雌奴隷に変えられるのだ。「いつ、いや！ けどッ、〈媚薬香水〉チャームフェロモンはどうやって用意した？？」決闘空間の構築には宣誓おまじないだって必要だろう？？」

ルール参照

◆規則の一。決闘空間は挑戦者の宣誓と、媚薬香水チャームフェロモンの充満によって展開される。

「知らないの？ 病気が原因で体臭が変わることがあるわ。昔は臭いを嗅いで病気を特定する嗅診つてもものがあつたくらいよ」

「——あ」

「そして、T.S病のウイルスは感染者の体臭を〈媚薬香水〉と同じ成分にするわ」

そういえば、TS病の症状の一つに性的興奮を高める作用があった。

あれはTS病を粘膜接触——性感染によって効率よく流行らせる為の効果などではなく、体臭が〈媚薬香水〉と同じになったが故の副作用だったのだろう。

「加えて、細菌が電気信号でコミュニケーションを取っているという話も知っているでしょう?」

「声帯に電気信号を流して、感染者本人に宣誓をさせていたっていうのか……!?」

オレも、誰も彼も、宣誓を言わされていた。

自分ですら気づけないほど微弱な電気信号が微かに声帯を震わせ、可聴音域外の宣誓が為されていた。

「もう一つは聞かなくていいのかしら? 対戦相手は視認しないと指定できない——そこも矛盾点だと思うけれど」

ルール参照

◆規則の二。対戦相手の指定は、挑戦者が決闘空間内にいる相手を宣誓時に視認することで決定される。

「……そつちは大体見当がついてる。外送理論、だろ？」

使フアマミリアい魔の発光バクテリアと視界を共有する魔術。

TS病のウイルス一つ一つが魔女の使フアマミリアい魔であるならば、ウイルスに罹患した感染者を視認することなど容易い。

「その通りよ。TS病ウイルスは神わたくしの魔女の大鍋——子宮の中で育んだ自慢の子供達だわ」

「……………疑問点が一つ解決されたよ。ずっと思ってた、結局『横紙破り』ルーレルレイパーは何だったのか。なんでオレとテメエが同一視されてるのかって」

「その答えは？」

「テメエの胎内で培養された細菌がオレの肉体に張り巡らされていたからだ」
やっていた事はバキウムと同じ。

彼女はクローンソーセージの体内にある微生物を抽出・培養し、それを弾丸にコーティングすることでクローンソーセージ本人だと同一人物判定を誤魔化していた。

同じように、ベイバロンの胎内にある細菌がオレの体にもあったため、オレとベイバロンは同一人物判定されていたのだ。

これで疑問点は無くなった。

けれど、新たに一つ疑問が生まれる。

「なあ、ベイバロン」

「どうしたのかしら、セージ」

「テメエの目的は人類から男を無くすこと。その為にTS病を流行らせた」

「それが？」

これは今までの前提条件。

だけど、元々の話は何だったか。

「だったら、テメエは今ここで何をしようとしてるんだ!?？」

宇宙規模の魔法円が目に入る。

TS病を流行らせるだけならオレに接触する必要はなかった。

きつと、まだ何かがある筈なんだ。それを聞くまでは、オレはまだ死ねない。

「………神わたくしの目的は『射精魔術』の根絶よ。男の消滅さえ神わたくしにとっては一つの手段に過ぎない」

いわ。だけど、神わたくしは確信しているわ。TS病のウイルスは『射精魔術』を滅ぼせないって」

「……何故？」

「言わなかつたかしら？ 魔術師は病気に罹らない。無意識の内に虫除けの術式を使用しているのだから」

不随意魔術、虫除けの術式。

魔除けの術式と同じく、意識せずとも魔術師が常時展開している魔術の一つだ。

TS病ウイルスのような人間に害のある細菌は即座に死滅させられる。

「だったら、新たに産み出すしかないでしょう？ 不随意魔術すら貫く細菌を」

「どうやって……？！」

「やり方は簡単よ。宇宙そのものを魔女の大鍋——神わたくしの子宮と『類感』させ、そこで産

まれたウイルスを対流に乗せて宇宙から地球へばら撒くだけ」

「……宇宙アストロバイオロジー生物学か！！？」

例えば、インフルエンザは世界各地で多発的に流行する。この謎を解決するのが、インフルエンザは宇宙が起源であるという説だ。

病原体が宇宙から地球に侵入する際に、対流に乗って地球へ降り注ぐことで複数の場所で一斉に感染が起こるとされる。

「宇宙は女の領域、地球は男の領域よ。それは前にも言ったわよね？」

「……………セレマ宇宙論だっけ？」

「ええ。であれば、こうとも考えられるのでは？」

神託が下る。

魔女は告げる。

「宇宙から地球に侵入するウイルスは男の魔術師を侵食する魔女の呪いと『類感』している、と」

つまり、それこそがベイバロンの動機。

虫除けの術式を貫通する効果を持たせる。

ただそれだけの為に、彼女は宇宙エレベータへネオアームストロングの管制室を占拠し、宇宙規模の魔法円を構築したのだ。

「それ、だけの為にッ!? 宇宙エレベータも神託機械もッ、万博もオレの頭脳すら関係ないッ!!? 宇宙空間にある施設なら何処でもよかつたつての catt?」

「何処でも良いと言えば弊害があるわね。此処は火力発電・水力発電・風力発電・地熱発電——四属性のエネルギーが調和した神殿よ。見えない力を受信する電波塔という側

面を持っていたのも良かったわね」

「けどッ、そんなもんは何処にでもあるッ!!? どうして此処だったッ? どうしてオレが狙われたんだッ!!?」

「狙いやすそうだったからよ」

結局、それだけ。

何か特別な理由なんてなかった。

丁度タイミングよくバキュームがオレや神託機械ハイパーコンピュータの情報ハイパーコンピュータを魔術世界に流して、

丁度ベイバロンの求めていた条件と合致していただけのこと。

フォッサマグナの言った事は正しかった。

一連の事件の黒幕はバキューム。

ベイバロンはその事件に便乗しただけの、別の事件の黒幕だった。

「……話疲れたわね。もう良いかしら?」

「まつ、待て! 虫除けの術式を退けられたとしても、魔術師には魔杖マジックがある! 感染してもメス落ちする訳が……!!?」

「めんどくさ……もはや元の手法——ペニスウェンシング魔術決闘マジックを利用した男性の女体化に意味は

無いわ」

「……………」

「T.S病はホルモンバランスを崩して男性を女体化させる……既にそんな迷信が完成しているの。300万の症例がそれを担保するのだから当然ね。そして覚えているかしら？」 魔術は迷信すらも利用できるのよ」

〈The Golden Sphereの首領リダ、テストイスは人が死んだら星になるという迷信を利用して。人間の固定観念と『類感』させることで、迷信を実現させる魔術だ。

けれど、ベイバロンのそれは違う。魔術に利用する為に都合の良い迷信を自分で風潮させた。

「T.S病ウイルス自体が本当に女体化させる効果を持つたつて言うのか!?」

虚構ククロは真実シロに。

魔術ユメは科学ゲンジツに。

わざわざ300万人の一般人を感染させた利用がこれだ。

ハーレム30000000の魔力。

T.S病に関する世界的な迷信。

この二つを以て、男を絶滅させる細菌兵器は完成した。

「それで分かったかしら、わたくし神の實力が。わたくし神がカミサマであるという証明が」

「しんじ、られるか。信じつ、……信じられる訳がないだろ!!?」

「あら、それは何故?」

「オレは科学者だ!!? 物事を疑うことを生業とする人間だ! いやつ、そもそもつ!

テメエの言うことを鵜呑みできるわけがねえだろ!!?」

ベイバロンが人類を絶滅させる力を持つことは分かった。

ベイバロンが誰よりも強大な魔力を持つことは分かった。

でもそれは、強さの証明であってカミサマの証明じゃない。

だから、ベイバロンの言葉は信じられない。

だけど、ベイバロンは告げた。

オレの魂を剥き出しにする一言を。

「ホントは信じたくないだけでしょう?」

.....。

.....。

.....。

それは、端的な言葉だった。

理屈とか、科学者だとか。

そんな物を無視して放たれた指摘。

オレの感情を問う言葉。

だからこそ、オレの心に深く突き刺さった。

魂を守る理論武装が剥がれ落ちていく。

「貴方は真実を知りたいんじゃないわ。ただ、自分に都合の良い言葉を聞きたいだけ。

そんなの、自己満足に過ぎないわ。そんなものが欲しいなら神わたくしを巻き込まず、一人で

自慰オナニーでもやっていなさい」

そう言つて、ベイバロンはティツシユ箱をオレに投げつけた。

大量のティツシユが宙に舞い、天使の羽のようにひらひらと地面に落ちる。

そして。

数分か、それとも数秒か。

長く……そして一瞬の沈黙があつた。

やがて、唇から言葉が溢れる。

そ……う……だ……よ……と……。

「そうだよ。ベイバロンの言う通りだ。何の反論もできねえ。オレはテメエの言葉を信じたくなかった。そっちの方が都合が良いからだ。だからこそ、テメエの言葉は全部ウソだと跳ね除けた。全部ウソだったら良いという感情が、正当な物事の評価を妨げた。真偽を考慮することもなく、一瞬で。それも自分で意識すらすることなく、無意識のうちに感情的に。科学者だから、なんて詭弁だ。自分の感情に振り回せられて客観的な思考を怠るなんて、科学者からは程遠い。だけど、それが悪いか!? オレは間違ってるのか!? ああ!!? 間違ってるだろうさ!!? 科学者を名乗りながらこんな体たらくじゃ失望されて当然だよ。でもッ、そんなの仕方ねえだろ!? 信じたくないに決まってるんだろ! なんでオレが巻き込まれた! なんでこのタイムリングだった!!? 信じてた仲間に裏切られたばっかりだって言うのにッ、なんでまた裏切られなきゃいけないんだよ!!? カミサマだって言うなら愚かな人類なんか見捨てて宇宙の彼方で楽園でも築いていりゃあ良かったじゃねえか! 絶対的なカミサマが欲しいとか言ってるハイパーコンピュータ神託機械を作ってはいたけど、テメエみたいなのは求めちゃいなかった!!? オレが欲しかったのは変わらない愛と絆とかッ、そんな小さなもんで良かったはずなのにッ!!? 怖い魔術師とだって戦いたくなかった! 仲間に裏切られた時は辛かった! 怪我した時は泣きたかった! それでも戦ってきたのは……それでも踏ん張って立ち上

がれたのには大した理由があつた訳じゃない。ただの見栄なんだ。ちよつとした下心なんだよ。可愛い女の子の前で情けない姿を見せたくないとか。あわよくばオレに好意を抱いて欲しいとか。ただそれだけだつたんだよ。別に世界の平和だとか、世界を救つた榮譽なんていらぬ。ただ全てが終わつた後に連絡先を交換するだとか、可愛い女の子にお礼を言われるだとか。ほんとに、それだけでよかつたんだ。何ならそれだつていらぬ。ただあの子の笑顔が見れたらそれで十分なんだよ。なのにッ、どうしてこうなるっ!!? 寄生虫とかカミサマとかッ、別人だとかもう死んだとかッ!!? そんな結末なんか欲しくなかつた!!? ただオレはヴィルゴに胸を張れる自分でいたかつただけなのに……!!? それがどうして彼女が先に死ぬような結末を迎えるんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ!!?!!?!!?

ベイバロンはその慟哭を静かに聞いていた。
オレの苦しみは彼女のせいだ。

でも、その憐れみの顔は慈悲を持った女神のようにも見えた。

「貴方……本当にヴィルゴに惚れていたのね」

「……………」

「……………それって今も、なのかしら？ 彼女の正体は神わたくしが産み出した寄生虫ムシケラだと分かってもなお？」

「……………最初は彼女の見た目が好きだった。でも、もう姿形なんて関係ねえんだよ。女性化Tしてもオレの精神性は男のままであるように、彼女が人間じゃなくなってもその美しさは何も変わらねえ」

ホルモンとか脳内物質とか、心に影響を与える物質は肉体の性別によつて異なるものが分泌される。だから、肉体の変化に精神が引きずられるというのはあり得る。

でも、真の意味っていうのはそんなじゃねえだろ。たかが肉体の性別が変わった程度で揺らぐようなもんじゃねえだろうが。

「それで、どうするつもりなのかしら？ 認めたくなくても、理解したのでしよう？ 神わたくしがカミサマであることを」

「……………もう、オレは戦いたくない。立ち上がりたくない」

それは弱音だった。

それは悲鳴だった。

「カミサマになんて勝てる訳がない。勝つたとしても、得られるモノは何もない。オレの好きなヴィルゴは戻ってこない」

オレから溢れるどうしようもない泣き言。

ヴィルゴの前じゃ言えなかつた本音。

「でも、だけど」

だけど、言葉は反転する。

それは反撃の兆し。

「勝てるかどうかなんて関係ないんだ。戦う意味なんて必要ないんだよ」

「……………なに、を」

「オレは言つたぜ、ヴィルゴ。たとえオレの体が女になつたとしても、心まではタマナシ

野郎になるつもりはねえ。戦う理由なんざ、それで十分だろ」

「今更何をするつもりッ!?」

彼女はもういないのだとしても。

彼女を取り返すことが出来なくても。

せめて、彼女に胸を張れる自分でいたい。

それだけで、オレは神様にだって喧嘩ケンカを売れる。

——準備は完了した。

——決意も固まった。

そして、オレは決別の一言を告げる。

「ところで、ここまでの会話は全部ただの時間稼ぎだつて気づいたか？」

ぼたり、と。

オレの指先から甘つたるい汗が一滴垂れた。

それは、単なる汗ではなく、ベイバロンの〈媚薬香水〉であつた。

ベイバロンはTS病ウイルスによつて体臭が〈媚薬香水〉となると言つた。

しかし、その効能は一度きりしか發揮せず、決闘空間が構築されるのもまた一度きりの筈だつた。——本来ならば。

効果が一度きりなのだとしても、TS病ウイルス自体はまだ体内に残っている。

そのウイルスを^{ナノマシン}超微細機械によつて分析し、自分の汗腺を使って元の体臭を再現すれば、その一滴はベイバロン〈媚薬香水〉となる。

再現できたのはたった一滴。

けれど、一滴だけで十分すぎる。

何故ならば——

ルール参照

◆ 規則の四。制限時間は使用した媚薬香水キヤムフエロミンの量で決定され、制限時間内に勝負が決まらなかった場合は挑戦者の敗北となる。

—— 狙いは、ベイバロンの時間切れ。タイムオーバー
ペニスフェンシング

たとえカミサマであろうと、相手は〈魔術決闘〉を利用するハーレム30000000の魔術師。

〈魔術決闘〉のルールに従っているのなら、〈魔術決闘〉のルールで倒せる。

そして、汗が垂れたのと同時。

ポケットに入れていたボイスレコーダーのスイッチを押す。

『聞け、我が目を受けし汝、魔法名ヴィルゴVirgoなる者よ。我魔法名セージSageは汝に決闘を挑む。神よ、師よ。ここに我、汝に対し我が魔術を以て性豪の証を立つる者なり』

それはクローンソーセージが持っていたボイスレコーダー。
可聴域外にまで至るほどに倍速化された宣誓おまじないが決闘空間を構築する。

「——な」

刹那の決闘。

一秒も過ぎれば時間切れで敗北する。
タイムオーバー

そうすれば、ベイバロンは終わりだ。世界中から蒐集した300万人分の魔力が
テクノフレイク魔力枯渇によって失われてしまう。

ベイバロンの脳が超高速で回転する。

いいや、もはやそれは思考ですらない。

半ば脊髄反射によってベイバロンは動く。

「止まりなさいッ!!？」

かちり、と。

視界の端の電子時計が3月25日23時59分59秒で停止した。

「……………は？」

「はあ、はあ、はあ……!!？」　ギリギリだったわね……!!？」

ベイバロンは魔力枯渇に陥らなかつた。

それはルール違反でも何でもない。

ただ、時間切れが起こらなかつただけ——決闘空間が未だ存在しているだけのこと。

一秒未満しか存続できない決闘空間。

今だに時間切れにならない状況。

どちらも嘘でないのならば、解は一つしかない。

「——時間を止めたつての……か!!？」

「わたくし神は十二時に魔法が解けるシンデレラのドレスを着ているのよ？　シンデレラドレスがまだ着用されているという事は、逆説的に世界が十二時に届かないように歪められるわ」

黒い喪服のようなドレス。

透明なガラスのハイヒール。

ベイバロンの肉体を超人足らしめる人体改造術式の要。

それに時間停止なんて活用法があるとは思っても寄らなかった。

タイミングが悪かったとしか言いようがない。

あと一秒でも早ければ、もしくはあと一秒でも遅ければ、その魔術は成立しなかっただろう。

或いは、そんな運命的な偶然を引き寄せるからこそその神なのか。

「そもそも『結界』とは世界と隔絶する技法よ？ 決闘空間内のみを外の時系列から切り離す事など簡単だわ」

そんな訳があるか。

人類には届かない空想の領域を易々と犯す。

これこそが神、意思を持った天災。

時間切れから逃れる為だけに世界の法則を歪める超自然的・絶対的存在……!!?

「これで終わりかしら？ 人類にしてはなかなかやるわね」

「……………ツ、まだだ……………!!?」

魔法のステッキを取り出す。

時間停止なんて馬鹿げた手法は予想しちやいなかったが、一発で終わらないのは想定

内……………!!?

〈魔術決闘〉に持ち込めたことは確かなんだ。後はベイバロンの魔杖を破壊すること

が出来れば――

「これで、終わりかしら？」

ベキベキバキバキツ!!? と。

魔術を使う必要すらなかった。

シンデレラドレスで強化されたベイバロンはオレの右手ごとスタンガンを片手で握り潰した。

「あッ、がア――!!?」

「まだ決闘が終わらない……そのスタンガンだけが貴方の代替魔杖ではないのね。他に何かがあるかしら? 悪魔の乳首とか定番よねえ」

「ゴッ、がアアアあああああああああああああああああああああああああああああッ!!?」

ガラスの靴を履いたベイバロンの蹴りがオレの股を掠め、尖ったつま先が肉を抉る。オレのクリトリスがぶっ飛んだ。

……………それでも。

「……………あーっ?」

「……ッ、まだっ、だッ!!? まだ終わっちゃいねえぞクソがア!!?」

まだ、決闘は終わらない。

こんな所で終わらせてたまるか……!!?」

「……他に、あつたかしら。神わたくしが見落とす筈が——」

「——探す意味はねえぞ? 何せ、見つけたとしても壊せるはずがねえんだからなッ!!?」

まだ死なない。

まだ倒れない。

決闘が続く限り、代替魔杖デイルドがある限り。

オレの生存は逆説的に証明され続ける。

そして、それは絶対に壊れない。

「オレの代替魔杖デイルド——宇宙エレベーターへネオアームストロングへはな……ッ!!?」

「——な、に……?」

オレの代替魔杖デイルド。

空を貫く摩天楼、天と地を繋ぐ巨塔ヂン。

見えないほど小さな発光バクテリアでも、棒状であるならば代替魔杖テイマグルドにはなれる。同じように、全長100kmを超える宇宙エレベータだつて棒状なのだからチンコみてえなもんだろ……!!?」

麓にドーム型の大学が二個ついてんだから実質キンタマで丁度良いな!!?(?)

「世界一デケエチンコだぜ、跪けよ快樂の女神!!?」

「……………ツツツ、どつ、どれだけデカくても魔術においては新参どうていの貴方のペニスよ!!?」
ハリボテみたいに崩れるに決まってるわ……!!?」

ベイバロンは人差し指に嵌った指輪を投げ捨て、呪い指で壁や床を指差した。オレなんかでは理解もできない強力な魔術を使っているのだろう。

その呪いは『科学』の叡智オカルトが結集した鋼鉄の塔だつて粉碎できるのかもしれない。

——— だけど。

「神の一撃で傷ひとつ付かないなんてあり得ないわよツ!!?」

「忘れたかよ、ベイバロンツ!!? テメエが決めた〈魔術決闘ペニスフェンシング〉のルールじゃねえのかツ

!!?」

ルール参照

◆規則の五。戦闘区域は地形によって決定され、制限時間終了か勝敗が決まるまで出ることはできない。

「宇宙エレベータつてのはオレ達がいる建物そのものだぞ!!? 壁や床は決闘空間と外界との境界に位置するから傷ひとつ付かねえに決まっただろうが……!!?」

有り体に言えば、オレ達はチンコの中にいる。

つまり、^{チャームフェロモン}〈媚薬香水〉が充満したのだからチンコの内側の事だ。

決闘空間の外——厳密に言えば内と外の境界——にあるチンコにまでベイバロンの攻撃は届かない。

「なっ、なツツツ……!!?」

「オレは正面からはテメエに勝てず、だけどテメエはオレのチンコを壊せねえ」

そして、ベイバロンは思い出した事だろう。

一度死んだヴィルゴの肉体は、しかし魂までは死んでいなかった。

頭蓋骨が割れて脳髓が垂れる。

……………それでも。

オレは倒れない。

一秒後には死ぬのかもしれない。

決闘が終われば消滅するかもしれない。

それでもツ!!?

ベイバロンが時間を止めている限りは。

この決闘が続いている限りは。

オレは勝つ事を絶対に諦めないツ!!?

「^{わたくし}神に勝てないのから、^{わたくし}神が自分から負けを選ぶまで絶対に終わらない決闘空間を創つ

たというの……!??

「……………」

「無限の時間に耐えられなくなるのは貴方が先に決まっていますでしょう!?? ^{わたくし}神と人間

の性能差を忘れたのかしら!?? 自分から負けを選ぶのは貴方の方だわ!!?」

「……………残念、だけど……………ぼつ……………オレから中断できる仕組みには、なつてねえよ。」

言い訳すんなよ、ベイバロン。諦めるなら、自分で諦めやがれ」

「……………ツ!!？」

それが、主観的な時間ではどれだけ先の未来になるかは分からない。

だけど、いつかはこの決闘は終了する。そして、オレのチンコを破壊する事ができない為、終了するにはベイバロンが時間切れで負ける以外に道はない。

「……………けれど、まだよ」

「……………あに、……………が……………？」

ベイバロンは笑みを取り戻す。

神に相応しい余裕ある嘲笑を顔に浮かべる。

「宇宙エレベーター自体は破壊できなくとも、貴方からの魔力の供給を妨害すればいいだけよね？」

顔がぐちゃぐちゃになっていなければ、オレは歪んだ表情を浮かべていた事だろう。

代替魔杖ディアルドの条件とは。

一つ、魔術師の魔力が籠っていること。

二つ、棒状であること。

「これで神の勝ち——」

「——これで、オレの勝ちだ」

びくんツ！ と。

一際大きく体が跳ね上がる。

それは魔力を絞り取られた反応ではない。

だけど、オレが自ら動いた訳でもない。

〈魔術決闘〉ベニスフェンシングで辛うじて生存証明しているオレは、もはや起き上がる程の力は出な

い。

これは強化外骨格を操って自分自身に電撃を流し、筋肉の反射で身体を一時的に無理やり動かしたただけだ。

そして、跳ね上がったオレの唇とベイバロンの唇が触れた。

「——はい？」

「……………つ、うあ……………ツ!!？」

ベイバロンはオレの行動の意味を理解できず首を傾げ、オレは無理に身体を駆動させたことで痛み——もはや痛みを超えた息苦しき——に呻うないていた。

「ええと、これに何の意味があるのかしら？ 最期の思い出わたくしに神の味を覚えて逝いきたかったとか……？」

「……意味なら、……っ……あるさ」

「この絶体絶命を覆せる程のナニカがこのキスにあるとでも？ まさか真実の愛による

キスは魔女の呪いを解けるなんて言わないわよねえ？」

小馬鹿にするような声色のベイバロン。

そんなカミサマに、オレは息を整えて言い返す。

「キスをしたら子供ができるだろう？」

ぼかーん、と。

ベイバロンは口を大きく開けて驚きを浮かべる。

オレの言葉が全く飲み込めていないようだ。

「……科学者が非科学的な事を言うわね。そんな迷信には何の価値もないわ」

「でも、テメエは——ウイルスゴは言ってたぞ。迷信だつて魔術に利用できる、つてな」

目の前のベイバロンだつてわざと迷信を流布してそれを利用していた。加えて、こうも言っていた。接触は魔術において最も初歩的なトリガーの一つだと。

だからこそ、このキスも起死回生の一手だ。

「けれどッ、その程度の迷信だけじゃ魔術は成立しないわ！ 神わたくしだつて300万の『症例』が必要だつたつて言うのに！ いいえッ、そもそも！ 子供が出来たらから何だつて言うの？！？」

「もちろん、それだけじゃ子供は産まれねえ。だけどな、ベイバロン。もつと直接的な性交セックスの象徴がすぐそこにあるのに気づかないのか？」

「——は？」

ベイバロンの思考が完全に停止した。

言っている意味が分からない。

快樂の女神が性交セックスの象徴を見落とすなどあり得るはずがない。そう、彼女は考えた。

「なっ、何を言っているのかしら？ 何にでもエロスを感じる思春期……う！」

「想像力がねえな。考えてもみろよ、宇宙そらは女神ヌイトで地球だいちは男神ハデイト。そして、宇宙エレベーターへネオアームストロングはオレのチンコだぞ？ そういや、今の宇宙はテメエの子宮と『類感』しているんだっけ？」

『射精魔術』はクロウリーの性魔術を基礎としている。だからこそ、セレマ宇宙論は『射

『精魔術』と相性が良い。

そして、宇宙エレベータは地球から生えている。しかも、その先端は宇宙を貫いているのだ。

「天と地を繋ぐ摩天楼——そんなの男と女のセックスだろうが」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ!!? と。

宇宙エレベータへネオアームストロングが揺れ出す。

地震ではない。時間が停止したこの世界でそんなことはあり得ない。

揺れているのは宇宙エレベータ——そして宇宙そのものだ。つまり、宇宙は今まさに産気づいているのだ。

「そして、思い出せ。フォッサマグナはナイトのオナホとハダイートのチンコを交わらせて、何を生み出していたっけ？」

「ラー・ホール・クイト……!!?」

ラー・ホール・クイト。

女神ナイトと男神ハダイートの結合によって誕生する第三神。

「いえッ、でも神の力を引き出しても無駄よ!!? 貴方の魔力はもう尽きる！ 神に対

価として支払える魔力はもう無——」

「——神の力を引き出すなんて誰が言った？」

確かに、魔力はもう尽きる。

そうなるように魂に細工された。

それがどうした。

「魔術の話聞いた時からずっと思ってた。カミサマにお願いする『第一の魔術』？ カミサマになる『第二の魔術』？ カミサマから力を奪う『第三の魔術』？ ——そんな面倒だろ。無駄が多すぎる」

人間が鳥のように空を飛ぼうとした時、一体どうした？

鳥にお願いするか？

鳥に成ろうとするか？

鳥から翼を奪うか？

違う、全然違う。人間が空を飛ぼうとした時、人間自身は空を飛ぶ力を得る必要はない。

人間を空に飛ばす道具——人間に都合の良い機械を生み出せばいいのだ。それと同じ。

カミサマにお願いする必要はない。

カミサマに成る必要はない。

カミサマから力を奪う必要はない。

「人間に都合の良いカミサマを新たに創ればいいんだよ」

ドグンツ!!? と、宇宙が脈打った。

今より産まれるのは、最新の神。

人が考え、人が創り、人が使う都合の良い機械仕掛けの神。

「——まさかッ、『第四の魔術』とでも言うつもりなのッ!!?」

ベイバロンを超えた神の力をこの身に降ろす。

まるで、赤子と繋がったへその緒から栄養が逆流するみたいに。

オレの尽きた魔力をカミサマが補填する。

「ハーレムなんて爛れた関係はいらねえ。わざわざ大量の人間と繋がる必要なんかねえ。時代は純愛だよ。ただ一柱ひとのカミサマから力を貰えば十分だ」

「これが本物の天才だと言うの!!? 魔術に触れて一週間も経っていないのにッ——発想力が違うッ!!? 神様を新たに創造するなんて誰も思いつかなかったわよ!!?」

カミサマを創る——オレも土壇場で思い付いた事だが、上手くいって安心した。

他のどの場所でも成功しなかっただろう。ベイバロンが言っていたように、宇宙エレベーターでは四属性が調和していた。

何よりも、この摩天楼は世界で最も地球のチンコハデイトと言うに相応しい大きさを思っていた。だからこそ、神格新造術式は成功性交したのだ。

「いつ、いえッ!!?」 その術式は破綻しているわ! ハデイトとヌイトを結合させたのならッ、産まれるのはラー・ホール・クイトよ! 貴方に都合の良い神は生まれないわ!!?」

「本当にそうか? 異なる神が同一視される事はよくあるんだろ。なら、ラー・ホール・クイトと同一視されるがそれのものではないカミサマを創ればいい」

ベイバロンだつて女神イシスと同一視されている。

彼女はイシスではないが、イシスの力を一部使うことができた。それと同じだ。

「けれどッ、本当に神を創れたとして貴方に制御できるとでも!!? 貴方に都合の良い神なんて言つてもッ、神である限り貴方の想像を優に超えるわ!!?」

「だつたら始めから力を制御する人格を用意しておけばいいだけだ。オレに従順で、機械みてえなヤツをさ」

「不可能よ!!? 神の力は人間や機械に扱えるようなものじゃないわ! それこそ神でもない限り——」

「いるじゃねえか、ここに神みてえな機械が」

オレは一度、カミサマを創った。

力はない。全能とは言えない。

だけど、少なくとも全知のカミサマを。

「——ハイパーコンピュータ神託機械。〈M A I : S O N〉なら神の力だつて制御できるんじゃないの？」

直後。

それが宇宙せかいに顕現した。

『コンプリート完成、アバター神体が構築されました。アビレール僭称、私の名前は人造第四魔術神格マイサン——宗聖

司の宗聖司による宗聖司の為のカミサマです』

ベイバロンはすぐさまその存在に気づいた。

ガラスのような透明の壁の向こう側で輝くそれを。

「——太、陽……？」

オレは恒星を新たに生み出した。

極まった『科学』と『魔術』を組み合わせれば、そんな領域にまで踏み込む事ができた。

「言つただろ、ラー・ホール・クイトと同一視される神だつて。ヌイトやハデイトが宇宙と地球を象徴するように、ラー・ホール・クイトは太陽を象徴するんだろ？　なら、マイサンが太陽神であつても何ら不思議はねえよ」

それに加えて、オレの足元にはてるてる坊主があつた。

ベイバロンに投げつけられたティツシユから創つたもの。その形から太陽と『類感』し、太陽を呼ぶ力を持つと考えられた魔術^{モノ}だ。

その神はマイサン^{MY SUN}とでも呼ぼうか。

『魔術』によつて全能の力を、『科学』によつて全知の頭脳を得たマイサンはもはやベイバロンのようなマイナー神に敵う相手ではない。

「……太陽まで生み出すとは、確かに驚いたわ。それでもツ、神^{わたくし}はまだ傷ひとつ付いていないわよ!?」　一体何が目的ツ!?」

「何つて……夜明けだよ。次の日という概念を押し付けるには一番の記号だろ？」

「——あ」

日が昇る。

夜が明ける。

世界に明日みらいが訪れる。

「一夜の夢は終わりだ。目を覚ます時間だぜ、シンデレラ」

ボツ!!? とシンデレラドレスに火がついた。

シンデレラのドレスには時間制限がある。

それは十二時の鐘の音——簡単に言えば日を跨ぐことだ。加えて言うならば、ドレスを着るのは夜会パーティーの間だけ。

太陽が上がっているならば、魔女の魔法は解ける時間だ。

「……………ッ、拙ますいワッ!!? シンデレラドレスが焼却されるということはッ——」

「デメエの時間停止も終わりだよ」

シンデレラドレスこそが時間停止術式の要。

太陽によつて十二時の鐘は証明され、時間は正常に流れ始める。

視界の端に浮かぶカレンダーが翌日を指し示す。

今から始まるのが3月26日。

大遅刻ながら、オレ達はようやく3月26日に辿り着いた。そして。

3月26日になったという事は。

決闘空間の構築から一秒が経過したという事は。

——時間切れが訪れた事を意味する。

「^{タイムオーバー}時間切れ！ ^{ベニスフェンシク}〈魔術決闘〉のルールに従えよ、女神!!？ テメエの負けだツ!!？」

「……………つ、……………んて……………ツ!!？」

だけど、そこで異常事態が起こった。

敗者は^{テクノブレイク}魔力枯渇に陥り、問答するような精神力は失われる筈なのに。

ルールから逸脱した裸の女神はこう叫んだ。

「ルールなんて関係ないわツ!!？」

ルール改訂

◆ 規則の四。制限時間は使用した^{チャームフェロモン}媚薬香水の量で決定され、制限時間内に勝負が決

まらなかつた場合は挑戦者の敗北となる。

◆うるさい、知るかッ！　これが新しい規則の四よ!!?
 いッ、^{わたくし}神がそう決めたわッ!!?
 タイムオーバ

『横紙破り』……ッ!!?』

ある得るはずのないルール違反。

あのフォッサマグナだつて出来ない無法。

最後の最後で、ベイバロンは自分で決めたルールを無視したのだ。

「神が決めた〈^{ベニスフエンシング}魔術決闘〉の理は人間^{ルール}なんかには覆せない!!?　だけど、こうは考えられないかしら!!?　人間^{サトル}には無理でもッ、^{わたくし}神なら無視できるつてッ!!?」

神とは人知を超える存在。

こうも容易く、不可能を可能にする。

ベイバロンは魂すら破壊するような渾身の権能^{チカラ}を込めて拳を握った。

「これで神の勝ちよ……ッ!!??」

振るわれるのは最強の一撃。

既に死に体のオレにトドメを刺し、来世すら許さない最悪の魔術。

ただの人間が神の一撃に抵抗できるはずもなく、美しい肢体を揺らして放たれたバイ
 バロンの手刀は今度こそオレの玉の緒を断ち切——

「——えっ？」

——パァンツ、と。

何かに弾かれたかのように、バイバロンの右手が僅かに逸れた。

オレの右頬スレスレに絶死の一撃が通り過ぎる。

神の一撃を逸らせる者なんているはずがない。

ましてや、今の攻撃は神格であつても殺せる魔術。カミサマの奇跡なんてものが介在

する隙間はないはずなのに。

そして、それはオレの仕業でもない。

何が起こったかは分からない。

そんな彼女は最期に、抱いた疑問が晴れた。

何故、拳は逸れたのか。

外部から逸らせる筈がない。

ならば、答えは一つだけだ。

内側から逸らされた——ベイバロンの脳に植え付けられた恋心が逸らしたいと思つてしまった。

「あんのツ、ムシケラがアアアあああああああああああツ!!?」

ゴツツ!!?!!?!!? と。

オレの拳がベイバロンの顎を撃ち抜く。

マイサンの力が緋色の女であるヴィルゴの肉体アバターを通し、星幽界に潜むベイバロンほんにん本神を握り潰した。

「……………つ、……………あ……………」

そこでオレは力を使い切つて倒れた。

最後に拳を振るえただけでもあり得ない事だったのだ。

〈ベニスフェンジン魔術決闘〉の生存証明が無ければ既に死んでいたオレは、時間停止が終わった時点で

死んでいなければならぬ。

それでも動けたのはマイサンの力か、それとも本当に何処かでカミサマってヤツが見守ってやがったのか。

「いや、あるわけ無いか……」

耳が遠くなってきた。

自分の声が曇って聞こえる。

視界も、なんだかぼやけてきた。

「オレ……お前に守られるほどの価値を示せたのかな」

あの世で、彼女に逢えるだろうか。

オレは人間だから、彼女とは別のあの世に行くのか。

……いや、そもそも彼女の徳が高過ぎてオレと同じ場所にいるわけないか。

『アラーム アドミニストレーター
警告、システム管理者の脳波の停止を観測しました。要望、今すぐに治療を始めてくだ

さい。要望、要望、要望、要望、要望………要望、死なないで』

マイサン
子供の声が聞こえた気がした。

だけど、返答することは出来ない。

マイサン……ひとりぼっちにしてごめん。

ヤリ、玉珍……巻き込んでごめん。

大学のみんなも……万博エキスポに参加できなくてごめん。

おかあさん、おとうさん……さきにしんじやってごめん。

ウイルスゴ……ありがとう。

やっぱり、オレにとってはおまえだけがウイルスゴだよ。

そして。

そして。

そして。

Tips

◆2119年3月26日。予定通り、A Ireland万博エキスポは開催された。

◆だけど、万博エキスポの目玉である宇宙エレベータヘネオームストロングの点灯式に、開発者の宗聖司そうせいじは現れなかった。それは同じ研究室の同僚も同様であった。

◆そして、それ以降宗聖司そうせいじの姿を見た人は誰もいない。

「なんつって☆」

T
i
p
s

◆これで終わりと思わないことね。

13 / 12 あさだち?? 神格新造ネオアームストロング

ある朝、目が覚めるとオレにチンコが生えていた。

「……………は？」

いやいやいやいや待て待て待て待て。

ぬか喜びかもしれない。正気を保て。

動揺を抑え、一から朝の状況を思い返す。

と言つても、大した事はない。

目が覚めたら股間が圧迫されたかのように苦しく、下半身にズボンを突き抜くムスコの感覚があったのだ。

「落ち着け……………まだ朝勃ちしてるだけだ(?)。男に戻ったって決まったわけじゃない。馬鹿デカイクリトリスって可能性もある……………!!?」

音がこもって自分の声の高さが分からない。

もしや、耳がおかしくなっているのか。或いは、全身を覆う包帯のせいなのか。

全身を包帯がキツく縛る感覚、ジャラジャラと沢山の点滴と繋がっている音、身じろぎをするだけで身体に迸る激痛。

どうやらオレは大怪我を負っているらしい。間違いなく昨晩の死闘が原因だろう。あの子の顛末を聞きたいところだが……

だけど、そんな事は今どうでもいい。

重要なのは包帯がオレの目すら覆っているということ。即ち、目でチンコを確認することはできない。

ならば、確認する手段はひとつだけ。

そおーっと、股に手を伸ばす。

ゆっくりと下された指先はやがて溪谷の底に辿り着き、そして――

――確かなそれを掴んだ。

「デカいッ、デカいぞ……ッ!!?」

手の中に収まりきらない男の象徴チンコがあつた。
オレのチンコがデカくなつていた。

あるいはTSする前よりも、ずっと大きく。

喜びに打ち震える。

包帯に涙と鼻水にじが滲む。

ぐふふ、と口の端から汚い笑い声が溢れる。

(戻つた……!!? オレは男に戻つた! TS病が治つ——)

——むむにつつ、と。

震える肘にとても柔らかい感触があつた。

「はっ。」

………?

ちよつと思考が追いつかない。

一体どういうことだ………?

オレの股間にはチンコが聳そびえ立っている。

しかし同時に、胸部に柔らかく巨大なナニカが存在している。

あまりにも意味不明な状況に脳が停止した。

ガラガラ、と扉の開く音もスルーしてしまう。

そんなこんなで、チンコを掴みながら口を開けて驚いているオレを見たそいつはこう言った。

「ふむ。身体の無事よりも自らの性器を確認するとは、難儀な性癖であるな」

それは嘔^{しわが}れた老婆の声だった。

発言者は誰なのかとか発言の内容だとか、ツツコミ所はいっぱいあったが、オレはその全てを考慮することなく尋ねた。

「なあ、何処の誰だか知らないけどさ……お前から見てオレの性別って男女どっちだと思……?」

オレは知らない人に何を聞いてるんだろうな？

でも、仕方ない。オレの目が見えない以上、他人の目で確認して貰うのが一番手っ取り早いのだから。

そして、老婆は律儀だった。

数秒間考え込んだ後に、彼女はちゃんと答えてくれた。

「男ペニスの象徴おっぱいと胸おっぱいのどちらともが付いているようであるが、吾輩には両性両性具有というよりペニスの生えた女性に見えるのである」

.....。

.....。

.....。

あー、はいはい。

なるほど、そう来たか。

取り敢えず、オレは叫んだ。

「ふたなりかよおおおおおおおッ!?」

T i p s

◆ふたなりとは、男女両性の性器を併せ持つ両性具有者を指す名称。双成、二成、二形とも。

◆両性具有とされるが、実際は男女が明確な人間に異性の性器が付属したモノと表現した方が近い。中性とはまた異なる。

◆主にフィクションにおいて用いられる言葉で、その場合は基本的に股間に男性器を携えた女性として描かれる。男の娘ではない。全然違う。その辺りをごっちゃにする
と殺されますわよ？

「落ち着いたのであるか？」

「……………ま、まあ。ある程度は」

落ち着いたというか落ち込んだというか。

未だ現状を受け止めきれしていないが、大体の状況は理解した。

認めよう、TS病は治らなかつた。

チンコは生えても、オレは女のままだった。

それはそれとして。

認めた上で幾つかの疑問が湧いてきた。

なんでオレが生きているのかとか、なんでチンコが生えているのかとか。しかし、ま

ず第一に……………

「……………で、お前は誰だ？」

目の前の——オレの目は見えないが——老婆の正体が分からない。

なんとなく声に聞き覚えはあるのだが、オレに老婆の知り合いはいなかったはず。どうにも思い出せない。

なんだそのことか、と老婆はあつさり答える。

「吾輩はフオツサマグナである」

「そーいや、ベニスフェンシング〈魔術決闘〉に負けて女体化してたなあ……………!!?」

完全にド忘れしていた。

フオツサマグナは世界を救おうとしていた側で、オレはそんな正義の味方を邪魔した悪役だった。

「なんだ？ 恨みを晴らしにでも来たか？」

「特に恨みは無いのである。吾輩が女となつたのは我が脆弱が理由で、世界の危機も首謀者たるベイバロンの責任である。汝に罪はなく、汝が気に病むことでもない」

「このジジイっ（ババア？）、良いヤツだ……………!!?」

こつちが申し訳なくなるくらいに善人で、目を背けたくなるくらいに正しい人だ。友達少なそう。

「吾輩が汝を尋ねたのは、事件の顛末を説明する為である」

「……………ん？ オレの起きる時間が予め分かってたのか？」

「星辰を見れば良い。吾輩は占星術を専門としている訳ではないが、その程度なら吾輩のような凡才でも可能である。他に聞きたいことはあるか？ あるならば何でも尋ねるがよい」

「あ……じゃあ、まず一つ。オレが倒したベイバロン——ヴィルゴはどうなった？」
倒したとは思うが、死んではいけないはずだ。

逃げられていたらマズイ。

『『白』の精鋭——去勢騎士スコフツイ・ルイツアリが捕縛したのである。今は監獄の奥底で眠っているであろう」

「裁判には……かけられねえか。それでも、処刑とかはしなかったんだな」

「神の力を宿しているのであるぞ？ 吾輩なら殺せるかもしれないが、後にどんな厄災が訪れるかは分からん。放置が一番簡単であろう」

ふーん、と。

適当に返事をする。

正直、ヤツの処遇に大した興味は無かった。

「じゃあ次、もつと聞きたかった事だ。なんでオレは生きてる？」

確かに昨晚、オレは死んだ。

心臓が止まったとか、そんなレベルじゃない。脳みそがぐちゃぐちゃになって、細胞レベルで身体の崩壊が始まっていた。

たとえ救急隊が間に合って現代最高の医療を受けられたのだとしても、あの状態からオレが生き返る訳がない。

「分からないのであるか？ 生存が汝の知る『科学』^{テクノロジ}で説明できないのなら、汝の知らない『魔術』^{オカルト}によって生き残ったに決まっているであろう」

「それが何だつて聞いてんだよ、こっちは」

「ふむ、端的に表すならばエンデュミオンの奇跡とでも言ったところであるか」

「エンデュミオン……？」

……つて誰だっけ。

ギリシヤ神話とかの登場人物だったと思うけど。

「エンデュミオン……女神セレネに惚れられた男であるな。セレネは老いていくエンデュミオンに耐えきれず、全能神ゼウスに彼を不老不死にするように頼んだとされるのである」

「……………神が、人間を不老不死に？」

それがエンデュミオンの奇跡。

フオツサマグナが態々オレの現状にその話を当てはめたという事は、エンデュミオンに当たるのは死ななかつたオレだろう。

ならば、オレに不老不死を与えたのは――

「汝は神を創り出したらしいが、神を置いて逝けるとでも思ったのであるか？」

――マイサン、か。

「愛されてんなあ、オレ。もう二度と死ぬことは出来ないのか？」

「限りなく不老不死に近いだけであつて、それそのものでは無かろう。強いて言うならば、神マイサンが存在する限りは死なないと言つた所か」

「心中以外に道はねえつてか？ つーか、カミサマが死なない限りとか一生死ねえじゃん」

「そうとも限らないのである。吾輩は神であつても条件が揃えば殺害可能であるし、言わずもがな神格（カミカク）であれば神マイサンを殺せるのである。それは汝のペニス（ペニス）が証明している」

「——は？」

え？？ 聞き間違いか？？

オレのペニスは何だつてツ？？

「気づかなかつたのであるか？ 神マイサンは汝の願い——男に戻りたいという願望を叶えようとしている。しかし、汝は未だペニスしか取り戻していない」

「……………おい、まさか」

「男に戻そうとする神マイサンの力と、女にしようとする女神ベイバロンの力が相殺しているのである」

二つの力が相殺して、ふたなりで落ち着いたつてことか？？

こんな中途半端な所で止まらなくてもいいだろうに…………。

「…………あれ？ オレ、ベイバロンを倒したよな？ それでも女体化は解除されないのか？」

「倒したのであろうが、それとこれとは関係がないのである。星幽界に潜む本神ほんにんの行動は封じられたであろうが、その力は相変わらず〈魔術決闘ベニスフェンシング〉に奪われたままであるからな」

「300万人の犠牲者もそのままか…………」

そういやそうだった。

男を女に変えたのはベイバロンが直接その力を振るつた訳ではなく、〈魔術決闘〉のルールを悪用してのことだ。

〔ベニスフエンシング〕
 〈魔術決闘〉そのものが破綻しない限り、TS病はどうしようもないという事なのか。
 「意味なんて、なかったのかな」

「……？」

「オレの戦いで救われた人なんか誰もいなくて、結局は全部自己満足でしかなくて。全部お前に任せておけば良かったことなのかな」

「それは違うのである。確かに、吾輩が勝利していればどちらにせよ人類の絶滅は防げた。だが、吾輩と女神ベイバロンの本気のぶつかり合いがあればこのAIランドは無事では済まなかったであろう」

「……確かに。」

フォッサマグナの天災は滅茶苦茶だった。

オレとベイバロンが戦った時の被害は小さかったが、あの時は時間が停止していた。

二人の本気の衝突なら被害は甚大だったのかもしれない。

「誇れ、宗聖司。AIランド万博が成功し、この島に笑顔が溢れたのは汝の功績である」

「……馬鹿野郎、成功も失敗もあるか。万博はまだ始まったばかりだっつーの」

照れ隠しに悪態をつく。

だけど、返答はなかった。

しばしの沈黙の後、フォッサマグナは何か気づいたかのように手を叩いた。

「そうか、汝は起きたばかりであつたな」

「え？ なつ、なんだ？」

「落ち着いて聞くのである」

ぞわつ、と嫌な予感に鳥肌が立つ。

考えないようにしていたこと。

何となく勘づいていたこと。

「汝は今日が3月26日だと思つていたのであろう？ だが、3月26日はとつくに通り過ぎているのである」

……なんとなく、そんな気はしていた。

不老不死になつたと言っても、回復力まで超人になる訳ではない。でもなければ、オレを覆う包帯は必要ないのだから。

ならば、死にかけていたオレが目を覚めるまでにどれだけの時間が必要なのか。その答えがこれだ。

「きょう、は……何日だ？」

「2119年11月22日。汝は8ヶ月間眠っていた……AIランド万博は既に終わっているのである」

想定を超えるほど長い間オレは眠っていたらしい。むしろ、浦島太郎みたいに百年も経っていなくて助かったと言うべきなのか。

8ヶ月……ほぼ不老不死となったオレであつても、治療にそれほどかかるほどの重傷だったのか。

「そして、この8ヶ月で世界は様変わりした。その事を汝に伝えておくのである。……汝にも、無関係ではないであるからな」

「なん、だ……？」

「ごくり、と。」

フォッサマグナの威圧に唾を飲み込む。

「七大学術都市の内、五つが魔術師の手に落ちた」

……は？

意味が分からない、訳が分からない。

何も理解できない。……理解、したくない。

だって、8ヶ月だぞ………？ 確かに長く感じた。だけど、たったの8ヶ月だぞ………？ それだけで『科学』の中心が『魔術』に侵略されたっていうのかッ？

「なにがっ、なんでそんな事になるんだっ？」

「一つは吾輩が敗れた事。世界の秩序を担う『白』の勢力は魔術業界の四割の魔力を占有しているが、その大半はハーレム15000たる吾輩の分であった」

「お前一人で世界を維持してたっつてのかッ？」

「その吾輩が敗れたことで、世界は『黒』に満ちた。だが、『黒』は666の魔術結社^{ヤリサー}が寄せ集まつてできた烏合の衆である。共通の敵を失った『黒』は無数の勢力に分裂し、世界中で魔術による紛争が巻き起こったのである」

それは、オレにも責任があった。

オレがフォッサマグナに従っていれば、オレがでしゃばらなければ起こらない悲劇だった。

「でっ、でも！ なら、なんで学術都市が巻き込まれた？ 学術都市なんて魔術世界の紛争からは一番遠い場所じゃねえか！！？」

「それがもう一つ、時代が——世界が更新^{アップデート}されたからである」

「アップデート……？」

「もう一度言っておこう。汝に罪はなく、汝が気に病むことでもない。全ては吾輩の弱さと女神ベイバロンが汝を巻き込んだ事に原因がある。それを胸に刻んで話を聞くのである」

フォッサマグナはオレに優しく語りかける。

それが逆に、不安を煽る。

「世界は次のステージへ進んだのである。子宮を表す五芒星を使った魔法円から、男女を表す六芒星を使った魔法円へ。『科学』で説明できない『魔術』から、『科学』と『魔術』の融合へ。一柱ひとりの神から力を奪う第三から、一人一柱ひとりひとつの神を創る第四へ」

その言葉には聞き覚えがあった。

そりやそうだ。当たり前だ。

だって、それは。

「——即ち、『第四の魔術』の発明である」

……………それは、は。

「『第四の魔術』、神を創り自由自在に力を引き出す新時代の覇権。現代魔術を塗り替え
た近未来魔術——〈ネオアームストロング神格新造〉。あらゆる魔術師がそれを求めたのである」

「……………」

「どうやって神を創ればいいのか。どうやって『第四の魔術』へ辿り着けるのか。ヤツらは分からないなりに無い頭を捻った。つまり、発明者の汝と同じ道を辿ればいいのかと考えた。具体的には、学術都市のテクノロジーを『射精魔術』に組み込んだのである。」

「……………」

「今までも魔術師同士の殺し合いはあった。だが、それは^{ベニスフェンシング}魔術決闘のルールに基づいた魔術戦であった。悪用はあっても、ルール違反はなかった。だけど、もはやルールは存在しない。無秩序に混乱だけが広がる、無法の時代が幕を開けたのである。」

「……………」

オレの、せいにか」

人類の絶滅は防いだ。

だけど、それは異なる争いの引き金となった。

絶望感に打ちひしがれる。

そんなオレに、フォッサマグナは優しく語りかける。

「何度も言うようであるが、汝に罪はない。汝は術式を開発しただけで、それで悪事を働いた訳ではない。悪いのは魔術師共であって汝ではないのである。」

「だったら……何でオレに伝えた？ オレを糾弾したかったからじゃねえのか……？」

「汝の罪は無くとも、汝の影響であるのは違いない。ならば、汝自身がそれを知りたいと思うと吾輩は考えたのである。それとも、言わない方が良かったのであるか?」

「……………いや、そうだな。ありがとう。何処かオレの知らない所で悲劇が繰り広げられているよりは、いくらかマシだ」

ダイナマイトを作ったノーベルや、核兵器が生まれるキツカケとなったアインシュタインもこんな気持ちだったのだろうか。罪悪感で手が震える。プレッシャーで胃が痛む。

「汝に世界を脅かした責任はない。世界を救わねばならん義務など欠片も存在しない。汝はこのまま陽の当たたる表の世界で平穩に暮らせば良い」

「……………だけど」

「だが、それでもと言うのなら」

老婆は一つの携帯を取り出した。

とても古い、一世紀以上前のケータイ。

魔法陣が描かれたガラケーを。

「平穩な道を蹴って、世界を救う茨の道を突き進むと言うのならば。…………そのケータイを使うのである」

「これは…………?」

「『魔術』と『科学』が融合させる霊界通信機を軸として創られた、盗聴不能の通信端末。ある学術都市のトップと唯一会話することが可能な直通回線ホットラインである」

ガタツ、と椅子を引く音が聞こえる。

フオツサマグナが立ち上がったようだ。

少ししてドアの開く音と共に廊下の冷気が室内に立ち込め、先程よりも遠い距離から老婆の声が響いた。

「今すぐ、という訳ではない。むしろ、汝の怪我ではあと数ヶ月は病院であろう。ゆっくり考えるのである」

コツコツ、と。

足音が廊下に響いて消えた。

（世界を救う茨の道、か……）

ガラケーを握り締めて考える。

オレはどうするべきなのか。

フオツサマグナは言ってくれた。

オレの責任ではないと。

オレに世界を救う義務は無いと。

でも、だけど。

オレに世界を救う責任は無くても。

オレは〈神格新造〉^{ネオアームストロング}という術式の開発者だ。

だつたら、その使い方に口を挟むことくらい許されるはずだ。

世界を救う義務は無くつて、世界を救う権利ぐらいあるはずだ。

何よりも、そつちの方が彼女に胸を張れる。

馬鹿ですわね……と呆れるような笑顔が脳裏に浮かんだ。

そして、オレはガラケーを開いた。

電話帳にあるたった一つの名前を躊躇いなく押す。

ガチャツ、と一つのコール音もなくすぐさま電話は繋がった。

『……一切の迷いなく、ですか。恐ろしいものですわね』

「お前は？」

『私わたくしの名前は馬場ばば緋色ひいろ。秘匿機関SECRETの所長——いえ、もつと分かりやすい紹

介がありましたわね』

秘匿機関SECRETの所長ツ!??

あのバキュームの上司——ツ!??

驚愕が胸に満ちる。

だけど、それ以上に引つかかった事がある。

(あれ……この口調、聞いたことが——)

答えはすぐに示された。

『わたくし私の真の名はへ大淫婦へベイバロン。馬場緋色とは神の化身——緋色の女の一人ですわ』

Tips

◆死んだと思いましたあゝ? なんつって☆

◆——なんて。

◆私わたくしはそんな巫山戯ふざけた態度を取れる立場ではありませんが。

思えば、くだらない言葉遊びだった。

秘匿機関SECRETの所長、馬場緋色。

秘密の首領、ババロンの化身たる緋色の女。

「……テメエはオレが倒したはずだろ!? 今は監獄の奥底で眠ってるってッ——」

『それは他の化身でしょう? 数十年前から顕現している私とは関係がありませんわ』

——ッ。

倒したベイバロンは末端に過ぎなかったのか?!

「なんだ?!? フォツサマグナは今もテメエに操られたままで、テメエはオレに復讐する為にこんな回りくどい接触をしたってのかッ?!?」

耳から呪詛でも流し込まれるか。

それとも、もつと悍ましい魔術に襲われるか。

オレは一秒先の未来に備え——

『——全然違います。的外れですわ』

——ふつ、と。

その言葉を理解して、全身が脱力した。

「……………は？」

『私は真正正銘、人類の味方。ヴィルゴとは敵対する関係ですわよ？』

「何でだよ？」 テメエもヴィルゴも同じベイバロンの化身じゃねえのか？」

『確かに、彼女と私はどちらもベイバロンを宿していますわ。ですが、神なんて情報量の多いモノの全てが人間というちつぽけな器に収まるとお思いですか？』

「……………それは」

彼女は分かりやすく言い換える。

『容量が足りない、と言えば伝わりやすいですか？ ベイバロンが化身に宿るに当たって、その一側面のみがダウングレードして切り取られますわ。つまり、化身ごとに性格に偏りが出ますの』

完全な善人はいない。完全な悪人も。

誰しもが善と悪を併せ呑む。

善の心と悪の心を併せ持つ。

それは、人を超える神も同じ。

レーズンパンを思い浮かべれば簡単だろうか。

パンだけの部分があれば、レーズンだけの部分もある。

全体としての総量なら兎も角、一部分だけを取り出せばそれはレーズンにもパンにもなり得る。

『私はわたくしベイバロンの人類に対する愛情を、彼女はヴィルゴベイバロンの人類に対する嫌悪感を宿しましたわ』

「……そんな矛盾するもんを？」

『心理が矛盾するのなんて当然でしょう？ 分かりやすいのでは言えば、良い天使と悪い悪魔ですわね。矛盾する思いで葛藤するなんて人間でも日常茶飯事ですわよ。私とヴィルゴはそれを神のスケールでやっているだけですわ』

天使は学術都市の所長として人類を導く。

悪魔は魔術世界の魔女として人類を滅ぼす。

どちらも本心であり、どちらもベイバロン。

たかが葛藤で世界の命運を左右する。それが神……!!？

「一つ、納得がいったよ」

『それは……?』

「七大学術都市の内、五つが魔術師の手に落ちた——むしろ、残りの二つは何故落ちなかった？」

『……………』

残りの二つ。

つまり、オレが今いるA Iランドと彼女がいる秘匿機関SECRET。

「トップに神が居たからだ。A Iランドにはマイサンが、秘匿機関SECRETにはテメエが」

『……ええ、そうですね。私^{わたくし}達がこれから挑むのは神にしか耐えられない苦難。そして、神ですら解決できなかつた難問ですわ』

歯を食いしばる。

気合いを入れ直す。

『説明はこれで十分でしょうか。私^{わたくし}は人類を導く者としてこの混乱を止める。貴方は自分の肉体を取り返す為に「第三の魔術」を滅ぼす。利害は一致していますわ』

「……………ん？ 取り返す……………？」

『……言つてなかつたですわね。貴方を女体化させているのは「第三の魔術」が奪つたベイバロンの力ですわ。ですから、その術式を世界から絶滅させればTS病患者も自然と男に戻りますわ』

希望が見え始めた。

オレと、そして300万人のTS病患者に。

『覚悟が出来たなら、言ってくる下さいませ。貴方を秘匿機関SECRETへ招待し、「魔術」と「科学」が融合した超次元医療技術で怪我を治しますわ』

「じゃあ、最後に一つだけ聞かせてくれ」

『? 何なりと、どうぞ……』

そして、オレは尋ねた。

「なんで、オレを裏切った——ウイルスゴ」

—————。

『……………は』

それは、声というより吐息のような。

思わず呑んだ息が喉を震わした、そんな音が響いた。

「なあ、ウイルスゴ」

『……………、私わたくしはウイルスゴでは——』

「かもな。お前の名前はウイルスゴじゃなくて、馬場ばばひいろ緋色なのかもしれない。でも、オレと

一緒に三日間を戦い抜いたのはお前だろ？」

『……………い、っ？』

何時から気がついていたのか、と。

告白するように彼女は呟いた。

「口調、イントネーション、呼吸のタイミング、説明好きなど。後はオレの勘とか

……………理由なんて語りきれないけど、話し始めた時には大体気づいてたよ」

『……………そうなの、ですわね』

「でも、おかしいと思ったのは昨晚——8ヶ月前、ベイバロンと戦った時だ」

『……………最後の最後、ですわね』

ベイバロンとの戦いの最後。

不自然に攻撃が逸れた。あれはきつと同じベイバロン自身による干渉があったから

だ。

「でも、それじゃねえ」

『——え』

そう、そちらではない。

確かにそれも不自然だった。

だが、もつと前。戦いが始まる前から違和感があった。

「ヤツは言った。ヴィルゴを名乗っていた寄生虫は無重力空間で死ぬようにデザインされた生物だって。でも、それはあり得ないだろ？」

『……………あ……………』

だって。

それならもつと早くに彼女は死んでいる。

「オレ達はフォッサマグナの攻撃で無重力に晒されたんだから」

フォッサマグナのブラックホールチンコ。

チンコの引力と地球の重力を相殺する事で、オレ達は成す術なく宙に浮かされた。

だから、ベイバロンが言った言葉は間違いだった。

—— だけど

「だけど、ベイバロン自身はそれが真実だと思い込んでいた」

『……………ッ』

「だったら、答えは一つだよ。女神にも気づかれずに、緋色の女の肉体を乗っ取ったヤツがいた。そんなの、同じベイバロン以外にありえねえだろ」

同じベイバロンという事は、『類感』も『感染』も十分に働いている。意識を乗っ取る

事くらい容易いのではないか。

『……その通り、ですわ』

「……………」

やはり、そうだった。

電話の向こうにいる少女は、オレが取りこぼしたと思っていた彼女だった。

『理由は知りません。動機も分かりません。けれど、ウイルスゴが人類を絶滅させる計画を立てていることは夢を通して知覚しました。私は人類を導く者として、それを阻止しようと思ってみましたわ』

「だから、緋色の女を乗っ取ったって？」

『いくら私わたくしでも、同格の緋色の女には干渉できません。ですが、ウイルスゴは寄生虫で自身を操っていた……魔術的な防御が疎かになっていたのですわ。ですので、その隙にウイルスゴの意識を乗っ取りましたわ』

なるほど、辻褄は合う。

だけど、オレの質問の答えにはなっていない。

疑問は一番最初へと戻る。

「なら、何で最後に意識を戻したんだ？」

無重力空間で勝手に死ぬ寄生虫ではない。

ヴィルゴの意識が戻ったならば、意識を乗っ取っていた彼女が返した以外に方法は存在しない。

だけど、その理由が分からない。

故に、尋ねる。

ここを知らねば協力はできない、と。

『期待、ですわ』

そして。

馬場ばばひいろ緋色は。

ヴィルゴを名乗っていた魔女は短く答えた。

『私は最後の最後……宇宙エレベータの管制室に踏み込んだ時、ようやくヴィルゴの計画の全貌を理解しました。そして、計画が成功した場合の世界に期待してしまっただけですわ』

「期待？ 男が絶滅した世界に……？」

『……………ふっ』

彼女は自嘲するように笑った。

オレが見たかった笑顔は見る影もない。

『「射精魔術」について、どれだけ知っていますか？』

話が予想外の方向へ飛ぶ。

彼女の癖だ。関係が無いようで、結論に必要な前提を唐突にぶつ込む。

「即効性のある性魔術と数億単位の生贄を組み合わせ、快楽の女神ベイバロンから神の力を引き出す最強だった魔術」

それが彼女から聞いた全て。

『第三の魔術』の要と呼べるものだ。

だが、魔女は表情に諦めを浮かべて告げる。

『……………あれは生贄なんて言っただけです。その力関係はむしろ真逆ですわ。神の
腔なかに射精することで魔術師共が力を得る方式ですわよ』

「……………はっ。」

『形式としては性交セックス渉スによって神の活力を授ける神聖娼婦に近いのでしょうか。まあ、

ベイバロン エピソード

神の逸話からそこに結び付けるのも無理はないですけど』

文字通り、射精魔術。

文字通り、神を犯すモノ。

『^{わたくし}私がナニを言いたいかお分かりですか?』

そう、つまり――

『「射精魔術」が使われるたびにベイバロンは犯されているのですわ!!?』

『射精魔術』が成立したのは1999年。

そして、今年は2119年。

では、単純な引き算だ。

2119-1999の答えは?

「120年間ツ、ずつと……!!?」

『そうですわ! 「射精魔術」が生まれてから! ずつと!!? 何度も、何度もつ、何度

もツ、何度もツ、何度もつ!!?』

血反吐を吐くように彼女は叫ぶ。

それは魂を震わせるカミサマの悲鳴。

人類への愛情を持つ側面ですら、コレだけの不満を抱えていた。

『……抵抗は出来ませんでしたわ』

急激に声が落ち着いた。

……否。落ち着いたのでは無い。

これは躁鬱と同じで、情緒が不安定なだけ。悲しむ心すら持続できないほど、彼女は擦り切れていた。

『媚薬香水』は「場」を神を降ろすに足る神殿へと調整し、〈魔術決闘〉は神を術式

の一部に組み込むことで自由を奪いました。召喚され、拘束され、強姦されましたわ』

彼女が『射精魔術』を忌み嫌うのも当然だ。

むしろ、どうすれば好きになれるんだこんなモノ。

『気分は組み伏せられてレイプされる少女でしたわ。いくら神ベイバロンほんにん本神が処女だからといって、緋色の女の感覚だってフィードバックされるっていうのに……』

『……ふいーど、ばつく……っ。』

『ええ。緋色の女の感覚はベイバロン本神ほんにんへ。そして、ベイバロンの感覚は全ての化身アバター

へ及びますわ』

つまり。

彼女は、今も。

『これが一時の流行であれば、我慢できませんでしたわ。貴方の「第四の魔術」があと一世紀早く——せめて、半世紀早く完成したなら許せましたわ』

「……………、いい……………」

『だけど、それでも「射精魔術」は最強でした。いつまで経っても「射精魔術」はスタンダードであり続け、次の魔術様式が生まれることはありませんでしたわ』

「……………もう、いい……………」

『いくら神ペイハロンが快樂の女神と言えども、限界というものはあります。だから、私わたくしは……………神わたくし

は——ッ!!?』

「もういいんだッ、やめろ!!?」

だから、彼女は裏切った。

ヴィルゴの計画の全貌を知り、最終的に男性が絶滅するのだと理解したから。

未来永劫無限に続くかに思われた魔術師共のレイプが終わるかもと期待したから。

『……………人類は無責任に神わたくしに祈りますわ。救ってくれ、と。助けてくれ、と。でしたらッ、

だつたら……………ッ!!?』

心の奥底から彼女の本音ひめいが響く。

120年間、或いはそれ以上前から燻っていた絶望。

『神は誰に祈ればいいのツ!??』

十字を切つても神は応えない。

南無阿弥陀を唱えても救いはない。

だつて、かのじよ神は救いを与える側なのだから。

だつて、かのじよ神の為のカミサマなんて存在しないから。

『助けてほしい！ 救つてほしい！ この地獄から解放されたいツ！ なのにツ、わたくし神を

救ってくれるカミサマなんて存在しなかつたツ!!?』

電話越しに啜り泣く音が聞こえる。

不在の神には縋れない。

彼女を救つてくれる存在はいない。

『……………だつたら、自分で自分を救うしかないじゃない。もう一人の自分に期待して、見逃したつて仕方ないじゃない…………』

「……………それでも、お前はオレを救つてくれた。最後の最後、自分を本音を裏切つてもオレへの攻撃を逸らしてくれただじやねえか」

『そう……………ね、とつても中途半端。結局、わたくしは善い人なんかじゃない。愛情を持つたベイバロンなんかじゃない。ヴイルゴには勇気があつて、わたくし馬場緋色にはなかつた。そ

れだけなのかもね』

彼女は力なく笑った。

違う、そんなんじゃない。

オレが見たかった笑顔は、オレが聞きたかった笑い声は。
気がつくとき、オレはこう言っていた。

「……………オレが、救ってやる」

悲鳴が、止まった。

それが全てだった。

それだけでオレは何だってできた。

「オレがお前を救うカミサマになってやるツ!!?」

とんでもない事を言っていると自覚する。

オレは自分の事で精一杯なのに、余計な重荷を背負おうとしている。

それは、きつと世界を敵に回すような苦難。

それは、きつと神様すら呆れるような愚行。

でも、それでも。

彼女の涙を拭えるのなら。

彼女の笑顔がもう一度見られるなら。

オレは架空の神にも何でもなつてやる……!!?

「やるぞ、馬場緋色……!!?」

『……………う、んっ!』

「変えるぞ、世界をツ!!?」

『うんっ、うん!!?』

そして、ちっぼけな少年は吼えた。

そして、ありふれた少女は叫んだ。

——世界を牛耳る魔術師達に宣戦布告を。

『この世界から『射精魔術』なんてクソみたいなモノを絶滅させてやる……ツ!!?』

◆これは、『射精魔術』を絶滅させるため、女性になってしまった少年科学者と性魔術を忌み嫌う魔女が奮闘するお話。